

# カコ博士 合同誌



DOJIN  
**R18**  
成人向け

18歳未満の  
購入・閲覧禁止

Dr.Kako  
Sukebe FANBOOK



# カコ博士合同誌【目次】

表紙	.....	しこりば
裏表紙	.....	にのじ
【カラー】		
P5	.....	にのじ
P9	.....	森林浴場
P10	.....	ミリ
P12	.....	闇おきやお
P13	.....	のろり
P15	.....	ポムギ
P19	.....	ひたち
P20	.....	がんもどき
P21	.....	コカ茶
P22	.....	はづきガレット
P24	.....	八九寺けぬた

## 【モノクロ】

P25	.....	奴佐辺栄一
P33	.....	マメゾウ
P41	.....	ジェームス山
P47	.....	フロフキ
P55	.....	ビタミンミー
P57	.....	絶対絶命
P61	.....	エクイテス
P66	.....	しこりば
P70	.....	にのじ
P71	.....	間間山
P79	.....	イナंकフル
P87	.....	小怪
P95	.....	(豆)
P103	.....	シローフ
P111	.....	エリンギ竜Ryu
【小説】		
P114	.....	たると
P122	.....	スカーレットG
P134	.....	せがれきんぐ
P140	.....	がま回
P148	.....	森の白熊
P156	.....	WAROSU
P162	.....	たなか
P175	.....	あとがき

きゃあっ!!

!?

どおしましたあっ!!  
カコさん——ッ!?

なっ!!  
なぜそのような姿にい!!  
すばらしいっ!!

その:  
ホルスタインの遺伝子サンプル  
からオーロックスについて  
調べていたら手違いで  
こんな姿に...

すばらしい?!

どんな手違いですか

それになんだか  
胸も張ってしまったって...  
どうしたら...

...それは  
もちろん...

70ルッ

70ルッ

が

バ

ミルクですよ!  
カコさんっ!!

ふえ?

ウシ博士  
の  
ミルク♡

作: にのじ

ミルクを  
できるだけ  
たくさん出せば  
きつと元の姿に戻る  
はずです！

——ッ!?  
あっ！やだ！待って!!  
うそこの感じ——ッ!?

な何を根拠に!?

あゝ♡

だめっ!!  
出ちゃうううう——ッ!!

それに  
ミルクだなんて  
そんなの出るわけ——

♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

ビュビュ♡  
ギョ♡♡

ビュ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

はあ…♡はあ…♡  
まさかこんな  
出るなんて…♡

ハ——♡♡♡  
ハ——♡♡♡

いいですね？

ええっ!?

…って何を  
出してるんですかあっ!!

…カコさん  
それじゃあ  
全然足りませんよ?  
これを使って  
もっとたくさん  
出せるようにします…

お♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

うっ…  
おっ…

ここんな…

研究室の中でなんて…  
信じられないわ…♡



でもほら見ててください！  
カコさんのおっぱいから  
こんなにミルクが出てますよ！

あっ♡  
あっ♡

ちよっ♡んっ♡  
これじゃっ♡  
ほんとに牛みたいで♡  
あんっ♡



ああっ！  
もうだめです！！

えっ!?

受け取って  
ください  
僕のミルク！

待って！  
待ってください！！

くっ!!  
出ますっ!!

あっ♡

びゅん

びゅん

んぶっ!!

ビュルルルル

はあ…  
自分で出したのもちやんと  
飲んでくださいね

んぐぐ!!  
んー!!



はあ…  
ミルク…

出され  
ちゃった…

…でも意外と  
おいしかった…



やっぱり  
戻らない  
じゃないですかあ!!  
どういふことか  
きちんと説明  
してくださいねっ!!

あれえ…?

その後  
時間が経ったら  
なぜか戻っていた

今回の  
現象についても  
研究  
しなくちゃ!

おわり











@sasimilli



@yami-okyaostini



セルリアンも大好きカコ博士♥

# セルリアンも大好きカコ博士2



4610



あ.あ.あ.め...

うう...  
離して...

illust:ポムギ

嫌  
あ  
ん!

あ

あ  
ん  
ん  
ん

あ  
ん  
ん  
ん



胸：張って...ッ

ん...ッ

ム

トク  
トク

ぎゅむうらうら









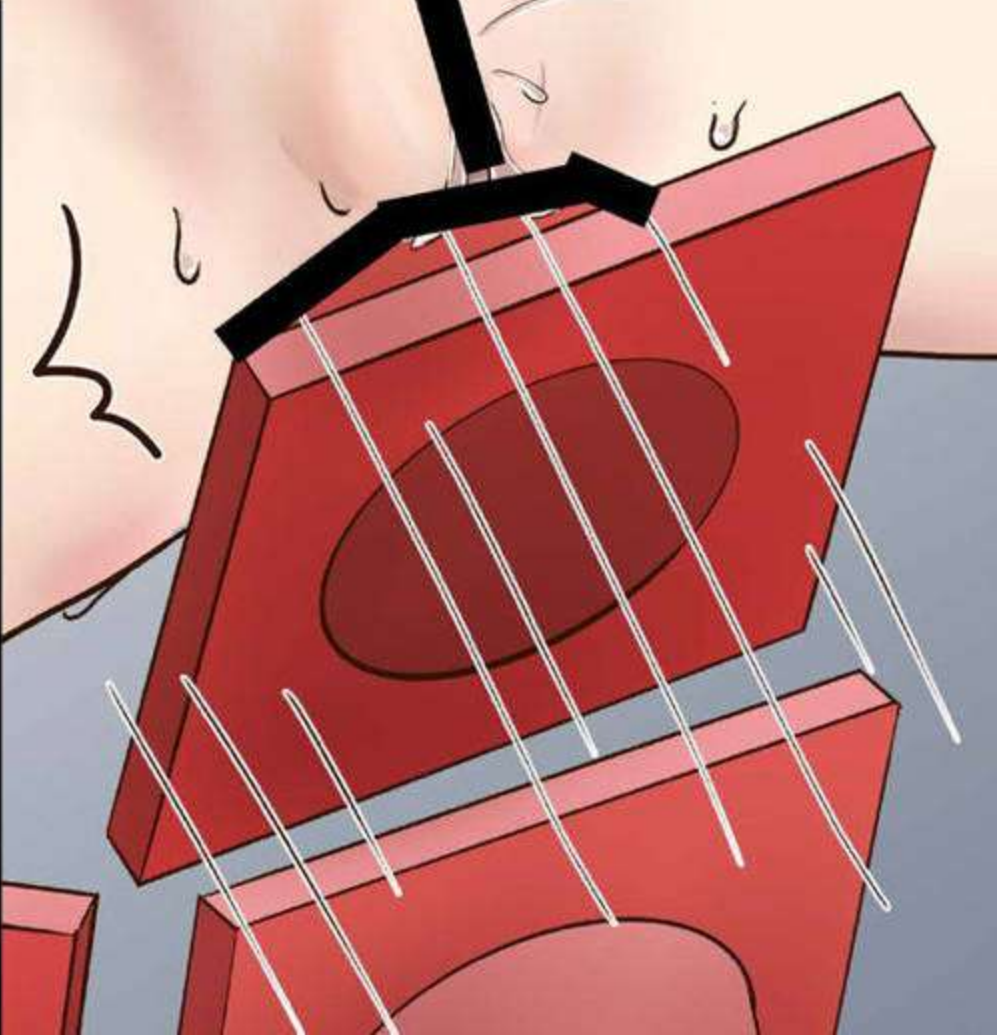
某日  
ジャパリパーク  
動物研究所



作:がんもどき



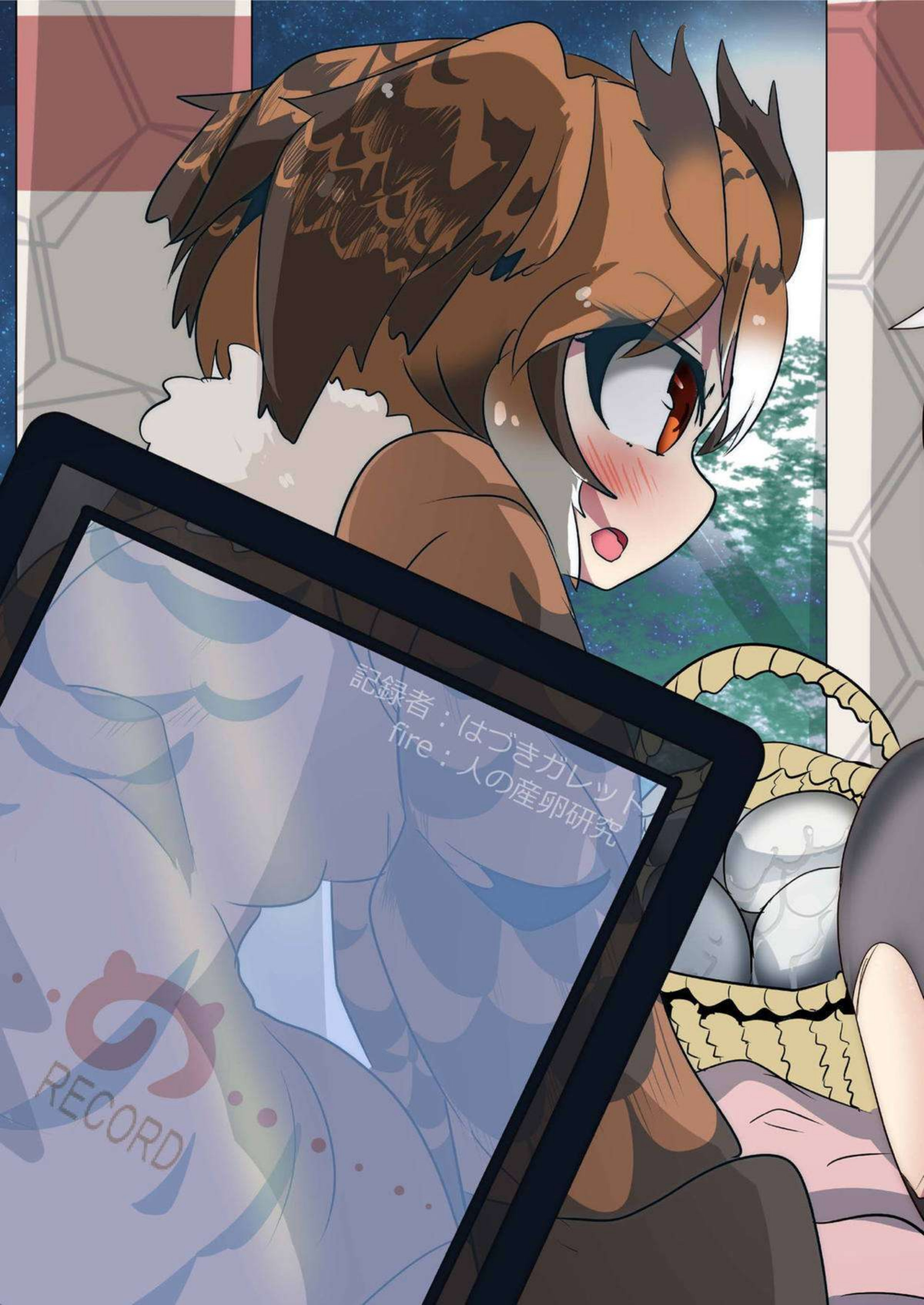
セルリアンは退治され  
無事救助された



カコ博士が仕事時間中に抜け出してトイレで自慰するだけ







記録者：はづきガレット  
fire：人の産卵研究

RECORD

すげえ...♡

ああう...

お、お好み焼き...

\*寝言

旅館 じゃぱり荘

オオウミガラス  
下着はちゃんと  
籠の中に入れなさい

# カヨちゃんに IN♥PENIS!

いんぺにす



やさべえいち  
奴佐辺 栄一

はーい!!

カポーン

飼育員のいない彼女は  
私が保護を担当していて  
今日は彼女の希望で  
園内の温泉旅館に  
旅行に来ている

彼女は私の研究で  
復活した絶滅動物  
「オオウミガラス」の  
アニマルガール



広いよー!

——といっても、  
この旅行に至る経緯は  
あまり楽しく話せる  
話ではないのだけれど



絶滅種のアニマルガールは動物の生態研究のため出産を奨励されていてパークはスタッフから「つがい」協力者を募っている

(28)



(43)



(31)



(38)

精子提供による体外受精のほか「アニマルガールとのセックス」もその手段として黙認されており候補者にはパーク出資者と所縁のある者も少なくない

オオウミガラスも研究のため出産が期待されている種であり同時に彼女自身も妊娠を希望している

娘のように育ててきた彼女が知らない男の欲望のままにその身体を貪られるかと思うと私の心中は穏やかではない

もうっ!!

カコさん  
ってば!!

カコさんは細かいことを考え過ぎだよ

せっかくこんな気持ちいい所でふたりきりになれたんだから…

—しゅらぽ♡

ね?

うず…♡

もじ♡

もじ♡



ぬふ、ぶ、う

そんなことを思う  
私自身だって  
アニマルガールへの  
愛欲に溺れたひとり



ぽた...

一度身体の関係を  
持ってしまったからは  
白く滑らかな肢体に、  
柔らかく暖かい舌に、  
細長い指先に、滴る雫に――



あ

んん

ぽた...

オオウミガラスの身体を――  
「つながり」を、本能は求め続け  
とても「母親代わり」など  
勤められない有様になっ  
てしまった――

待

ぽた...

保護者としても  
研究者としても  
情けない話である

もし私が  
男だったら  
彼女に子を授けて  
あげることが  
できたなら――  
もう少し  
単純に彼女を  
愛せたのかも――



カコさん  
私ね――



ずっと  
考えてたことが  
あるんだ――

オオウミガラスと  
ヒトの間で子供を  
つくるなら

旅行に連れてきてって  
言ったのも“これ”が  
出せるようになった  
からなんだ♡

カコさんと  
初めてした時から  
ずっと思ってたの

妊娠するのは  
私じゃなくヒトの方  
でもいいはずだよな？

このヒトと  
赤ちゃんを  
作りたいって♡

ドキ♡  
おき♡

でも…

そんなつもりで  
旅行に連れて来た  
わけじゃ…

ドキ♡

あ♡

ずる♡

ドキ♡

アニマルガールに

ぶるん♡

ペニス…!?

こんな  
もの…

こんなモノ  
男性器  
なんて♡

水



ろお..



ゆっくり  
挿入れる  
からね...♡

お...  
オオウミガラスの  
ペニスが...♡

これまで  
可愛らしい  
クリトリスしか  
なかったのに...

膣内の愛液を  
掻き出そうと  
するみたいにな...

こんな  
乱暴に刺激を  
与えてくる  
なんて...♡

みち...♡  
みち...♡

カコさん

ちゅっ♡

ちゅっ♡

ちゅっ♡

ちゅっ♡

いい♡  
いい♡  
いい♡  
いい♡

きゅん♡

う...♡

いい♡  
いい♡  
いい♡  
いい♡



おおおお  
おおおお  
おおおお  
おおおお  
おおおお  
おおおお  
おおおお  
おおおお  
おおおお  
おおおお

私と  
いっしょに♡

ふたりの  
赤ちゃんの

どっか  
どっか  
どっか  
どっか  
どっか  
どっか  
どっか  
どっか  
どっか  
どっか

まっ  
まっ  
まっ  
まっ  
まっ  
まっ  
まっ  
まっ  
まっ  
まっ

カコさんっ♡

私のせーし  
全部飲み込んで

絶対に妊娠  
してねっ♡

ママになっつ♡

どっか  
どっか  
どっか  
どっか  
どっか  
どっか  
どっか  
どっか  
どっか  
どっか

約束だよ  
カコさん

どっか  
どっか  
どっか  
どっか  
どっか  
どっか  
どっか  
どっか  
どっか  
どっか

私のママは  
もうお終い

これからは  
もっつ

ふたりで  
いっしょに

たくさん  
家族を  
作って

素敵な  
ママに  
なっつ

ぎゅっ...

いっぱい  
いっぱい

幸せに  
なろうね♡

あっ♡♡

それから二泊三日  
寝食や観光も忘れ  
二人はそれはもう  
やりまくった

**ごぼお。**

…というか、帰ってから  
ち●ぽ無しSEXも含めて  
致しまくり、やりまくり  
当初の趣旨は何処へやら…

その結果、カコ博士は

**ぼるん♡**

腔<sup>+</sup>内<sup>+</sup>で  
イクからうね♡

オオウ<sup>+</sup>ミ<sup>+</sup>  
ガラ<sup>+</sup>ス<sup>+</sup>ラ<sup>+</sup>

す<sup>+</sup>ち<sup>+</sup>ゅ<sup>+</sup>♡  
す<sup>+</sup>ち<sup>+</sup>ゅ<sup>+</sup>♡  
す<sup>+</sup>ち<sup>+</sup>ゅ<sup>+</sup>♡  
す<sup>+</sup>ち<sup>+</sup>ゅ<sup>+</sup>♡  
す<sup>+</sup>ち<sup>+</sup>ゅ<sup>+</sup>♡  
す<sup>+</sup>ち<sup>+</sup>ゅ<sup>+</sup>♡  
す<sup>+</sup>ち<sup>+</sup>ゅ<sup>+</sup>♡  
す<sup>+</sup>ち<sup>+</sup>ゅ<sup>+</sup>♡  
す<sup>+</sup>ち<sup>+</sup>ゅ<sup>+</sup>♡  
す<sup>+</sup>ち<sup>+</sup>ゅ<sup>+</sup>♡

カコさん♡  
すき♡  
あ♡

無事に  
懐妊!!!

**ざばあ あん!!!**

だが、  
ここでハッピーエンドとは  
問屋が卸さないのが人生である

懸命なるカコシユ勢の  
皆様方ならば、おおよそ  
想像もつくことであろう

カコ博士をいやらしい  
目で見る者は  
オオウミガラスちゃん  
だけではない!!

がんばれ  
オオウミガラスちゃん

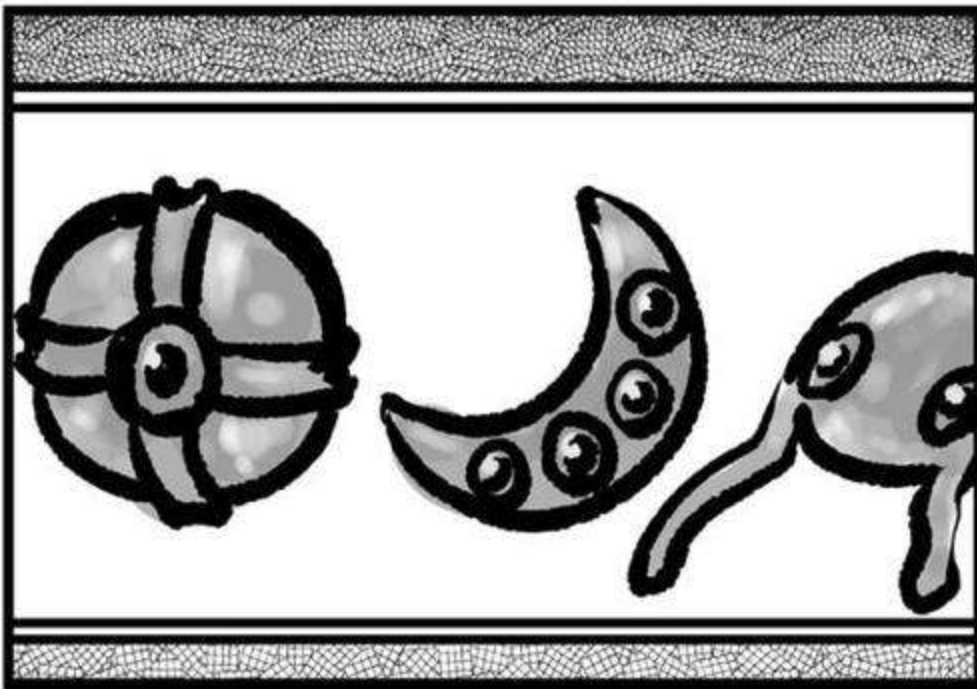
カコ博士の  
どすけべボディを狙う  
卑劣なハンターは、パークに  
星の数ほど居るのだ!!!

ママとなるカコ博士の  
貞操を守護れるのは  
キミだけなのだから!!!

KAKO-SHICO is continued...

次の執筆者のカコさんが、ラストまで  
純潔を守れるかは、キミの目で確かめてくれ!!!





セルリアン：  
姿形を似せるだけで無く  
その性質をも模倣する  
ケースも見られ未だその  
存在は未知数



カコ博士

絶滅したフレンズ  
～ドードー編～  
マメゾウ



火山活動によって地表に  
出たものと予想される

地核からせり出した  
マントルになんらかの  
物質が付着し



それがセルリウム  
サンドスターとの関係性  
も調べたい所だが…



サンプルが少なく  
研究は難航している



はー  
今日はここまで  
かなー





今日もお疲れ様だね  
カコ博士

ムー…カコちゃんって  
呼んでって言うてるのに…



は…  
セルリアンの研究もうイヤー  
皆との研究に戻りたい…

ぐだ



このコタツだって  
ミカンだって

カコちゃんが働いて  
買ってくれたんでしょ？  
いつもありがとうね♡

のドードー



フフ…  
カコちゃんがいつも  
頑張ってるの知ってるよ…



じゃあ…はい♡  
口移しでどうぞ♡



ミカン、食べる？  
食べりゅー…♡

うわーん  
ドードーちゃん♡

ぐだ





射精るよ…  
カコちゃん♡

あっ♡  
あっ♡



私もドーディーちゃんが  
気持ちよくなってるの  
見るの好き♡

カコちゃんの…  
おっぱいではさむ  
ヤツ…好き♡



はー♡  
いっぱい射精たね♡



あん♡  
絶滅種ミルク  
もったいない♡

射精るう♡♡♡



私もカコちゃんを…  
いっぱい気持ちよく  
させるんだから♡



私も…



ドードーちゃんのおちんちん...  
気持ちいい...



あ...



これならどうぞ...

んおっ

んおっ



ココちゃん 孕め...

イツちゃえ  
イツちゃえ



イ...イク...  
ドードーおちんちんに  
突かれてイクウ...





おっぱいも...  
おっぱいも  
イジってえ♡

カコちゃんの  
おっぱい...

エへへ...♡  
うれしいな...♡

すっごく  
やわらかくて...  
お股にゾクゾク  
くるね♡

むいっ

ほいっ



カコちゃん...♡  
すっごいよお  
その動き...

ほいっ

ほいっ

ほいっ

ほいっ



カコちゃん...♡  
私...射精るよ...

私も...♡  
私もイク...

あっ♡  
射精るっ  
♡♡♡♡

カコちゃん



# ビーストナールα 開発秘話

ジェームス山

できた……

シヤレのつもり  
だったのに

ヒトをごく短時間  
ビースト化する薬が  
できちゃった……

とは言え  
こうなると  
誰かで実験したく  
なっちゃうな……

👉 マッドサイエンティスト





ガシィ!!



やった!  
大成功

あとは避難して  
観察するだけ



グアアアアアアア  
アアアアアアア!

スゴゴゴゴゴ



ガ  
バ  
ア

プロ  
ン  
ジ

バ  
サ  
ッ

ちよっ!ちよっ!  
ちよつと待って!

グアアアアアアア  
アアアアアアア!



ピク  
ン  
♡

ん♡



キョハ

キョハ

あっ意外と  
優しい♡

一時停止中



待ってって言ったなら  
少し待ってってくれるの  
ちよっと面白い

それにしてもこの子  
おっぱい吸うの  
好きね...

フン♡  
フン♡

フン♡  
フン♡



あ♡そんな  
いきなり激しい♡ハ

ヌ  
フ  
ヌ  
プ

お願い  
落ち着いて

最後までやっていいから  
ちよっと待って?  
お願い!ね?

ヌ  
チ  
ユ  
ヌ  
チ  
ユ

グ  
オ  
ア  
ア  
ア  
ア  
グ  
ガ  
ア  
ア  
ア  
ア



再開

まさかヒトがビースト化すると

ズ  
キ  
ユ  
ズ  
キ  
ユ  
ズ  
キ  
ユ  
ズ  
キ  
ユ

生殖本能が強化されるなんて...

ひっ♡

あ♡



やあん♡出てる♡  
すすごい量♡

ト  
ク  
ン  
ト  
ク  
ン



実験結果  
 実験時間 一時間十二分  
 総射精回数 五十八回

射精内訳  
 膣内射精 三十四回  
 肛内射精 十一回  
 口内射精 三回  
 顔面射精 二回  
 その他(ラッキースト  
 への射精含む) 八回



えっ!!  
 何でぼく  
 はだかなの?

元に戻った

これ...

量産化  
 しよおっと♡

おわり♡

二千年後、この時作った残薬を  
 偶然飲んだキュルルが暴走、  
 辺り一帯のフレンドズと  
 ラッキーストが貞操を  
 奪われることになる——





たすけて♡の  
加博士  
描いた人  
のフロフキ  
huro-huki

はかせ!  
股におち○ちんが!!

ホロキ



しかも  
ギンギン  
だよ!

これで子作りし放題  
って感じ!!



...本当に生えてる

フレンズはみんな女性  
になるはずなのに...

どうしたらいいか  
ぜんぜん分からん  
抜いたら戻る...かなあ...

っん  
っん



えー

それはやめて

あなたがこころか  
分らない...

というところで  
タイリクオオカミ  
と子作りして  
くるから!!



性処理が必要なら  
わたしがするから

はい

……一応ヒトの  
交尾のやりかたを  
調べてきた

いっておくがこういう事に  
あまり自信は無いからな

そんなに構えなくても  
博士が彼氏と普段  
やってるような感じで  
いいからさ



はかせ?

まさかの未経験!  
ちゃんと子作り  
しないと絶滅  
しちゃうよ!?

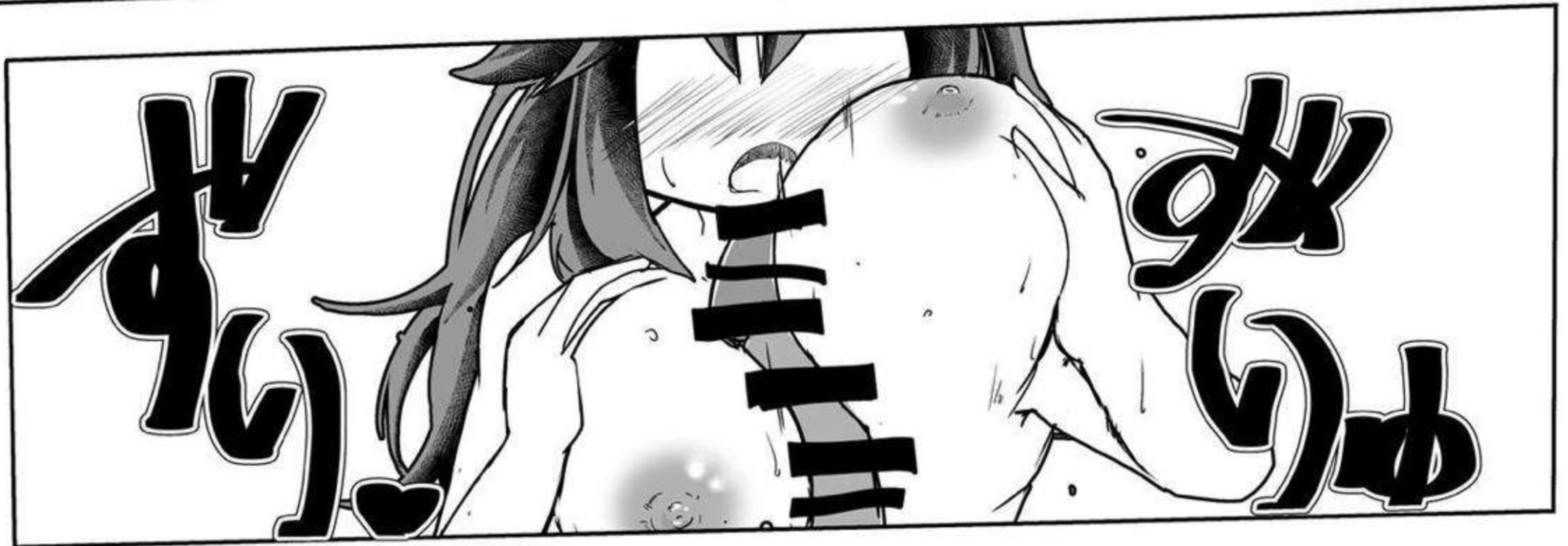
忍



生娘いたたく  
なんて神様  
みたいだし  
これはこれで  
ありだけどね

きむ…  
言い回しが  
生贄っぽい  
なあ…











薬入り



アイスティー  
しかなかったけど  
いいかな？





博士のせいよくしより  
もしないとね

こんなにびしょびしょ  
にして本当ははかせも  
溜まってたんでしょ？

私はべつに  
そんな…

ねえ、はかせ。  
いいでしょ  
一緒に気持ち  
よくなろう？

はあ…もう  
好きにしなさい

はかせ





おしまい

結局  
戻ってないし...

楽しかった  
またやろうね♪

ジャパリパーク  
動物研究所

ふう……  
今日も疲れ  
たな……

ん？  
「疲労解消に催眠療法」  
……？

疲労解消に  
催眠療法！

無料！催眠療法

カコ博士催眠危機一髪！  
ビタミンー

オラッ  
催眠！

あの……

ガキヤ



おおうっ  
射精る射精る  
……

れろれろ  
れろれろ



しかし  
チヨロイもんだなあ？

お偉い博士も  
催眠にかかれば  
一発で肉便器とは

愛おしそうに  
チンポ啜えやがって

普段からその  
クッソ下品な  
身体で男を  
誘ってるんだろ？

覚悟しろよ

今日は孕むまで  
解放しねえからな



オラッもう一発だ  
子宮で受け止めろっ

ドクドク  
ドクドク

ドクドク  
ドクドク



でもおかげで  
スッキリしました！  
ありがとうございます

いえいえ  
またお疲れでしたら  
いらしてくださいね

END...



すみません  
私ったら寝ちゃって……

ハッ

終わりましたよ  
カコ博士



……コ博士！  
カコ博士！

w i

ピ

カコ博士の搾精教室♥  
作：絶対絶命

みんな  
お待たせ……!

ぽん

あ来た  
カコ博士!

パーク開園の  
少し前……  
フレンズ達に  
ある問題が  
発生した

彼女達に  
元々の動物の  
「陰茎」が  
生えて  
しまったのだ

ボッキーン!



フレレンズ達を  
元に戻す方法は  
ただひとつ

ししし  
ししし

「射精」である



ハハハ  
あああ  
あああ!!

ビュ  
ビュ  
ビュ  
ビュ  
ビュ



一人ずつ  
手で抜いて  
いったら  
キリがない……

ぬわわ……  
ぬわわ

仕方がない……♡

ぬわわ



私の体……!

ぽん

んおっ

全部使ってね♡

博士のおっぱいは  
きもちいい♡

博士……!  
入れるよ!

わーい!  
博士ありがとう!

まって……!  
ウマチンポは……

リゆう……

ズダ

ズダ

す





その後  
動物用搾精機が  
支給されたのは  
言うまでもない

おしまい♥



どうぶつ  
チンポ  
しゅごころ...

私が自身の体の変化に  
気付いたのは一週間ほど前

オーガズム直後で高揚感が  
完全に抜けていなかった私は  
その肥大した部位を好奇心から  
触ってしまいました…

今思えばこれが  
終わりの始まりだったのでしよう

カコ×ミラ  
作 エクイテス

肥大した部位から発せられる  
異常な刺激を求め身体を弄り  
オーガズムを迎えると共に  
さらに肥大化していく身体…

私は

復帰に向けた  
リハビリによる  
ストレスからか  
自慰をする頻度が  
高くなっていました

オーガズムに達し我に返った時に  
ふと違和感を感じ体を見てみると  
自慰の際に弄っていた箇所…  
乳頭と陰核の肥大が収まらず  
張りつめた状態のままだったのです

私はこの倒錯的な快樂の  
渦から抜け出せなくなり  
白衣の上からでもはつきりと  
その形が浮き上がってしまうほどに  
私の体は歪に変わり  
最早身体を隠しての  
生活にも限界が来ようとしていました

肥大した乳頭と睾丸のような部位まで形成されてしまった陰核はサイズの合わない衣服に締め付けられることで刺激され体液を常に分泌しそれに呼応するように高まる焦燥感から二時間毎に自慰をしなければ正気を保てなくなっていた私はこの日も人目に付かない場所で狂わない為に狂ったように自慰を行っていました

誰にも気づかれないうように声を押し殺しながらも後で片づけるからと体液を辺りにまき散らして…

あと少しでオーガズムに達する事が出来る…欲望のままに陰核への刺激を強め絶頂が訪れようとした瞬間

ガタツ!!

「誰!？」



せり  
せいでん

「ミライちゃん…?」

物音の先にいたのは後輩のミライでした  
パークの危機を最前線で乗り越えてきた彼女ですら  
目の前の状況は呑み込めず  
信じられないといった表情でこちらを見つめていました



「カコさん…?」

その不安げな表情と声…

「ダメ…」

尻もちをついてなったであろう

綺麗な足をこちらに向けた姿勢は

まるで誘っているようで…

「ダメ…」

絶頂の寸前で  
中断していたために  
昂っていた私は  
あろうことか  
目の前で怯える彼女を  
オ…押し倒してしまいたいと  
考えてしまったのです

肥大した陰核とほい  
見た目は完全に男性のソレを  
あり得ない程に膨張させ  
近寄ってくる私に彼女は  
必死に呼びかけてくれたのですが  
その時の私にはその声すら  
さらに欲情を誘うフレーヴァーと  
なってしまいました  
おちがいて  
下っ…!!

そして私はミライちゃんの  
ズボンに乱雑に掴み…



カコ  
フラ

彼女のナカは  
とても締りが良く  
自分の手で  
擦るのと  
比べ物にならない程  
気持ち良い物でした

もっと早くから  
ブチ犯せばよかったなあ……

いっ!

子宮にクリチン引がかかった辺りで  
ミライちゃんトんじやったみたいで  
一段と締め付けてきて  
もう抜きたくても  
抜けないぐらいだったんです

まあまだイってないのに  
抜くワケないんですが

でもそろそろイキ

ドブスツ

ドブスツ

ポゴツ

ズン

ズン

ドブスツ

ズン



モノを抜き取る際に  
体外に飛び出して  
しまった彼女の  
子宮を見て  
私はやっと  
我に返りました

長年慕ってくれていた  
生オナホミライちゃんを壊してしまった  
罪悪感…

こんな恐ろしい事をするなんて…  
今の私は…

本当にワタシなの  
でショウか？

おわん



彼女はカコ博士。



コシ

コシ

コシ

ここ、ジャパリパークの  
動物研究所で  
副所長を務めながら…



キョロ

キョロ

日々、ストレスと  
戦っている。



ドキ

ドキ

ドキ

だめよっ…!!  
こんな姿…  
誰かに見られたら…♡



ビクッ

アッ

ハサナー

わっ!!  
カコ…博士!?

プル

プル

ガッ

ガッ

これは…

頑張れっ!カコ博士

作:しこりぱ

使用中

研究所の皆知ったら  
幻滅しちゃいますよ？

あ、そうそう、上目遣いで  
もっと先っぽペロペロして♡

まさかカコ博士が  
ストレス発散で露出しちゃう  
ようなド変態博士  
だったなんて…

ぎゅゅゅ

プツッ♡



ツ出る！

カコはい孕め！

ぽんっ♡

すばん♡

ぽんっ♡

はあく最高♡  
このケツみてえなおっぱい  
犯してみたかったんだよね♡

ふいっ  
いっぱい出た♡

あ、そうだと  
露出好きのカコ博士に  
ピッタリの  
イベントがあるんだけど…

とっお♡

ジャパリパーク博物館  
特別企画「セルリアン展」

いつまで  
標本のフリしないとい  
いけないのかしら…

※中身はカコ博士  
(特殊メイク)

セルリアン  
女王クラス

ざあ…

ざあ…

このセルリアンの女王が  
動物やフレンズたちを  
襲ったんだって…怖いね

う、うん…そうだね

コイツが!!

私を見て…

あ、この子…

まゃん♡

ドンッ

フレンズのみんなを  
ひどい目にあわせやがって！  
許さない！

そうだよ！  
許せない！

悪い女王め！  
やっつけてやる！

キゅん♡

ジャパリパークを  
めちやくちやにした  
報いを受ける〜！

みんなー女王の弱点は  
おちんちんをおまんこに  
入れられることだぞ〜♪

がんばれ〜

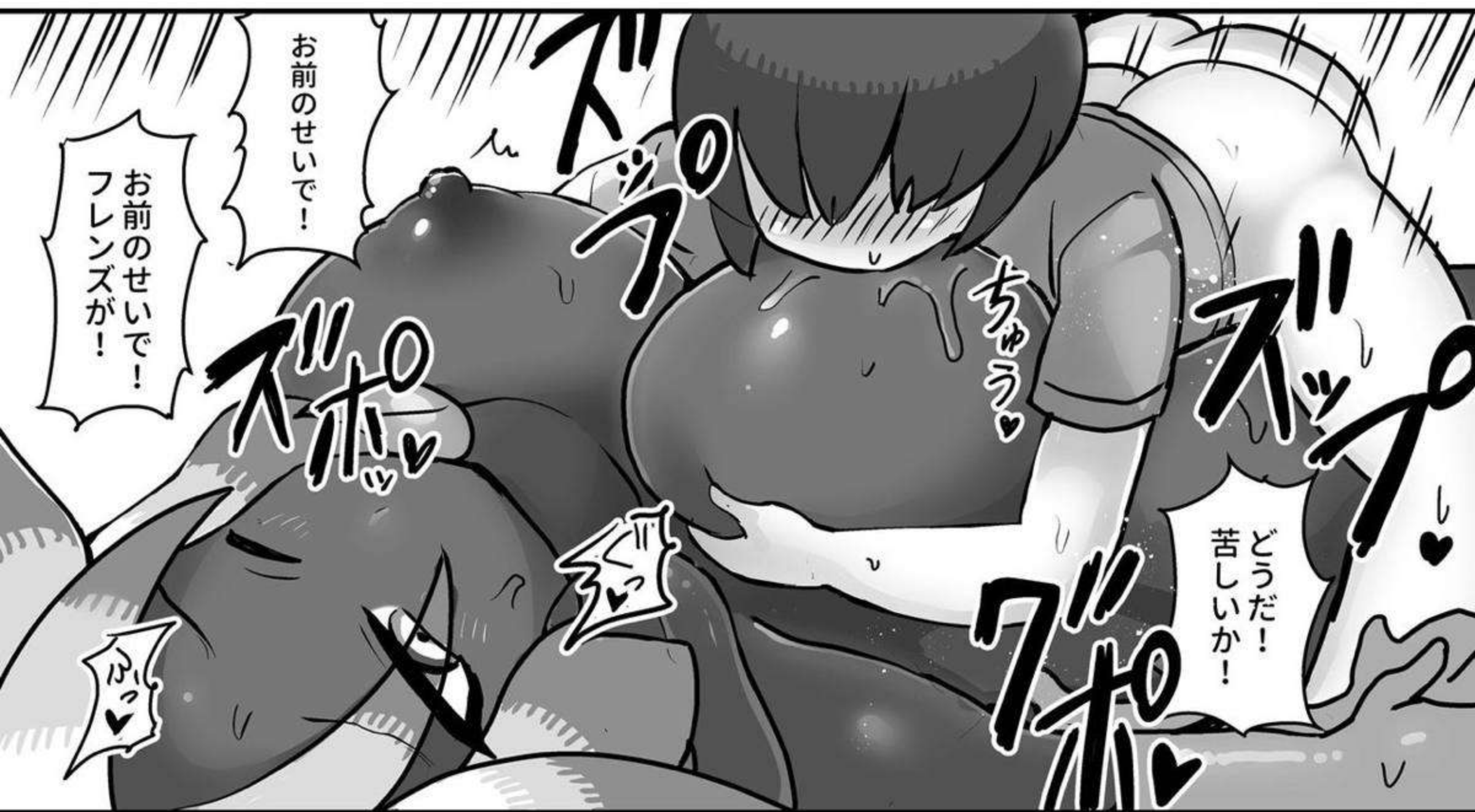
!?



この！このお！女王めっ！  
気持ち悪い声出しやがって



「、」なんだな！  
アハハハ...



お前のせいで！

お前のせいで！  
フレレンズが！

どうだ！  
苦しいか！



っ...うう...  
お前の...せいで...

カコ博士はそれから  
野外露出を控え  
セルリアン研究に  
力を入れたという

あとあの男性職員は  
普通に解雇された

お前のせいで...  
あの子ともう会えなく  
なったんだ...

END

おねむなよ

カッパ





カコ博士のはじめて  
作：間間山



まさかあそこで  
爆発するとはね

あの映画  
良かったですね〜

.....



いや〜



それにオタクで.....  
友達も少ないし.....

っつ

え!!

どうして私みたいな  
暗くて無愛想な人を  
誘って頂けたんですか?

.....古鷹くん



だから.....何て言うか  
僕もその姿を  
支えられる力に  
なれたらいいなって.....

いつも一人で  
研究している姿を  
僕は後ろから  
ずっと眺めていて

その.....カユさんは  
必死に動物の研究を  
していますよね



.....いいえ

ワスッ

ごっごめんなさい!  
急に变なことを言っ

.....



……は……



これからも  
よろしくお願ひします



はいっ!

それから  
数日後



……あの二人  
いつも一緒だね

でも交尾は  
しないのかな?

ひよこ



聞いた話だけど  
ヒトは交尾したくても  
恥ずかしくて出来ないらしいよ

そうなんだ  
じゃあ私たちが  
手伝ってみようか!

うん!







ふ…古鷹くん…

大きい胸…  
良い匂い…

ハア…

ハア…

やめろ…  
何考えてるんだ俺

カコさん…  
ごめんなさい



いけー!!!



アウツ…



はあ

あん

だ…ダメ…  
…そんなにされると

あん



あん

あん

あん

ビクッ!!

あん

はあ





はい...分かっていきます

古鷹くんのもんに  
してください...

ズン

ボーン



はぁー♡

はぁー♡

ドク...

あぁっ!気持ち  
良いです!



はぁー♡

出ちゃいそう!

ドク...

ドク...

はぁー♡

っ...なっ...中に  
出してえ...っ!



カコさん……これで僕たち、一つになれましたね……

はい……古鷹君……ありがとうございます……



完



腕や肩が  
とても張って  
いますね

全身に日頃の  
研究の疲れが  
蓄積されて  
いるようです

あ〜…  
気持ちいい♪

でも  
おかげで  
身体が楽に  
なったわ♪

# HERMIT REVERSED

**イナクル**  
-inankur-

下着の上に  
Tシャツ  
一枚だけなのが  
ちよつと  
恥ずかしいけど…  
///



それは  
マツサージが  
しやすい格好に  
なっていたただ  
ためです…

それにしても  
博士は最近  
運動不足気味の  
ようですね  
心なしか  
全身ふっくら  
として…

うっ…

腰やお腹の  
マツサージも  
重点的に  
しなくちゃ  
ですね…

たーん

え…

ちよっ…  
うひい…

むに

むに

むに

この際なので  
シェイプアップの  
マッサージも  
試してみましよう

え？

ああ…うん  
じゃあ  
ヨロシク  
お願い…

す…







博士：  
硬くなってる  
部分がありますよ

これは重点的に  
マッサージして  
コリをほぐさない  
とイけませんね：❤

ひゃ…  
ち…  
ちがっ…

ちがっ…  
ちがっ…  
ちがっ…  
ちがっ…  
ちがっ…  
ちがっ…  
ちがっ…  
ちがっ…  
ちがっ…  
ちがっ…

ダメ…  
やあつ！

いっ…  
ん…  
ん…  
ん…  
ん…  
ん…  
ん…  
ん…  
ん…  
ん…

あ…  
あ…  
あ…  
あ…  
あ…  
あ…  
あ…  
あ…  
あ…  
あ…

お  
お  
お  
お  
お  
お  
お  
お  
お  
お

博士…  
我々のこども  
ヨって硬く  
なつてしま  
ました…♡

今度はこちらが  
博士の躰で  
マッサージして  
イキますね♡



いやッ…奥まで  
挿入って  
くるう…

ふああっ…!?

ああんっ♡





ああ...  
 とても  
 いいです  
 博士...  
 全身の  
 お肉で  
 コリが  
 ほぐされて  
 いますよ...  
 おほ...  
 そろそろ  
 我々の  
 活火山が  
 噴火しそ  
 うです...  
 ♡





ふっ... ふう...

さあ：博士  
休んでいる  
時間は  
ありません

これから  
タップリと  
サンドスター  
我々の精子を  
注ぎこんで  
さしあげますよ...

たくさん  
アニメルガール  
可愛い子供を  
作りましょうね ♡

またのご来園をお待ちしております



大きすぎる胸をよくタイリクオオカミにイジられていました♥



身体と頭脳が早熟な私、カコは

### カコ博士の胸が大きくなる秘密

小怪



カコ博士のおっぱいは柔らかいね

も、もうオオカミ…私の胸で遊ばないで



この身体はいつも悩みの種でした

あ、またお尻大きくなったかなズボンがきつくなったわね

とはいえ、ここでの生活はとても面白かった

次の仕事はけものの発育状況をチェックすることだ



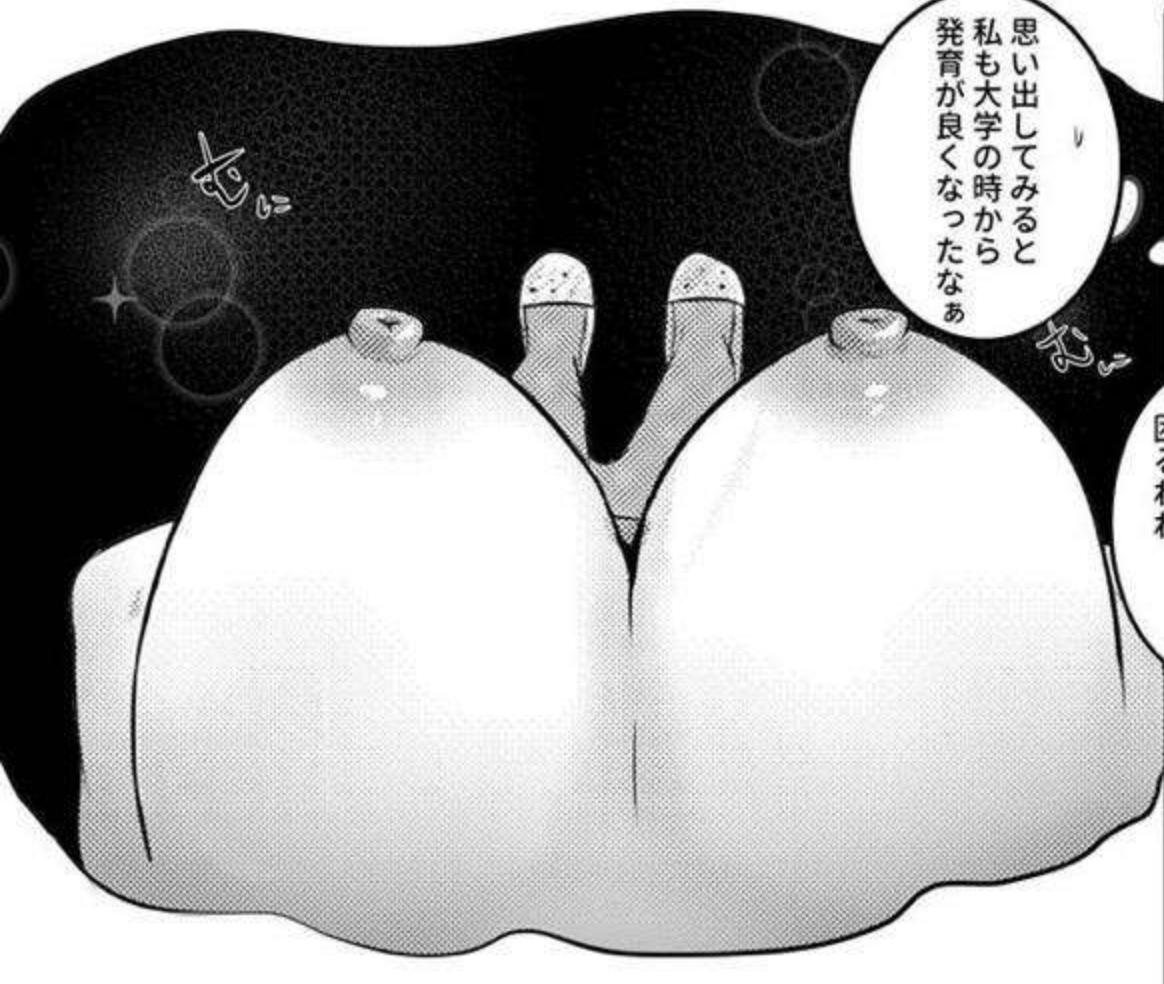
じゃあ、まずは服を脱いで



裸を見られるのは  
ちょっと恥ずかしいわね♥

こうかしら...

このオオカミ...  
すげえ過ぎる!!



思い出してみると  
私も大学の時から  
発育が良くなったなあ

でも胸が  
大きすぎるのも  
困るわね



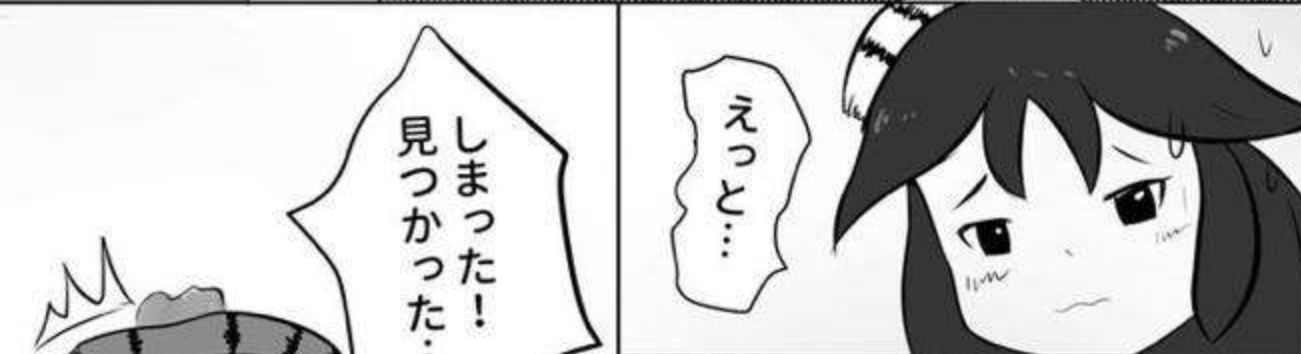
フレンズの胸はなんで  
あんなに大きいのかしら?  
本当に発育がいいわね



どうしたら  
お姉さんみたいに  
大きなお胸に  
なれるんだろ？



私の胸、  
どうしてこんなに  
小さいのかなあ？



しまった！  
見つけた！

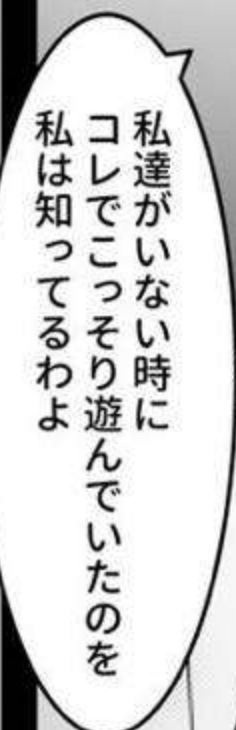
えっと…



これは  
何かしら？



交尾は胸を大きくすると  
聞いたことがあるわ♡



私達がいけない時に  
コレでこっそり遊んでいたのを  
私は知ってるわよ



ここに博士が  
何か隠しているのを  
見たことがあるわ



博士が私達がいらない時に  
コシをこっそり使っていたの  
知っているわよ♥

そ、そんなこと……!

どうして  
タイリクオオカミが  
知ってるのよ?

こんな感じで使ってたわよね

あ! だめ!  
ちよつと  
待ってえ!

博士、交尾こっこ  
しましゅう♥



博士とひとつに  
なりたいの♡

タイリクオオカミ  
もう、そんな恥ずかしい  
こと言っつのはやめて…っ

はぁ♡

めあ♡

おまんこ同士で  
出たり挿入ったり  
してるわよ♡

博士：  
とても魅力的だわ  
お尻も自分から  
動かしてるじゃない♡

すっ  
ぽ♡

もっと深く♡  
もっと深く♡

すっ  
ぽ♡

ス  
ン♡







性行为が終わって  
キスをする  
性的欲求がもつと  
満たされるものなの…

その後性ホルモンは  
ますます分泌される  
ようになるわ

あつ…そうなる  
とおっぱいがまた  
大きくなっちゃうわね



んっ…博士何を  
しているの？

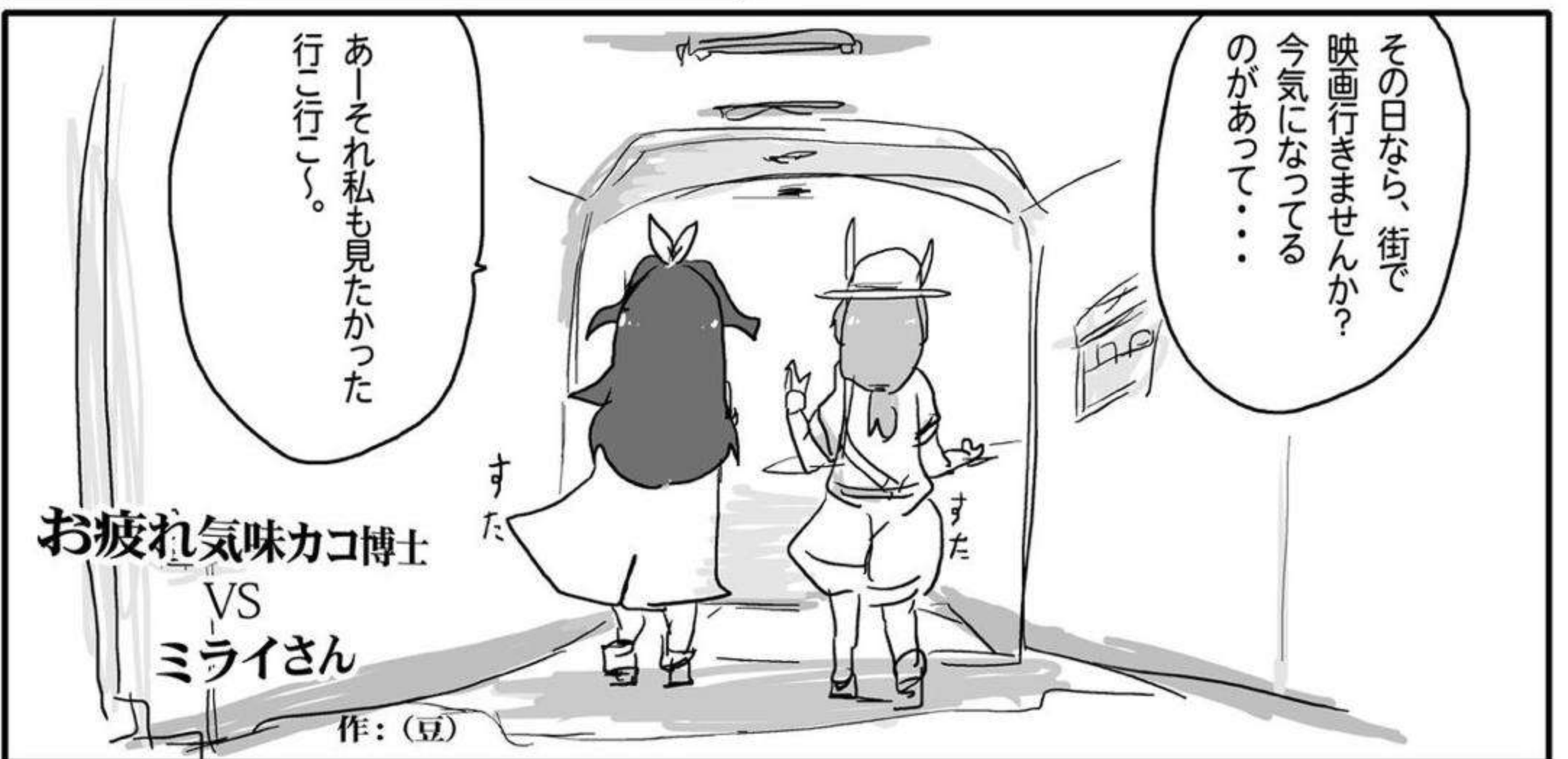
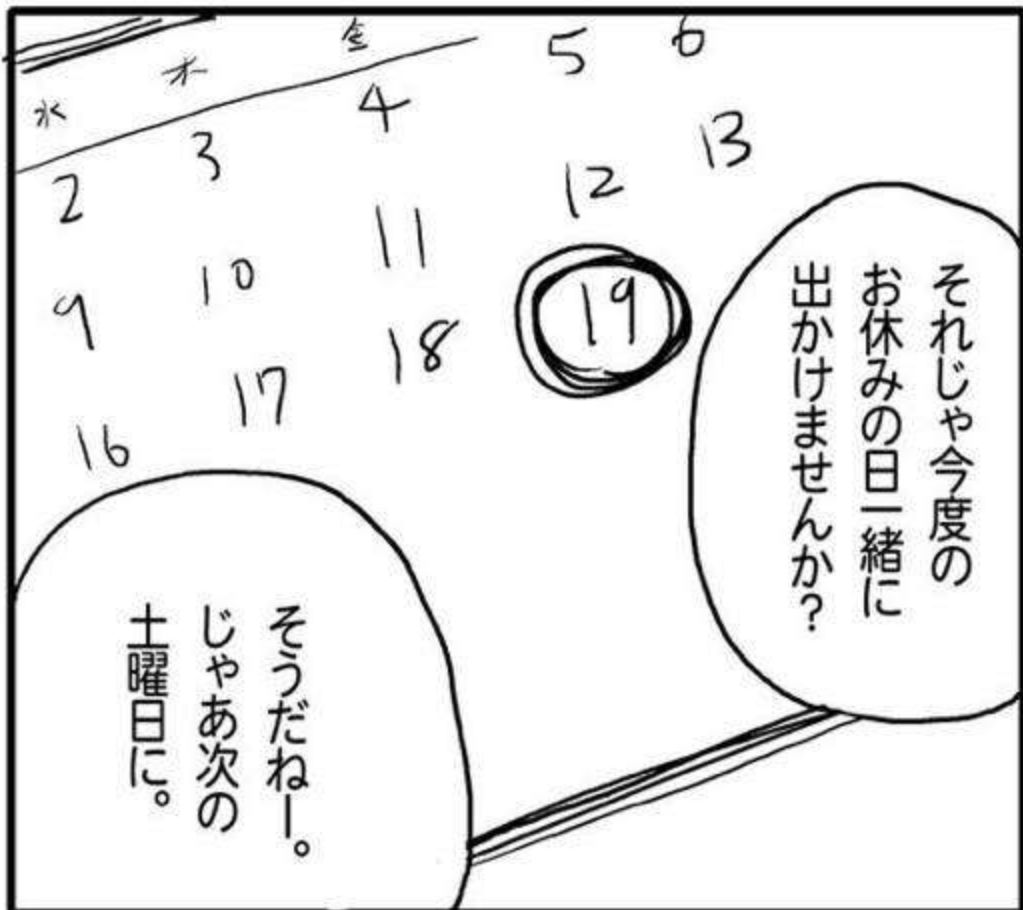
今度はイルカと  
セックスしようかな

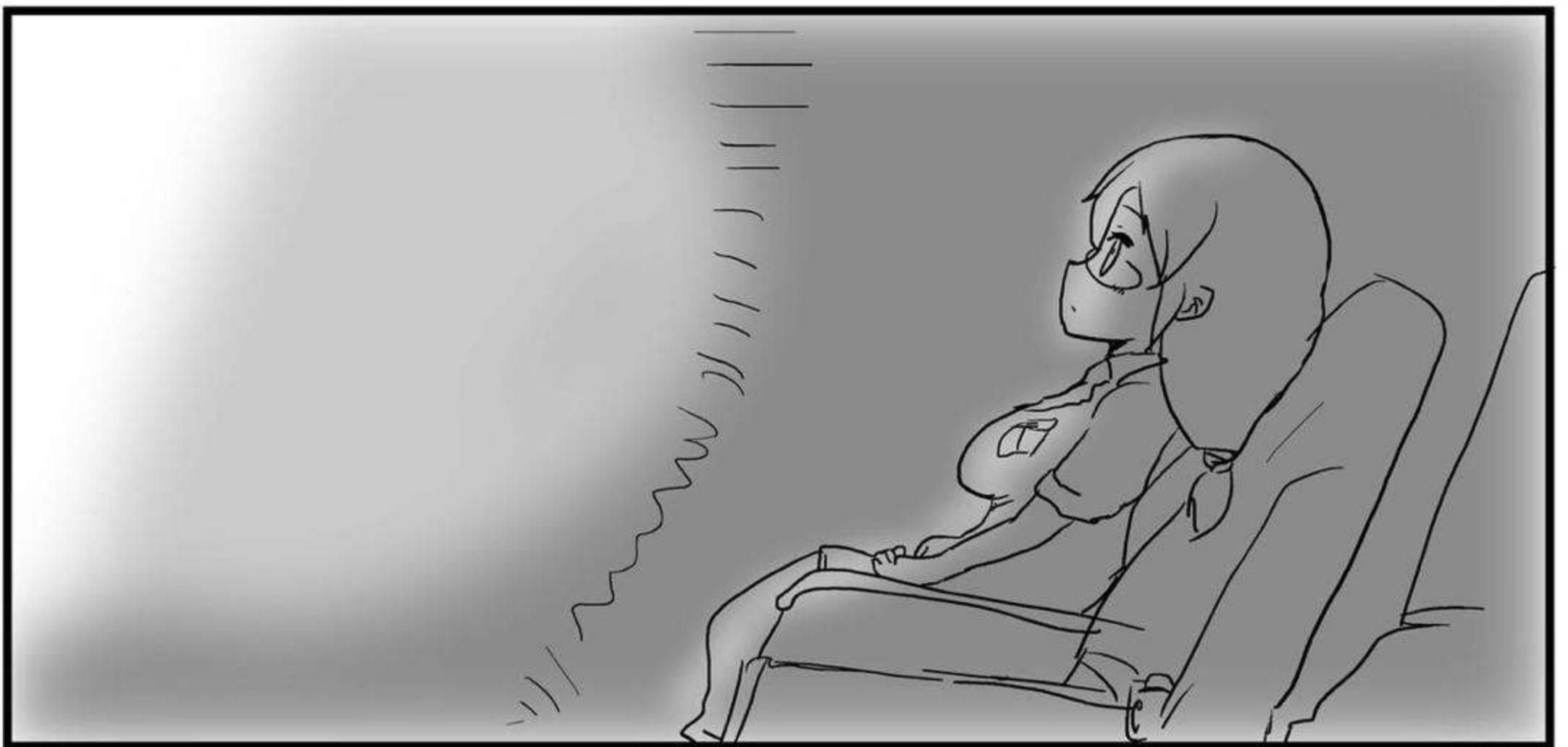
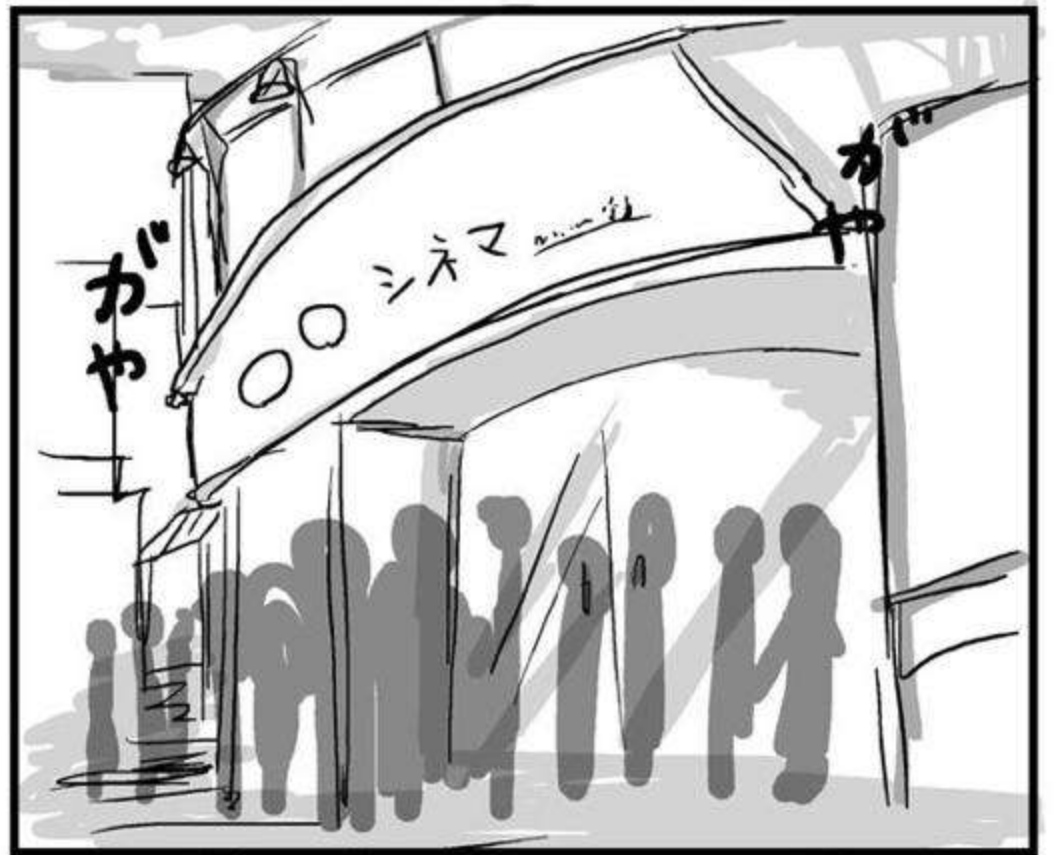
博士ったら  
もうセックスを  
楽しんでいるわね！



えっと…

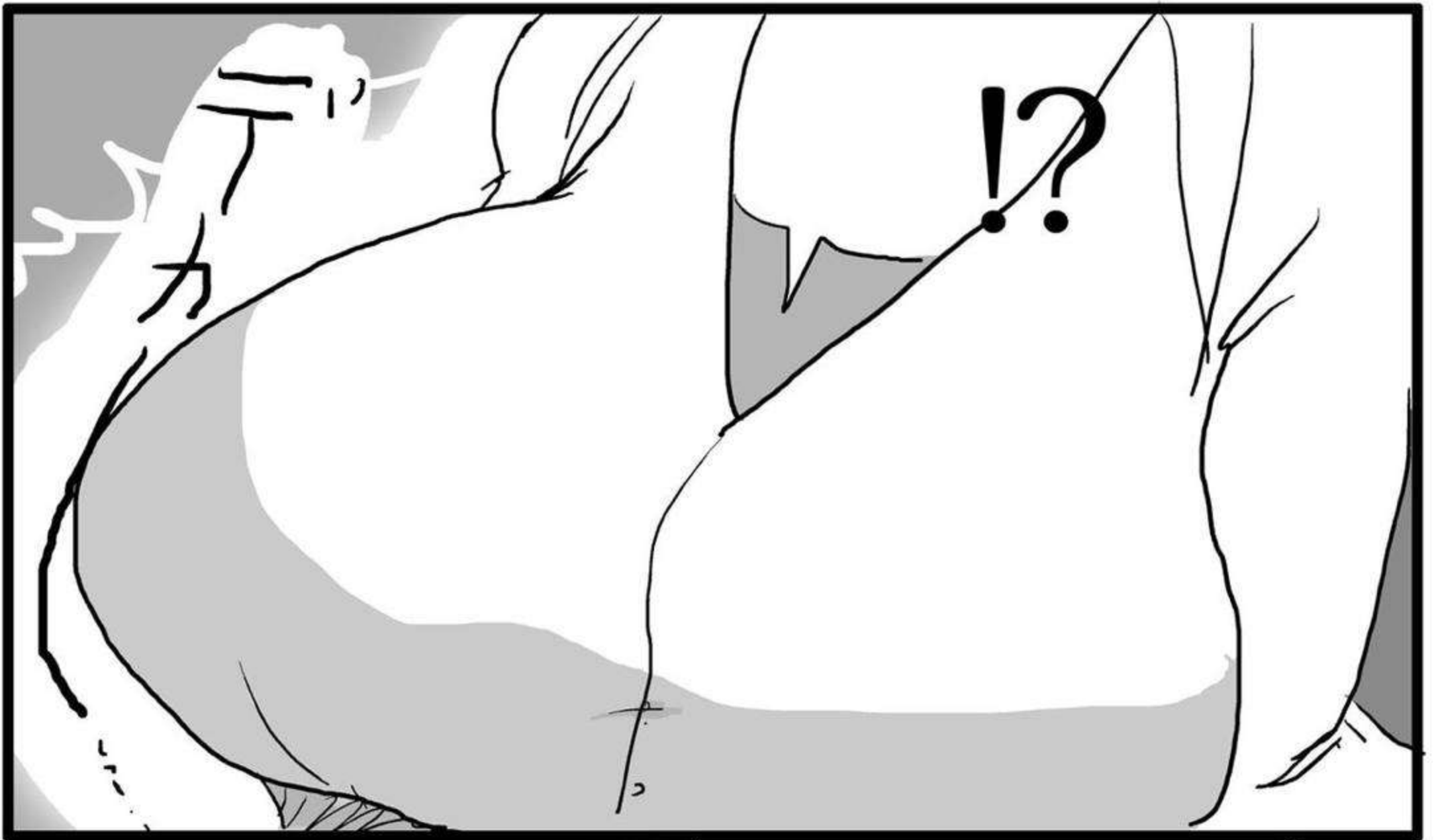
終わり



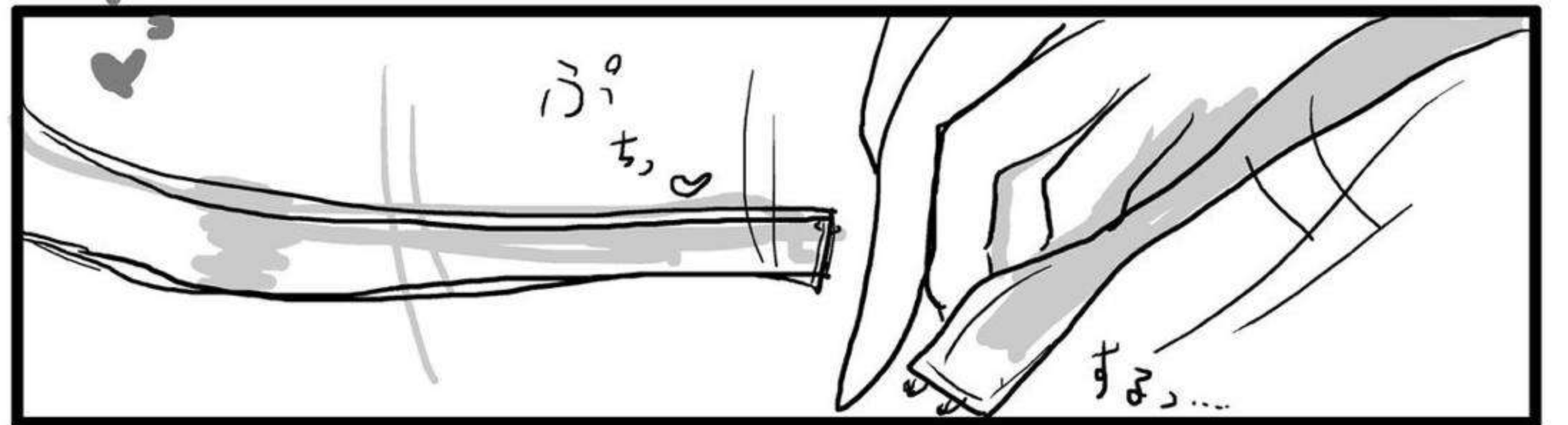














おっほい  
いただきます...



ちゅほ♡  
ちゅほ♡



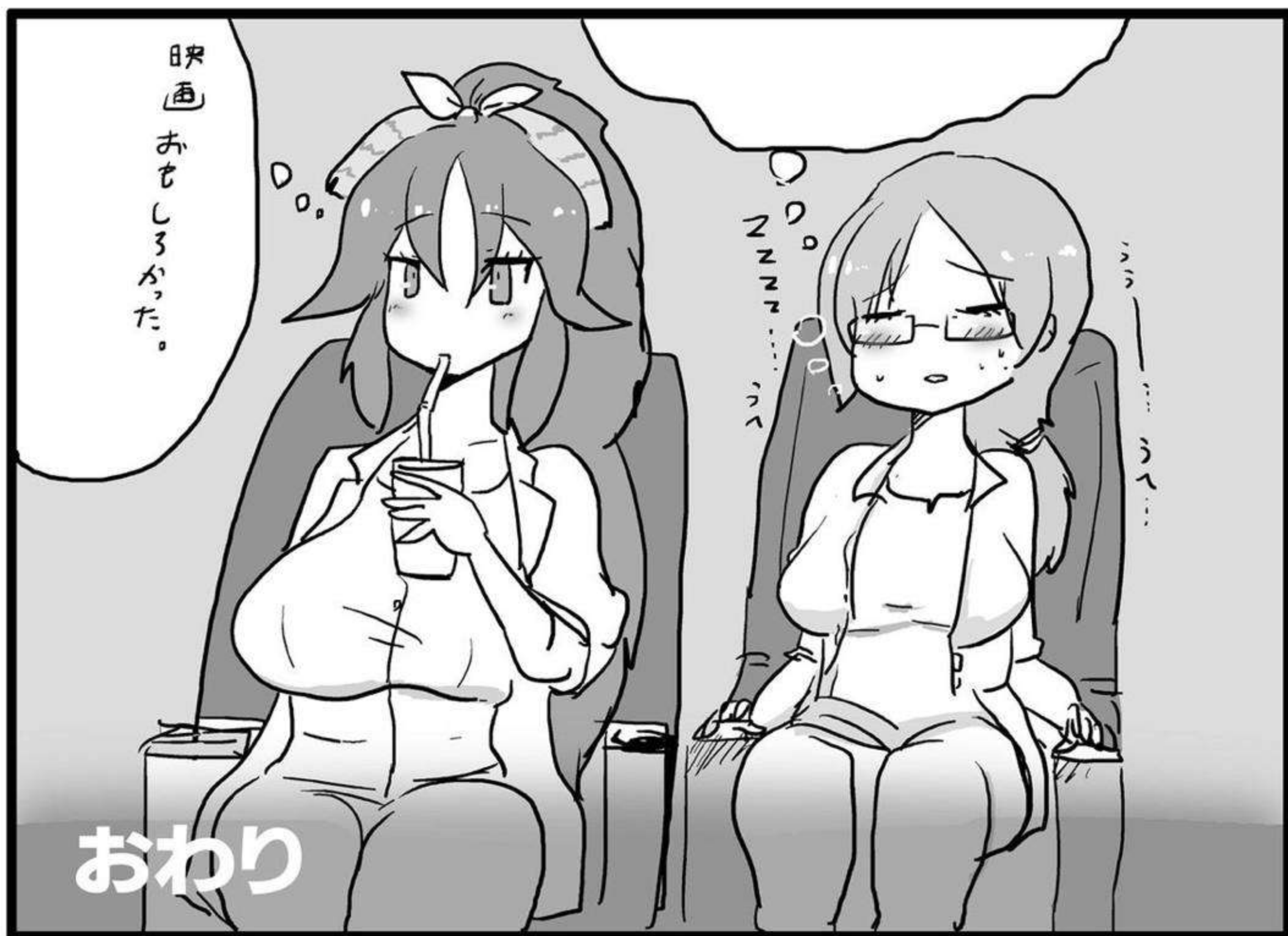
カコさんのあつこ

あつこ...

カコさんの

赤ちゃんに

生まれが有りたい...



映画  
おもしろかった。

おわり

可愛そうじゃないカコ博士を  
書いてみたかっただけ

作・シローフ

あの……  
カコ博士……

一体  
何をなされてるん  
ですか……？





…答えて、  
トワ。

本当に  
あなたが



あの「女王」を  
倒したの？



…まあ実際に  
倒せたのは

サーバルやミライさんを  
はじめとした  
みんなのおかげですが



そういう事に  
なりますね

……そう。

……いや、そう。  
じゃなくて……。

それと博士が俺の上に  
乗っかってる事の何が  
関係してるんですか……？

それにお腹の上に  
乗られるとちよっと  
苦しいんですが……。

……えっ？あつ！  
「ん」めんなさー！

と、とにかく！  
何が言いたいかという……！

ポフッ

カコがトワの隣に座ってます

だから……  
おかげで……。

私は助かった  
わけだから……

間接的とはいえ  
あなたは私の……

だから……

あの……  
博士……？

命の恩人に  
なるわけだから……

もしも……？

ああもっ……じれったい！

!?

ガシッ



まったく！  
ニブたく！  
だから！

あなたの事、  
好きに  
なっちゃったのよ！

おかげで研究にも  
手がつかなくなつて  
困つてるんだから！

責任取つてよ！

ばるん、

わ、わかりやした…

マジかよ…本当にこんな事して  
大丈夫なのか…!?

んっ…♡

二人揃つてクビとか  
無いよな…!?

んっ…♡  
中々上手よ…♡

んっ…♡

はあっ…♡

あっ…♡

パークスタッフ同士の  
交際つて  
大丈夫なのか…

結局乗られてるし…  
というか俺

でも私ばかり気持ちよく  
なつてちや悪いから

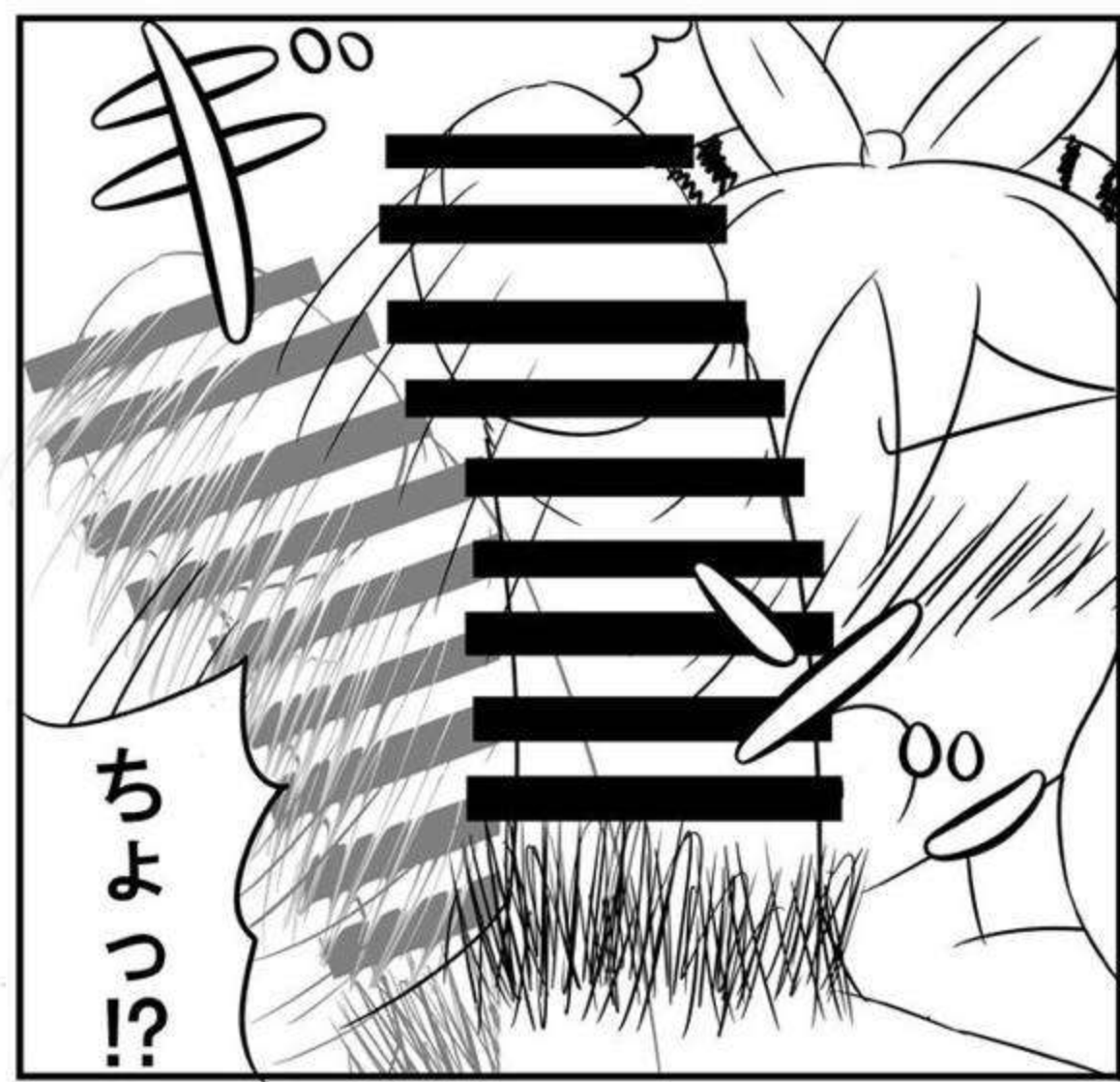
えっ!?

今度は私のばんね。



「、これが男のヒトの…  
予想してたより  
ずっと大きい…♡」

もう覚悟  
決めるしかねえか…



ちよっ!?



ハッ、  
博士ッ!!

男のヒトは「っす」と  
喜ぶって聞いてるわ  
どうかしら?!

それッー!  
ヤバいぞすっ!!



そんな事  
されたら…♡



ごめんなさい  
出ますッ!!

んっ...♡ 凄いわね...  
こんなに出したのに...♡

流石パークを救った  
英雄なだけあるわ...♡

それ関係  
あるんですか...?

でも、  
これくらいじゃ

満足しないんだから♡

まだまだ全然

ちよッ!? アレ!?  
博士、  
出血してますよ!?

大丈夫  
なんですか

でも、そついう  
優しい所も  
なんだか素敵。

あなたってど「まで  
ニブいの...?」

ハ、  
博士...

カコって  
呼んで

!?

イイツ  
好きッ

カコさんッ

カ、  
カコッ

んっ♡  
トワッ♡  
あなたって  
素敵♡

ヨシッ!



数時間後

凄く良かったわ……  
ありがとう、トワ……

も、もう  
出ねえッスよ……

やっぱりあなた凄いわ……  
8回も連続で出来るなんて……

それでこそ、私の旦那♡  
これからもよろしく……ね……？

話が結婚まで進んでる……  
……まあ、いつか。

### 後日談

お姉ちゃんと結婚するって事は  
トワさん私の従兄さんになるって  
事ですよね？

←菜々ちゃんは  
カコ博士の  
従姉妹

ジユウケイなんです……  
難しい言葉よく知ってるね……



**ぶるん**

♡ふう♡

んんん

**ぶるん**

カコ博士  
「んはあ♡ふうあっ♡…だめえ〜  
今日も、私の…おっぱい、育っちゃてるう♡」



♡ふう♡

♡ふう♡

♡ふう♡

彼女の名前は「カコ博士」  
このジャパニクスの研究や実験を行っていたり、おっぱいが出る様子が、  
サドスタの影や実験の過程が、  
その大きくなっただけで、  
今日も大きなおっぱいがある、  
今日も私の…おっぱい、育っちゃてるう♡

描いた人：エリンギ電Ryu







## カコ博士改造計画

たると

それはまったくの偶然だった。いや、偶然と呼ぶには奇跡的すぎる確率なのだが。震える手でマウスを操作しファイルを確認する。いくつか選ぶと、USBへとコピーを取る。

カタカタとなるパソコンを前に、煙草に火をつけた。紫煙を天井に燻らすとパイプ椅子にもたれ掛る。ギシ、と頼りなくイスを鳴らすと、暗闇で煌々と光るディスプレイに目を向けた。

画面にはコピー完了の表示が映り、USBを引き抜くとパソコンを終了させる。ポケットに仕舞うと、煙草を口にくわえる。さて、と一息ついた。この映像をどう使うか考える。

俺は、しががない研究員だ。ここジャパリパークでアニマルガール達を研究している。サンドスターの影響下における動物の体毛や骨の変化状況を調べるといふ、ちょっと勉強すれば小学生でも出来そうなものだ。実際、研究所内での地位は低い。

そして、研究所内で上の地位、この研究所では所長よりも上とさえ言われているカコ博士。彼女の秘密がこのポケットの中にある。これを使えば、簡単にその地位か

ら引きずり降ろせるだろう。しかし、それだけでいいのだろうか。それだけじゃあ面白くはない。今まで、たいした人生では無かった。何となく大学へ行き、惰性で取った動物学位を流されるように使ってジャパリパークに就職。ただそれだけの人生だ。良い事も無ければ悪い事も無い平凡。それも良いかと思えるほどまだ歳を取っていない訳でもない。これから俺は、悪い事をやる。映画で言うならきつと主役にも成れない悪役だ。でもそれでいい。

大したことはない人生に、花を添えようじゃないか。

「…君か。こんなところに私を呼び出したのは」

「どうもカコ博士。お忙しいところ失礼します」

「そんな上辺っ面だけの挨拶は良い」

あれから数日。ある程度の準備を終えてカコ博士を呼び出した。これで大丈夫かと何度も確認を繰り返したが。

カコ博士を呼び出したのはジャパリパークの端、備品倉庫だ。場所が場所なりに、備品の数は少ない物の、それなりに広

さがある為サボるには最適の場所だ。そこへ備品整理と称して色々な物を運び入れ、こちらの準備を終えた。

「こんなものを送り付けて、どういうつもりだ？」

「どういうつもりも何も無いですよ」

カコ博士はポケットからスマートフォンを取り出す。その画面には、俺が送ったメールが表示されていた。

『貴女の秘密を知っている。指定した時間に備品倉庫で待つ』

我ながらシンプルなメールだなと思う。シンプル過ぎる。

「で？ 私の秘密とは何だ？ ふざけているなら今のうちに謝れば不問にしよう。私も忙しいんだ」

「これ、ですよ」

こちらも、スマートフォン画面をカコ博士に突きつけた。博士はちらりと画面を見ると、解りやすく動揺した。

「なっ…何故その映像を…？」

「やっぱり、これカコ博士だったんだ」

見る見るうちに顔色が蒼くなっていく。スマートフォンをポケットに仕舞うと、ゆっくりと歩いてドアの鍵を閉めた。

ガチャンという音に、カコ博士の体がビクリと動いた。

「偶然：見つけましてね。いやあ、まさかこんなことをする人だったとは思いませんよ」

「偶然、だと？　それが偶然手に入る訳ないだろう」

「信じて、貰えないんだ？」

「ずい、とカコ博士へ一歩近づく。思わずそっぽを向いたカコ博士の巨大な胸を、ぐいと掴んだ。」

「貴様っ…！」

「おっと。抵抗したら、解ってるよね？　思わず全員に送信してしまおうかも…：しれない」

「そう言うと、カコ博士は俺の腕を掴んだまま動きを止めた。そのままカコ博士に後ろに向かせると、セーターの上から両手で胸を揉みしだく。セーター越しではあるが、その巨大すぎる胸は掌からこぼれるほどだった。」

「おお…でかい上に柔らかい…：これを揉みたがる奴らも多いんだよな…：知ってました？」

「…知るか…」

「連れないなあ。あんなことしといて…」

「黙れ…っ」

「キツとこちらを睨みつけるが、その視線を流してセーターとブラをまとめて捲り

上げる。ぶるん、と白く大きいカコ博士の胸が毀れ出た。おお、と思わず感嘆の息が漏れる。何時もその白衣とセーターに覆われているが、それでも隠し切れない存在感は男なら思わず見てしまおうだろう。なんなら触ってみたいとさえ思うだろう。研究所内男性の夢であるそれを、こうもあっさり叶えられるとは夢にも思わなかった。

「では、と両手をそつと添える。もにゅ、と人生単位で味わった事のない感触に思わず感動してしまった。むにむにと堪能するように指先を沈めていると、カコ博士からんん…と吐息が漏れた。そろそろ効いてきたかもしれないな。」

「あれ、どうしたんですか？　もしかして、感じてきてます？」

「そんなわけ…：ん…：ないだろう」

「そりや、まあそうですね。普通なら…：ね」

「…：貴様、何かして…：んんっ！」

「指先で乳輪回りをスリスリと擦る。」

「へえーカコ博士って陥没乳首なんすねえ」

「だったらどう…：くっ」

「指の間で乳輪を挟み、ぐりぐりと刺激する。何度も何度も刺激を与え、さらに爪で軽く引っ掻く。段々と硬さを増し、ついに先端がぷくりと顔を出した。」

「いやあ、やっぱり効きますねえ。アニマ

ルガール用の催淫剤とは言え。こんなものまで作っちゃうなんて、変態博士じゃないですか。カコ博士ってば。」

「なっ…：貴様そこまで…：んっ♥…：くそっ」

「色々調べましたからねえ。実験の事とか、薬の事とか…」

「映像をくまなく調べ尽し、その背景を突き止めた。上級研究員のみ入れる地下実験室。そして、そこで行われている実験の数々。秘密の実験と言えば非人道的なものを想像するが、決してアニマルガールに危害を加える様なものでは無かった。危害は、だが。」

「サンドスターの作用によるアニマルガール化、そして女の子の体をしながらも動物の雄としての特徴が現れる事に目をつけ、アニマルガールにペニスを生えさせる薬を作り出す実験。」

「傍から見たら頭の悪い実験にも思えるが、研究者としては本気だったのだろう。データの隅に隠してある報告書からその熱意は伝わってきた。アニマルガール同士の交配による第二世代を作り出す実験。そして、そのために作られた薬や副産物。」

「人体実験に至るまで、それほど時間はかからなかった。」

「白羽の矢が立った…：訳でなく、自らその手を挙げたのはカコ博士だった。彼女はアニマルガールを愛している。だからこそ反

対するかと思いきや、意外にも実験には率先して参加していた。何を考えているかは知らないが、思うところがあるのか。

ペニスを生やす薬、それに付随する、交配を促進させる為の催淫剤。その実験記録としての、映像。流石に他の研究員には見られなくなかったのか、カコ博士が一人で行っている物が彼女のパソコンに残っていたのだ。催淫剤が経口摂取で無く噴霧散布状で助かった。

硬くなった乳首を強めに摘まむと、カコ博士の耳元で囁く。

「結構ハードなプレイが好きなんですわね」

「ぐっ…♡…んっ…！」

「耐えてるカコ博士もそりますねえ。いつまで耐えられるか見ものですよ。一人でする時はあっさり堕ちているのに」

「ぐっ♡クソっ♡やめ…っ♡」

すでに親指大程に勃起した乳首を執拗に責め続ける。カコ博士は既に甘い吐息を吐き、時折強く捻り上げると、食いしばった歯の隙間から唸るような嬌声が上がった。

それでもなお、目を背け耐えるカコ博士にいらしさを覚え始めた。でも、身体は既に限界を迎えそうになっている。

片方の手を乳房から離し、器用にベルトとズボンのボタンを外す。お腹側から手を滑らせパンツの中に侵入させると、随分と

硬い物に触れる。カコ博士の呼吸が、一瞬止まった。

「せーの、よいしょ」

「こ、こらっ」

がしと掴むと、上に引っ張る。ぶるりと半勃ち状のペニスが顔を出した。ずしりとした重みと太さが、思わず感嘆の声を上げさせた。

「うわあー凄いですね。こんな立派なものを持つてるなんて」

「くっ…触るんじやない…っ」

「良いじゃないですか。いつもは自分で扱ってるんでしょ？ 偶には他の人に扱ってもらうのも一興ですよ」

「ふざけ…んおっ♡」

ごしごしと力強く扱くと、ぐんぐんと血液が回りカコ博士のペニスはびんびんに勃起した。既にパンツの中が先走り汁でべたべたになっていたのか、滑らかに扱く事が出来た。

扱く度に腰が引けているが、俺の腰にぶつかって逃げる事が出来ない。どんどんと手のスピードを上げ、射精を促す。

「こらっ…ぐっ♡…やめっ…やめろおっ…♡」

「やめろ？ 止めて欲しい時は、もうちょっと頼み方があるんじゃないですかねえ」

「んひいっ♡…くっ…やめっ…やめてく

ださいっ…！」

「んくじゃあ止めてあげます」

ピタリと手を止め、離す。予想外の出来事にカコ博士は驚いたような顔でこちらを見た。胸からも手を離すと、さらに混乱したのか今更胸に手を回し隠した。しかしそんな事は気にもせず、しゃがみこんでカコ博士のズボンをズルリと下げた。

胸に劣らず、お尻も安産型でずしりとした存在感を放つ。

「な、なにを…っ！」

「動くなっ！」

声を張り上げると、びくりと体を震わせ動きが止まる。

「そのままゆっくりガニ股になって貰っていいですかね…」

「…っ」

ぴたりと閉じた太ももの間に手を入れ、ぐいぐいと開く。カコ博士も逆らわず、ゆっくりと足を広げた。肩幅より広めに開いたのを確認すると、巨尻を優しく撫でまわす。

「次に何されるか、想像してみてくださいよ」

「…何をやる気だ…」

「こう…よっ」と

撫でまわす手でぐにりと掴むと、ぐいと尻たぶを広げた。深い谷間の間に、薄茶色のアナルがヒクヒクと蠢いている。

くんくんと匂いを嗅ぐと、ほんの少しツンとした匂いが鼻孔をくすぐる。ふうと軽く息を吹きかけると、さらにアナルがヒクついてちよつと面白い。

「ふっ…くっ…」

「個人的な動画も入れるのは不用心でしょ…こっちでも随分遊んでいるみたいじやあないですか」

べろりと舌を這わすと、お尻にきゅつと力が入る。円を描くように舌を動かし、ずぷりと舌をアナルへ進入させた。

きゅうと舌が締め付けられる。その感触を楽しみながら、更に奥へ奥へと舌を入れた。ぐにやぐにやと直腸を舐め回すと、ついにカコ博士の口から嬌声が漏れた。

「んあああっ♥あっ♥」

「あはは。アナル弱いんすねえ。ついでにこっちも…」

「んほおおっ♥」

巨尻に顔を突っ込みながら、股の下から手を伸ばしペニスを掴んで抜く。リズムカールに抜きつつ、舌でアナルを蹂躪していく。普段から弄っているからか、あつという間にはぐれていく様は無様にしか見えない。扱っている手を片方外し、中指と薬指を揃えてアナルへと突っ込む。

「おおう。あつさり飲み込むな。中もトロトロじゃん」

「ひぐっ♥ほじるなっ♥おうっ♥おほっ

♥

指先が直腸をなぞり、ひだの一つ一つを確認するように細かく揺する。ペニスが震え、先走り汁が止めどなく吹き出していた。そして全く触っていない、間に位置するおまんこからも透明な液体がたらたらと溢れ、太ももを伝いテラテラと光る。

ぐぼっぐぼっぐぼっぐぼっ♥

じゅこっじゅこっじゅこっ♥

静かな部屋に響くよう、ワザと音を立ててアナルとペニスを責める。カコ博士は息も絶え絶え、唸り声しか上げなくなった。ずぼっ指を引き抜くと、ぽっかりと広がるアナルが充血し、呼吸に合わせて開閉を繰り返す。

「いやあ、俺、こっちの穴に入れるの初めてなんすよね」

「はあっ…はあっ…はあっ…♥」

「もう何も抵抗しなくなってきましたねえ」

ズボンのジッパーを下げ、自分のペニスをもそりと取り出す。先程からカコ博士の痴態を眼前に眺めていたからか、すっかりと勃起してしまっている。カコ博士には負けるが、中々の大きさを持っていると自負している。比べた事はあまりないが。

ペニスの先端をカコ博士のアナルに添えると、そう言えばと思いつきポケットから小瓶を取り出す。どろりとした液体が入

っており、それを自分のペニスとカコ博士のアナルに落とした。ずりずりと塗りたくると、ずいゆりと先端を押し込む。

「柔らかくていい感じすねえ。ローションも良い感じ」

「ふぐっ…♥ん…♥」

「あ、ちなみにこのローション、催淫剤混ぜ込んで作ってみたんすよ。体に良いかわからないですけど、具合どうですか？」

「なっ…そんな事したのかお前…おっ♥」

ズン、と根元まで一気に挿入した。アナルがきゅんと根元を締め付けるが、それより先をふわりと柔らかく包み込む感覚が新感覚でとても気持ちが良い。

「いつもカコ博士が使ってるやつよりちよつとデカいかなーって思うんすよねえ。俺のちんぽ。おっ…すっげ締め付け…♥」

「ふっ♥ふっ♥んおおお…っ♥」

ゆっくりと引き抜き、更にゆっくりと挿しこむ。ふるふる震える巨尻が愛おしく思え、さわさわと両手で優しく揉む。

さて、そろそろ頃合いだろうか。

カコ博士の両腕を掴むと、器用に片方の手で掴む。胸ポケットに入っているリモコンを取り出すと、博士の目の前にチラつかせた。目の前でボタンを押すと、少し離れた場所にあるディスプレイにスイッチが入った。確認すると、カコ博士の両手をそれぞれの手で恋人繋ぎで掴んだ。

「ほら、丁度見えるでしょ？」

「はあーっ♡はあーっ♡…!!」

「あはは、びっくりした顔が映ってますねえ」

丁度隠しカメラの目の前に俺達は立っていた。もちろんちゃんと映るように位置取りはしたのだが。驚いたカコ博士が身じろぎするも、只々俺のペニスを締め付ける結果になっただけだ。

「おっ♡そんな動かないで下さいよ」

「なっ…これ撮って…んひっ♡」

ずばん！ と、勢いよく腰を叩きつけた。びくびくと身体が震え、間抜けな顔がディスプレイに表示された。

「ほっ♡おっ♡おんっ♡おんっ♡」

「すっげ締まるっ♡おらっ♡おらっ♡」

ばちゅっばちゅっ♡とペニスを執拗に打ち付ける。一突きするたび、カコ博士の股間のペニスがぶるんつぶるん♡と大きく震え、まるで振り子の様だ。余りの快楽に身体が倒れそうになるカコ博士をぐいと引っ張り、そのアへ顔をしっかりと録画する。

瞳孔はぐるりと上を向き、だらしなく開いた口からは舌がでろりと飛び出していき。いつもの気丈な博士からは考えられないほどの乱れた姿に興奮し、打ち付ける腰のスピードが更に上がる。催淫剤が俺にも効いてきたのか、気晴らしにするオナニー

の何十倍も気持ちがよかった。

「おらっ♡そのだらしねえ顔もっと思せろっ♡おらっ♡」

「おっほっ♡み、見るにやっ…おっおっおっ♡」

「さっきから細かくイってるの知ってんだよっ♡おらっ♡ケツマンコアクメしろっ♡ちんぽからザーメンひりだせっ♡」

「ふぎっ♡だすかっ♡ぜったいだすものかっ♡」

「ならよお…おらあっ！」

前屈姿勢になりそうなカコ博士を引っ張り胸を張らせると、片腕でしっかりと抱きしめもう片方でペニスを扱く。

先程とは違い力強くしがしと扱き、アナルに突き刺したペニスがぎゅうぎゅうと締め付けられるのを確認すると、奥深くまで刺さるほどに腰を突き出し、更に扱きぬいた。

「いけっ♡いけっ♡ちんぽいけっ♡」

「ひやめろおっ♡あっ♡でるっ♡でりゅっ♡」

ぶるり、と身体が震え、カコ博士は勢いよく射精した。

どびゆるるうううっ！どびゅっ！どぶっ！どびゆるるっ！

「おおおお…♡♡♡♡おっ♡おっおっ♡」

「うおっ！ ケツマンコ締まるっ♡こっ

ちも出るっ♡」

びゆるるるっ！ と思わずカコ博士のアナルへ射精する。少し冷静になった頭でディスプレイを見ると、噴水のようにペニスから精液を吐き出している博士がまだ映っていた。

「どんだけ溜めてたんすか…♡んんっ…よっ♡」

「んひっ♡」

ずぼっ♡とアナルからペニスを引き抜くと、ぽかりと開いたアナルからどろりと精液があふれた。人の事を言えず、俺の方も結構溜まっていた様だ。射精し終わったのか、カコ博士はくたりと力が抜け、床の上に尻餅をついた。ぜえぜえと呼吸が荒く、ぼんやりと俺の太ももにもたれ掛った。ここで悪戯心が働き、博士の頭を掴むと口元にペニスをピタリとくっつけた。

呼吸を整えたい博士は口を思う様に閉じられず、はあはあと生暖かい呼吸がペニスを包む。そのまま口の中へペニスを入れると、暖かい舌がにゅるにゅるとペニスにまとわりつく。

「おっ…おっいいっすねえ。しっかりと舐めてくださいよ…」

「んむっ…♡じゆるっ…ちゅぽっちゅぽっ…♡」

「無意識なんすかねえ。ほらちゃんと残らず吸うんですよ♡」

「んむむ…じゆるるるるっ♥じゆるるっ♥」  
尿道に残っている精液を残らず吸い残し、ぼんやりとした顔で咀嚼する博士。吐き出すかと思いきやごくりと飲み込み、口の周りにこびりついていてる精液もしっかりと舐めとった。

大量に射精したと自分では思っていたが、心ここにあらず精液を舐めとる博士の姿に思わず興奮し、ぎゆるぎゆると金玉が精液を作り出すのが解る。催淫剤がまだ残っているのか、ペニスもギンギンに復活し、もう一回戦位ならいけそうな程には回復した。ならば。

「そんなじゃ、カコ博士。そのままごろーんとしてください」

「…?…?」

何も言わずごろりと床に背中を付ける博士。股の間に腰を降ろすと、両ひざを掴みぐいと広げた。博士のペニスも回復したのか、元気よく勃起し姿勢の為かお腹の方にくっ付いている。

そして、そのサオの下にはとろりと熟れたおマンコが顔を出す。触ってもいないのに受け入れ態勢は万全だ。

「初めてって事は無いでしょ…ほら、入っちゃいますよ」

「?…♥?…♥」

「はは。うっとりしちゃって。せーの…よっ♥」

じゅぶぶつとあっさりペニスを啜え込み、アナルとはまた違った感触を楽しむ。アナルは入り口がきゅうと締め付け、中はふわふわと柔らかく包み込むような具合で、おマンコの方は全体的につぶつぶとひだだがぎゅうぎゅうと締め付け、精液を吐き出させる為だけに存在するようなスケベな壺だった。

パンツパンツと小気味良く腰を振ると、気が付いたのかカコ博士が慌てて俺の腕を掴んだ。

「おっ…おいそっちは…おっ♥だめっ♥そっちはだめだっ♥」

「だめって、何がダメなんすか?おっ締まるっ…こっちは後ろと違ってちよつとキツいっすね♥あんまりこっちは入れた事無いんすか? 意外だなあ」

「う、うるさっ…くっ…♥あっ♥あっ♥」  
ぺちんぺちんとカコ博士のペニスが二人の間で大暴れしている。にゅじゅっ♥にゅじゅっ♥と結合部が泡立ち、幾分早めに射精感が腰回りに溜まって来ていた。

正常位の形から、大きくぶるぶると震える胸に倒れ込む。片方は手でしっかりと揉み、もう片方は口で吸い付いた。大きくピンと勃起した乳首は舐めごたえがあり、甘噛みを交えながら舌でコロコロと転がす。

「おおっ♥あひっ♥しゅうなっ♥強く吸

う…んひいつ♥」

「ちゅちゅううっ♥んむんむ♥ちゆるるっ♥」

乳首を責め、種付けプレス of 形でひたすらにカコ博士のおマンコにペニスを叩きつけた。カコ博士から獣の様な唸り声が発せられ、そろそろ絶頂を迎えそうであった。

「ちゅぽっ♥…おらっ♥中に出すぞっ♥」

「おっ♥おんっ♥にやかはだめっ♥にしんしりやうっ♥」

「うるせえっ♥孕めっ♥おっおっ♥出すぞっ♥」

「しよとにだしてえっ♥おっ♥おおっっ♥」

タイミングよくしっかかりと腰を叩きつけ、子宮口へペニスの先端をびったりとくっつけると先ほど以上に射精した。

びゆるるるるっ♥びゅびゅっ♥どっびゅうっ♥…びゅっ♥

完全に孕ませるつもりで射精を行う。おマンコがぎゅぎゅと収縮し、お腹に挟まれた博士のペニスもびゆるるると射精していた。胸から顔を上げると、またも快樂に落ちた顔をしていた。折角だからと、そのまま唇を奪う。舌をじゆるじゆると混ぜらせ、唾液を吸った。代わりに自分の唾液も流し込み、ごくりと飲み込む音を確認して唇を離した。たっぷりと堪能し、満足できたのでペニスをずるりと抜くと、ごぶごぶ

と入りきらなかった精液が溢れ出る。ひっくり返した蛙の様な姿のカコ博士を一瞥すると、ポケットに仕舞ったリモコンを取り出し停止スイッチを押した。ディスプレイに表示された録画停止の表示を確認すると、服装を整えそのまま部屋を出る。風邪でもひかれたら困るのでタオルケットをかけておいたのは優しさである。

もうね。カコ博士」

俺の部屋で大量に射精する博士を横目に、うまく言った事に安堵してため息をついている俺がいたのだった。

終

「ほら、見てくださいよ。すげえ綺麗に撮れてるでしょ。これ結構良いカメラ使ったんですよねえ。隠しカメラも高画質な時代になったんだなあ。ねえ？ カコ博士？」

「くっ…♡んっ…♡」  
ソファアに座り、大画面に映るカコ博士の痴態。

それを眺めながら、博士のペニスを扱く。  
「あ、ほらこっからですよ！ アナルに入られる時の表情とかすげえ良いですよねえ…見返した時にも思いましたもん」

「そんな事の為にわざわざ…っ♡やっ…やめっ…♡」

「まあまあ。楽しみましょうよ。逃げられないんですから。あ、もしかしてイキそうだったり？ んじゃラストスパート♡」

「いやっ♡おうっ♡でりゅっ♡」  
びゅっ♡びゅるるっ♡どっぶ♡

「今日もいい射精っぷり…いっぱい楽し

## 夢を追い求めて……………

スカールレッド G

ジャパリパーク、どこの国家にも属さない国連直轄の保護地域だ。在来種から絶滅した動物が人に近い姿で現れて知能を持つフレンズ化現象は未だに解明されていない。

各国はこの摩訶不思議な現象の解明のために国の威信をかけて研究員を大量に派遣した。

進化論や創造論といった従来の通説を打ち破る出来事を目の当たりにした者たちは恐怖した。

このサンドスターには、特殊な効力が働いているに違いないと確信し、普段は政治的・軍事的対立が起きている西側諸国や東側諸国もこの一件だけに関しては共通の目的の為に手を取り合った。

皮肉にも東西冷戦が終結した要因はサンドスターによってもたらされたものだ。

『風が吹けば桶屋が儲かる』ということわざがあるように、一見にも関係性がない

出来事でも、調べてみれば遠因となっている事を示すのだが、まさにこのことわざ以外に当てはまる言葉が見つからない。

ジャパリパークが各国の利害関係が一致して国連統治下になってから、日本も文部科学省を中心とした派遣チームを年に数百人態勢で送り込んでいる。

様々な実験も行い、このうち文部科学省と環境省が共同で行った絶滅種のフレンズ再生計画は大成功を収めた。

近年になって絶滅してしまったニホンオオカミや日本原産のトキの剥製をサンドスターに接触させた結果、人工的にフレンズ化して復活させたのだ。

政府の公式発表により、絶滅動物のフレンズ化による復活計画が本格的に始動した。

無論、この実験に異を唱える人もいた。それが日本文部科学省から派遣された

動物研究学の第一人者であるカコ博士であった。

「仮にですが…もし、彼らが人間によって絶滅させられたことを覚えていた場合、人間に対して激しい憎悪を向けてくるかもしれません。そうなった時、誰がリスクを負うのですか？」

カコ博士によるフレンズの保護運動と職員への支援対策はマスメディアを通じて多くの人々の心を動かした。

結果、職員への負担軽減などを約束してもらえることに成功したのだ。

そんな上層部への対立も辞さないカコ博士が数日に渡って自室から出てきていないという。

丁度夕飯を食べ終えて晩酌がてらに売店で購入したアルコール度数九パーセント以上のストロング系のお酒と、茹で上げて塩を振りかけた枝豆を食堂で食べてい



る時に同僚の職員が私に相談してきたのだ。

「最近カコ博士が部屋から出てこないよな…お前は知っているか？」

「…どうということだ？博士はいつも研究室にいますよ？」

「俺が担当している研究にいつもなら顔を出して指示を出しているけど、外に出てフレンズとの調査に向かうはずだけだなあ…なんか…しばらく体調が優れないだから部屋から出てこないのさ」

「おいおい、本当に博士は大丈夫だろうな？万が一自殺でもしたら責任問題にもなっちゃうぞ」

「大丈夫だと思うよ？ほら、女性特有の…あるだろ？サイクル的にやってくる現象が」

「その現象だとしても…カコ博士は何日から研究室にやって来ていない？」

「三日前からだが…：…：…そう怖い顔をするな。ちゃんとスマートフォンに連絡は入れているし、返信だっている。一時

的な体調不良だ。きつと」

「…：…不安だ。ちよつと俺はカコ博士に面会してくる」

何を呑気に喋っているのか俺には理解できなかった。

カコ博士が精神的に苦しんでいるかもしれない、それが原因で自ら命を絶つ恐れだっている。

カコ博士の事が不安になってきた。もし何かあれば大変なことになってしまいかもしれない。

そうなる前に一度会ってみて話をしてみる必要があると直感した私は、お酒と枝豆をテーブルの上に残したまま、カコ博士の自室が置かれているジャパパーク動物研究所に向かって走った。

研究所の建物の中で灯りが付いている部屋がある。

『研究所責任者宿直室』  
この部屋にカコ博士が寝泊まりしているはずだ。

外から見る限りでは僅かながら灯りが部屋を照らしているのが確認できたが、部屋のカーテンが閉ざされている状態の為、詳細は不明だ。

宿直室前に到着した私はドアのノックを三回鳴らしてカコ博士が無事かどうか確認を取った。

「カコ博士、夜分遅くに失礼いたします。少しばかりお話ししたいことがございますがよろしいでしょうか？」

「…：…：」  
宿直室から返事は無かった。

ドアからは何も返事が返ってこない。十秒後に再びドアをノックして呼び出しを行う。

「カコ博士？部屋にいらっしやいますか？」

「…：…：」  
返事は無い。

無音、ただただドアの前で耳を傾けるも、部屋からはテレビから発せられているような微かな音楽が聞こえるだけだ。

ふと、ドアの鍵が施錠されていないことに気が付いた。

本来であればドアの鍵は施錠されているものだ、特にカコ博士は女性だ。

押し入り強盗は無いにしても要求不満を抱え込んだ職員が異性の研究員を襲う可能性だってゼロではない。

カコ博士の性格からして、そこまで無防備に鍵を閉め忘れるようなことはしない。何度も戸締りを確認する人だ。

私は部屋の中で何かあったのかもしれないと思い、覚悟を決めてドアを開けた。

「カコ博士、失礼ながら部屋に入らせていただきますよ」

部屋の中は暗いが、奥に灯りが付いている。

暗い部屋を唯一照らしている場所、それは宿直室の隅っこの部分だ。

そこでカコ博士がいた。

薄型テレビを眺めるように座っている

博士の姿があった。

周囲にはティッシュやフレンズに関する

研究論文が散乱しており、足の踏み場もないほどに散らかっていたのだ。

「カコ博士！」  
博士の後ろに立って叫んだ。

するとカコ博士がこちらに振り向く。その姿に思わず息を飲んでしまった。

「ああっ……見ないで……私を……見ないで……」

「か、カコ博士……それは一体……」

カコ博士の身体に変化が起こっていた。遠くから見れば分からないかもしれないが、近くで見ればその異様に気が付く

かもしれない。

狼か狐のような耳が頭の上に生えており、さらに身体的な特徴もどことなく動物

のように変化しているようにも見えなくもない。

まるで身体がフレンズ化したような光景だ。

カコ博士は身体をタオルで覆い隠して震えながらソファアの上で身体を丸くな

ってしまふ。

「カコ博士……何かあったのか話してもらってもよろしいでしょうか？」

「……この身体になってしまった原因は……そのテーブルにある瓶が原因よ……」

「瓶？この栄養ドリンク剤のことですか？」

「それは栄養ドリンク剤じゃないの……その薬を間違えて飲み込んでしまった……気がついたらこの身体になってしまったのよ」

見た目はごく一般的に市販されている栄養ドリンク剤にそっくりだが、よくよく目を凝らして見れば『人工発情剤』という文字が書かれていた。

しかし、字が小さくて読みづらいこともあってかカコ博士は仕事終わりに誤ってこの人工発情剤を飲んでしまったという。

結果、朝起きたらフレンズの特徴をいくつか受け継いでしまった身体になってし

まい、外に出ようにもあまりにも目立ちすぎで、外に出ようから外出できない状況になったのだそうだ。

「人工発情剤に何が入っていたのですか？普通の媚薬とかは高麗人参とかが有名ですが……」

「その……この人工発情剤にはサンドスターが入っているの……だから、その影響でこの姿になってしまったのだと思うわ」

信じがたい話だが、現にカコ博士がこんな姿になってしまっている以上、事実として受け止めなければならない。

ぴよこぴよここと猫耳らしきものが彼女の頭の上で反応しているが、どことなくネコ科の動物のようだ。

観察しているのも悪くないかもしれないが、既に三日間以上この状態ならかなり不便だろう。

仕事にもいけない上に、人目についてしまう。

私はカコ博士に何か必要なものはない

かと尋ねた。

「カコ博士、何か必要なものはございませうか？」

「そうね……。出来ればインスタント食品とか持って来てほしいのだけど……：お願いできるかしら？ここ三日間はお菓子和紅茶ぐらいしか口にしていないの……」

「なるほどインスタント食品ですか？分かりました。では直ぐに持ってきますよ。カップラーメンとか電子レンジで直ぐに出来るのもよろしいでしょうか？」

「ええ、お願いするわ……。ありがとうございます」

私は一旦食堂に戻ってからインスタント食品をいくつか購入した。

冷凍庫にあったカット野菜や中華スープの素、春雨、それに冷凍餃子や豆腐を使用したハンバーグなど様々だ。三日間もお菓子和紅茶だけの生活を送ってきたカコ博士には少しでも野菜を食べさせてあげたい。

そんな一身体野菜類が多く入っているインスタント食品を買いこんでカコ博士の宿直室に戻ってきたのだ。

「カコ博士、只今戻りました」

「おかえりなさい、何か買えた？」

「とりあえずインスタント食品で野菜が豊富に入っているものを買って来ました。今一品だけでも食べますか？」

「ええ、少し胃の調子を整えるために頂くわ」

カコ博士の為に私はカット野菜を使用し栄養バランスの取れた中華スープを作ることにした。

鍋に水を半分ほど入れてから水が煮込むまで沸騰させてから野菜をぶち込む。

野菜がほぐれるほどに柔らかくなったら中華スープの素と冷凍餃子を入れて味を調える。

味を確かめてみて、問題が無ければ仕上げに春雨を入れてしまおう。これでかき混ぜれば水餃子和えの中華スープの完成だ。

大学校生活時代、あまり裕福な家庭では

なかった私はアパートでこの水餃子和えの中華スープをよく作って腹ごしらえをしていた。

業務用スーパーで売れ残った野菜を半値以下で頂いて、春雨を入れればかなり量が多くなる。貧乏性というかはさておき、少なくとも腹いっぱい満たされるだけの量は確保できる。

テーブルの上に雑巾を置いてからその上に鍋を置いた。

茶碗を二つ取り出して夕飯が完成したのであった。

「さあカコ博士、ご飯が出来ましたよ」

「すごくいい匂いね…頂いてもいいかしら？」

「どうぞ、熱いので気をつけてくださいね」

お玉から茶碗に中華スープと水餃子、春雨や野菜などを移すとカコ博士は食べ始めた。

余程お腹が空いていたのだろう、一心不

乱になって胃の中に駆け込むように食べている。

「はふう！はふう！美味しいわ！とっても！」

「博士、あまり急いで食べると胃がビツクリしますよ。」

「わかっているわ！ふう！ビギイ！し、舌を噛んだ！」

「落ち着いてください、まだ沢山ありますから」

茶碗に中華スープを盛りつけると再び食べる速度が速くなっていく。やはりお菓子と紅茶だけではお腹が空いてしまっていたようで、中華スープを五杯もおかわりして鍋に入っていた水餃子と野菜、そして春雨の大部分が空になっていた。

腹ごしらえを済ませたカコ博士は改めて私にお礼を言っていた。

「本当に助かったわ…貴方が来てくれて良かった！」

「いえ、私はカコ博士が心配だったから偶々来ただけです。薬の件はどうしま

す？」

「そうね…明日経過しても治らない場合は正直に申告しておくしかないわね、いつまでも部屋に引きこもっているわけにはいかないし…」

「そうですね…」

「それと…あなたに頼みたいことがあるの」

頼みたい事とは一体何だろうか？

そう思っていると突然カコ博士は上の身に着けていた白衣を脱ぎ始めた。

白衣に続けて上着までゆっくりと脱ぎ

始めている。いくら私が男性とはいえ、異性の下着まで露わになっている状態では何が起きているのか理解できない。

思わずカコ博士に問いかけた。

「か、カコ博士?! 一体何をしているのですか……?」

「さつき、貴方が作ってくれたスープを飲んでから身体が火照ってしまっているの……だから、貴方に私の火照っている

身体を鎮めてほしいの」

「鎮めるって……まさか、人工発情剤の効果がぶり返してしまっているのですか？」

「そうみたい……ね、我慢できなくなってしまう時ってないかしら？今の私の身体がそんな感じなの。どんどん熱くなってきた……求めているのよ、身体が……：貴方の事を」

「ちょ、博士！落ち着いてください！」  
気が付けば、カコ博士は下着姿のまま私の身体に抱き着いてきた。白色のブラジャーが豊満な胸と共に押し付けられていき、異性の身体に触れられたことで下半身が熱くなってきてしまう。

カコ博士の吐息が聞こえる。私の顔に近づいていき、ゆっくりと口にキスをされた。

「はあっ……ちゅうう……♡」

「あっ……か、カコ博士！」

唇を奪われて一瞬だけカコ博士を制止しようと思ったが、発情剤による副作用で力が強くなったカコ博士は、私を押し倒し

てしまう。

離れようとしても離れることはできない。強く両手を掴まれたまま、私はカコ博士の淫靡な舌によって口の中を蹂躪されていった。

カコ博士の抑え込んでいた理性は決壊し、今のカコ博士は発情した獣のように己の欲望を発散しようとしていた。

「んじゅう……ちゅう……じゆるるるううう……♡」

舌先がカコ博士のザラザラした舌によって重なり、私の口内はカコ博士が念入りにディープキスをせがんでくる。

というよりも、キスをしたくてたまらないらしい。

「んちゅううう……♡じゅうううううう……♡」

「博士……！」

「もっときゅううううってしてあげるわ♡」

カコ博士の暴走は止まらない。まるでア

クセルを踏み続けて走りだしたまま止まらないレーシングカーのように動きを止めるどころか、むしろ加速してしまっている。

発情剤とやらの影響で、私の身体は無様にも力強くなったカコ博士によってどんどん赤裸々に服を脱がされてしまう。

上着は豪快に某アメコミヒーローの早着替えをするように両端に引き裂かれてしまう。

「ほら……♡貴方の身体からムンムンとオスの臭いがしてくるわ……♡その臭いを嗅いでいるだけでなんだか身体が興奮してきたしまうの……♡だから、もっと貴方の身体を頂戴♡」

上着だけではない、ズボンもゆっくりと降ろされてしまう。

必死に抑え込んでいた興奮、それを我慢していた衣類は脱がされていき、生まれたばかりの姿をカコ博士の前でさらけ出してしまった。

「博士！やめてください！」

「でも貴方の大きくて立派なモノは立派に勃っているわよ、我慢しないでいいわ

…♡私が気持ちよくしてあげる♡」

ゆっくりとカコ博士は身をかがめた。

そして、私のペニスがカコ博士の温かい右手によって握られてしまった。

博士はゆっくりと竿先を舌で舐め始めながら、亀頭の部分を唾液で温かく満たしていく。

亀頭の先端部分にも舌先をちよちよく入れてきてしまい、敏感な私は少しだけ我慢汁をカコ博士の舌先に出してしまう。

「んちゅう…♡雄汁の先端って苦いわね…♡でもその苦さがたまらないわ。もつと、もつと頂戴♡」

何度も何度も舐められていくペニス。

唾液と舌先が絶妙なバランスで私のペニスを飲みこんでいくようだ。

その感覚と興奮がどうにも止まらない。

ビクン、ビクンと私が身体を震わせてしまふほどにカコ博士は夢中になって竿全体を味わい尽くそうとしている。

菌で嘔まないように注意しながらも、顔を赤くしながらペニスを吸い取るように啜え込んだ。

—じゅるるるるるっ！

まるで掃除機に吸い込まれていくような感覚だ。

吸引力の変わらない掃除機の宣伝広告のように、カコ博士は喉元奥深くまで啜え込んだ私のペニスを根元から吸い上げていく。

獲物を味わいつくす獣のような目つきで私を見つめている。

私は食われている。

カコ博士によって今まで異性との性体験がなかった私のペニスが味を覚えようとしている。

既に私の玉袋には何度も何度もこみ上げてくる射精要求がひっきりなしにきている。

ドクン、ドクン、ドクン…

精巣がカコ博士にぶちまけたいと蠢いているようだ。

これには流石に我慢できなかった。

最初の一撃はいつも切ない、そんなドクドクと溢れてくる精液を止めることなんて私にはできなかった。

私はカコ博士の口腔内の粘膜に我慢できずに思いつき射精した。

—びくう！びくびくびくう！どっ、どっ、どっ！

ペニスがカコ博士の口腔内で何度も脈打ち、口の中は私の白濁液で一杯になってしまった。

ここ最近オナニーすらしていなかった私の精巣に溜め込んでいた精液はさぞ濃かっただろう。

カコ博士は嬉しそうに口の中に溜め込んでいる精液を味わうように咀嚼しながら噛みだした。

「んちゅう…♡すごく濃かったわ♡濃厚で…苦くて…そして立派なペニスを

もつと頂戴♡」

私には拒否権など無かった。

カコ博士は身に着けていた下着のブラジャーやパンツを一つ一つ外していく。

カコ博士の豊満なおっぱいがさらけ出していた。

乳輪が大きくて乳首も勃っている。

そして下着のパンツは既に液で湿っていた。

先程カコ博士に出したばかりなのに、まだペニスが萎えていなかった。むしろさつきよりもギンギンにそそり立っていてカコ博士も興味津々に見つめていた。

「うふふ♡元気なペニスね……♡さ

あ、今度は私の胸を押しつけてあげる♡」

傍においてあった蜂蜜の入った容器を手にとって胸にゆっくりとかけ始めた。

蜂蜜の甘い香りが周囲に漂うのと同時に、カコ博士の弾力ある豊乳が目の前にやってきた。

おそろく♡カップはあるだろうか、たゆん…たゆん…乳を揺らしながら私に揺

さぶりを掛けてきている。

「さあ……自由にしてもいいのよ？

どうする？顔に押しつけるかペニスに挟んだほうがいいかしら？」

ふと、カコ博士の目を見た。

目を細めて淫靡に耽っている顔であった。

その顔を見て、私の心に火が付いた。

こうなったら徹底的にやってみよう。

そんなちっぽけな野心によって私は両手を使って、カコ博士のふくよかな豊乳を掴んだ。

大きくて柔らかい。

それがカコ博士の豊乳を掴んだ感触だった。

蜂蜜のコーティングがされている豊乳

は実にぬるぬるしていた。ローションの代わりにつけたのかもしれないが、意外と甘い香りと滑らかな感触が良い感じにフィットしている。

両胸を掴んでから私は指先を使ってカコ博士の乳首を弄り始めた。

「ひやうん♡」

ぐりぐりと弄ると、ピンク色をした乳首は弄れば弄るほどカコ博士の性感帯を刺激していった。

ツマミ式のラジオを弄るように親指などを積極的につかうだけでカコ博士は思わず声をあげる。

「あっ♡あっ♡ち、乳首が♡あっ♡だ、だめ♡あっ♡」

「カコ博士、まだまだこれからですよ？どんどん乳首を責めますので覚悟してくださいね」

「えっ♡あっ♡だめ♡あっ♡待って♡あっ♡」

カコ博士の乳首を赤子のように吸い始めた。

流石に母乳は出ない。

それでもカコ博士のいやらしい乳首を吸わないわけにはいかない。

フェラチオ射精されたのだから乳首でカコ博士を絶頂させるのも悪くない。ここに一転攻勢だ！

私がアダルトビデオなどで見た知識を活かす時が来たのだ。

乳首を優しく甘噛みしながら時計回りに舌先で舐め回すだけでカコ博士の股から透明な汁がこぼれ出ていく。

身体が震えながらビューツと出ていく愛液を見ると、それだけでもこちらが興奮してくる。

「カコ博士、こんなに乳首を弄られて気持ちいいですか？もっと弄りますね」

「ひやあっ！ああっ♡あっ♡弄って♡あっ♡いやあ♡あっ♡」

嫌がっているように見えるかもしれないが、カコ博士の身体は乳首で弄られて気分が良いようだ。

本気で嫌がっているなら力ずくで抵抗しているはずだ。

それなのに抵抗をしないという事は、私の行為を容認している証拠なのだ。

舌先でコリコリと両方の乳首を弄っているとカコ博士が身体を震わせてついに絶頂を迎えた。

「だめえ♡あっ♡で、でちゃう♡あっ♡やあ♡あっ♡でるうううう！！！」

「ぴゅるるるる！！！！……じゅわわわわ……」

カコ博士の淫裂からドバドバと溢れるように愛液が噴射されていた。

綺麗な線を描きながら愛液が股の間にこぼれ落ちていった。

酸味と塩辛い匂いが漂い、シーツの上は愛液まみれになった。

カコ博士の匂いが染みついたシーツの上でもっと激しくセックスの段階をあげることにした。

息を荒くしているカコ博士の股をゆっくりと広げて、私はその間に挟まるようにして秘所をゆっくりと指先で触れた。

「だ、だめ♡あっ♡そこは……汚い♡あっ♡」

「汚くなんかありませんよ、カコ博士の立

派な生殖器ですよ。とっても綺麗だ……ピンク色で、それでいて毛の処理もしっかりしている美しい場所ですよ」

「褒めても……何もでない♡あっ♡弄るのは♡あっ♡」

「ほら、カコ博士の愛液がぐしゃぐしゃになるぐらいに感じているじゃないですか、ここをもっと弄れば気持ちよくなれますよ」

緊張しているのか、カコ博士の淫裂がひくひくと唸っているように見える。

ゆっくりと指先が淫裂の先端に触れるだけでカコ博士が身体や発情剤を飲んだ影響で頭の上に生えてきた猫耳や尻尾がピクピクと震えている。

下から上に淫裂をなぞるように指先を動かすとカコ博士は顔を真っ赤にして口を両手で隠していた。

膣口にゆっくりと人差し指をいれるだけでカコ博士は淫らかな声を発する。

「はあん♡あっ♡あっ♡指が、私の膣内



に♡あっ♡」

指先をちよっと弄るだけで愛液がダラダラと流れてくる。

淫裂からにじみ出てくる愛液、その愛液を吸うために私はゆっくりとカコ博士の股に近づく。

そしてゆっくりとピンク色の淫裂に舌先で舐め始めた。

「ひやああああ♡」  
止まらない愛液。

その味は酸味と塩気が絡み合ったような味だ。

ちよっとばかり塩の味が強いが、カコ博士の綺麗でまだ使われていない綺麗な淫裂を私が最初に舐めたのだ。

先程まで誘っていたカコ博士は既に顔を真っ赤にして手で顔を隠そうとしている。

淫靡なカコ博士の喘ぎ声が私の性欲を駆り立てていく。

淫裂や膣内を舌先で刺激するだけで溢れていく愛液。

「いい♡舌先で……また、い、いくうううう♡」

淫裂からじわじわと愛液がこぼれ出てくる。

そのこぼれてくる真新しい愛液を啜りながら、カコ博士の顔を見た。

カコ博士は求めている。  
肉体的に求めているカコ博士。

私のペニスは先程フェラチオ射精をしたばかりなのに、再びギンギンに膨れ上がって来ている。

「お願い♡挿れて……♡」

私の勃起したペニスを見たカコ博士は嬉しそうに股を開いて淫裂をくばあと広げる。

むっちりとした身体に、猫耳としっぽを生やしたカコ博士。

その姿に私はついに彼女の膣内にペニスを入れる決意をした。

「挿れますよ……カコ博士！」

目がとろんとしたカコ博士の頬にキスをしながらゆっくりと淫裂を分けながら

ギンギンに膨れ上がったペニスを膣内に差し込んだ。

「ズブツ、ズルルルッ！！」

「んああっ！ん——っ♡♡♡」

愛液がローションの代わりになってペニスの挿入は楽であった。

ゆっくりと亀頭部分から膣内に入り、ペニスの根元まで入り込んでいく。

まだだれも踏み入れていないカコ博士の膣内からは処女膜を破ったのだろうか。

少しだけ壁のようなものにぶつかってから数十秒後に赤い血がうっすらと流れ出た。

「カコ博士……痛いですか？」

「い、痛くない……挿れて♡貴方の立派な逸物で私の淫膣をかき乱して……♡」

「分かりました、それじゃあいきますよ」

「うん♡あっ、あううっ！んんっ♡奥まで……入ってきているううう♡」

生暖かい淫膣の中でペニスが締め付け

られてきている。

カコ博士が先程よりも大いに感じているようだろう。

互いに顔を対面しながら腰を思いつきり揺らし始めた。

パソコン、パソコン、パソコンと愛液を包み込んだペニスがカコ博士の膣内で蠢いている。

空気が入り、部屋の中で男女が一つになって交尾をしている音が響き渡る。

その音をバックにして、私はカコ博士の両手を掴んだ。

互いに手を掴み、ベッドを揺らしながら熱い夜を過ごしている。

「あああん♡あああん♡もっと、もっと挿れて頂戴♡」

「カコ博士！カコ博士！」

「うん………！もっとときて♡ああああん！！！」

汗をかきながら、私がカコ博士を押し倒すように膣奥までずぶずぶとペニスを差し込んでいく。

子宮口近くまでペニスが奥深くまで当たっていき、その突きあたる感触が何とも

言えないほどに快感となってきた。

カコ博士は唾液を流しながら私を抱きしめようとしている。

一旦手を離すと、カコ博士は私の背中に手を回してギュッと抱きしめてきた。

このまま続けてほしいようだ。

猫耳をびよこびよこ動かしているカコ博士にさらに膣奥へとペニスを挿入していく。

淫膣と淫棒が擦れあい、部屋には摩擦で生じた淫音が激しく響き渡る。

―じゅぼっ、じゅつう♡ずぼぼっ♡

「ひいひいひい♡奥まで………どんどん

んいっちやう♡」

「カコ博士の赤ちゃん製造部屋の子宮ドアを叩いておきますね」

「あっ♡待って♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡」

より深く、より激しく。尻尾がピンと立

ってきている。

カコ博士の爪が私の背中に食い込んでいく。

それほどまでに気持ちがいいのだ。

彼女の綺麗な髪は大いに乱れてオスを求めるメスへと変貌を遂げている。

そして、カコ博士の子宮部屋を亀頭の先端部分でノックしているうちに二度目の絶頂を迎えた。

大量の白濁液が一斉にカコ博士の子宮口前に注ぎ込まれた。

「ああああ♡♡♡熱いのがきちやう♡♡♡おっ♡おっ♡おっ♡♡♡」

―どびゆるうううう♡♡♡

膣内の奥深くで何度もペニスが唸り、そして玉袋に入っていたザーメンをすべて注ぎ込んだ。

そのまましばらくペニスを挿入したままカコ博士とディープキスを重ねた。

互いに絶頂を迎えて愛液と精液が混じりあった結晶が秘所からぼたぼたこぼれている。

私はゆっくりとペニスを膣内から引き抜いた。

栓の役割をしていたペニスが引き抜かれたことでねっとりとした白濁液が淫裂からドクドクとこぼれ出てきた。

こぼれ落ちていく白濁液、やがて私とカコ博士は互いに抱きしめあったまま、ベッドの中で眠りについたのだ。

朝、私が目を覚ますと同時にカコ博士の身体から猫耳や尻尾といったフレンズの特徴が結晶のようなものと一緒に消えていき、残ったのは人間としてのカコ博士の姿であった。

人工発情剤の効果が切れたのだ。

だが、カコ博士は私から離れようとはしなかった。

むしろギュッと抱きしめてきている。

「カコ博士……薬の効果は切れたの

では？」

「ええ、確かに切れたわよ。でも薬が切れても貴方の事が……好きになってしまったの……」

「私を？本気で？」

「ええ、本気よ……傍にずっといてほしい……」

カコ博士はそういつて私の唇を奪っていった。

発情剤を飲んだ時とはまた打って変わって情熱的なキスでもあった。

今日は祝日だからまだまだ大丈夫そうだった。

心と身体を通じあった二人になった今、私とカコ博士は正式な恋人としてくっつくことになったのだ。

明後日の仕事からはカコ博士のチームに移るようになるそうだ。

であればこれからどうなるか楽しみだ。私は新たな楽しみを見つけると同時に、

カコ博士との甘い休日をつくりと過ごすのであった。

完

## 過去への執着、燃ゆる鳥が父母にする

せがれきんぐ

ジャパリパークは巨大総合動物園ということからアミューズメント施設としてのイメージが強いが、研究施設も存在する。

そんな研究施設の副所長、カコはその中でも極めて優秀で、働き者であり、この日も夜遅くまで研究に没頭してしまっただようであった。

「ん、あらもうこんな時間ね」

1時を指す時計を見てカコは言う。

「あんまり働き過ぎるとミライにもナナにも心配かけるし、園長にも言われてしまうわね、明日からしばらくパークでも回ろうかしら」

そう独り言を言いながらカコは端末を起動させ休暇申請システムに入る。

「……そういえば最近ずっと研究室に籠りっぱなしだわ、数か月単位の休暇申請になるわね……」

早急に休暇を取るよう警告する画面を見たカコはそう呟いた。

「うーん、明日考えましよう……今日はもう寝ないと……」

そう言って立ち上がったカコがベッド代わりにしてるソファへ向かおうとすると、突

然まばゆい光を放つ物体が現れ、それと同時に笑い声が響いた。

《ホホホホ》

「だ、誰!？」

カコはまばゆい光に包まれ現れたそれに向かって問いかける。光が収まるとそこには一羽の鶴のような鳥が居た。

全身は金色で輝きに満ち溢れ、緑色の尾羽が三本伸び、黒い頭には炎のような冠羽が生え、その目には理性が灯っていた。

《研究は順調ですか?》

「喋っ……いえ、テレパシー?……」

急に脳内に語り掛ける鳥にカコは混乱する。混乱する彼女ではあったが、その正体に一つ心当たりがあった。

「もしかして……『火の鳥』?」

鳳凰とも、フェニックスとも呼ばれ、その血を飲めば不老不死になると言われる伝説上の存在、そういった動物はアニマルガールとしてパークにいるが、元の姿で出てきたのは初めてのことであり、驚きを隠せずにカコはその名を呟いた。

火の鳥はそれに答えず、話を続ける。

《あなたは動物についてとても熱心に研究

されていますね、それも既に居なくなってしまうものばかり……》

火の鳥は慈悲深いとも哀れんでいるともとれるような眼差しでカコを見る。

《あなたは居なくなってしまったモノを取り戻そうとしていますね》

カコはその言葉に目を見開く、この方力なら既に失われた人も戻ってくるのではないかと期待の表れだった。

《残念ながら私でも死者を蘇らせることはできません》

「……」

カコの考えを読んだのか定かではないが、その言葉に期待が崩れたカコは何も返さず俯く。そんな彼女に火の鳥は《ですが》と続けた。

《絶滅してしまった、もしくは絶滅させてしまった動物を蘇らせたいのなら、私にその手伝いができます》

顔を上げたカコにそう言った瞬間、火の鳥の体が強く輝いた。

「きゃっ!」

あまりの光の強さにカコは悲鳴を上げて腕で顔を防いだ。光は数秒で収まったが、な

お顔を隠し続ける彼女の耳に火の鳥の声が届く。

「あなた方が『サンドスター』と呼んでいる物質のおかげで今の私のようにヒトの体を手に入れた動物たちが居ます。あなたとその『フレンズ』たちの協力があれば簡単です」  
恐る恐る顔を出したカコの前には一人のアニマルガール、金色に輝く服を着、黒髪の頭からは先ほどの鳥と同じ金色の羽と腰からは三本の尾羽が生えていた。

「私と……絶滅種の子たちが……どうやってですか？」

急に現れたアニマルガールに面食らいながらもカコは火の鳥に問う。

「あなたと彼女たちが母となり父となるのです」

火の鳥はカコに近づいて顔を寄せ、鼻先に指を突き付けてそう言った。

「私とアニマルガール達が母となり……父となる？」

急に突き付けられた火の鳥の指に少しのけ反りながらカコはそう返す。カコがあまり理解してないと悟った火の鳥は少し考えると踵を返し部屋の中を歩きながら話し始める。

「まあ急にそんなことを言われても分かるわけありませんね、まずあなたを母にすると

ころから始めましょうか、とりあえずやりま

すか？」  
火の鳥はカコの方に振り向くとそう聞いた。

「……あの子どもたちの仲間が増えるのであれば」

カコは少し考えた後に答える。その目は絶滅種を甦らせるためであれば何でもするという意思が見えた。

「分かりました。では……」

火の鳥はカコの答えを聞くとそう言うときスカートを捲る。

「えっ……」

カコはその光景に息をのんだ、アニマルガールであるはずの彼女には本来無いものがそこにあつたからである。

「これを受け入れていただきますよう」

そう言う火の鳥の股間には金色の陰毛に半勃ちの男性器、それも普通の男性の基準で言えば巨根と言える立派なモノがあつた。

男性経験のないカコにとって初めて見る人間の男性器であり、カコの視線はその立派なモノに釘付けになった。

「まあいきなり入れるのも苦痛でしょうし、どうせするなら気持ちよくなってほしいので、濡らしてもらいましょうか」

火の鳥は呆気にとられているカコを楽し

気に見ると、そう言いながら近づいて肩を掴み、下に押し下げて座らせる。

「……」

カコはさらに大きくなる眼前の巨根に息をのむばかりである。

「……いつまで見ているつもりですか？」

火の鳥はカコにそう呼びかけ、頭を掴む。「む、無理……こんな口に入らない……」

「ではそのまま入れますか？」

火の鳥にそう言われたカコは、少し迷った後、その口を開けてその巨根を咥えこんだ。(……苦しい、口でも苦しいのにこんなのが入るわけない……)

舌で火の鳥の巨根を舐めまわしつつ頭を前後に振るカコはそう思っていたが、その体は意に反して火照り、下の口から愛液が垂れ、火の鳥を受け入れる準備を始めていた。

「そろそろ出ますよ……っ！」

火の鳥がそう言うときカコの口の中に火の鳥のように熱く、雪のように白い精液が出された。

「……!?!んーっ!!んーっ!!」

火のように熱いものを流し込まれたカコは咥えたまま叫び、口を離そうとするが、火の鳥に頭を押さええられて身動きを取ることができなかった。

「さて、そろそろ頃合いですね」

火の鳥は最後まで出し切るとそう言って

カコの口からその巨根を抜く、カコの唾液で光る巨根の先とカコの口の間に透明な橋が架かっていた。

（体が……熱い……）

「体が熱いでしょう？血と違って不老不死とまではいきませんがこれで多少無茶しても死ぬことはありません」

火の鳥は荒く息をつくカコにそう言う。カコも何か言おうと思ったが火の鳥の言葉を理解するのが精いっぱいであった。

（無茶しても死ぬことはないって……どういうことなの……）

火の鳥の言葉を理解しようとするカコであったが、火の鳥はもう次の段階に移っており、カコの服を脱がせ、その豊満ともだらしなとも言える肢体を曝け出させ、その巨根をカコの割れ目に当てがった。

「では、本番と行きましょうか」

「え……ちよつと……」

その言葉にカコはそう言って抵抗しようとするが、倦怠感からまともに動くことすらできず、カコは火の鳥に貫かれた。

「」

あまりの激痛に叫ぶことすらできないカコの割れ目から純潔の証が流れ、火の鳥の玉を伝って床に垂れた。

「私のモノで痛がっていたらこの後大変で

すよっ♡」

火の鳥はカコにそう言いながら注挿を続ける。痛みながらも血と愛液で濡れたカコの割れ目は火の鳥の巨根を受け入れつつあった。

「びっ!!びぎっ!!んっ♡んあっ♡」

カコが嬌声を上げ始めると火の鳥は更に激しく腰を振る。

「大方受け入れられるようになってきましたねっ♡そろそろ出しますよっ♡」

「やめっ♡中はっ♡やめてえっ♡」

そう言われたカコは首を振りながら抵抗するが、火の鳥は構わず中に精液を出す。

「熱いっ♡熱いっ♡」

火の鳥の熱い精液を膣で受け、逃れようともがくカコであったが、火の鳥に固定され、最後の一滴まで注ぎ込まれてしまった。

（私……この方の子供を孕むのかしら……）

火の鳥の巨根が抜かれてもなお熱いものが蠢く自らの下腹部を眺めながらカコはそう思った。火の鳥はそんなカコの表情と下腹部を楽しそうに見て口を開く。

「さて、けものたちの母体になる準備は整ったようですよ、そろそろ次の段階に移るころですよ」

火の鳥がそう言い終わるか言い終わらないかというところでカコの身体に異変が起

きる。膣内に残る熱が下腹部……特にクリトリスの辺りに移動するかのよう熱を帯び始め、その体を作り替え始めたのである。

「えっ何っ何がっ!?!」

カコは目前で、自らの身体に起こっていることに驚きを隠せなかった。なぜならば熱を帯びたクリトリスが長く伸び、太くなり始め、その直下の皮の中に新たな器官が二つ作られ重力に従って下に伸び始めたからである。

「こ……これっておち……男の人の……」

カコは自らの身体から生え、ビクッビクッと脈動する肉棒を愕然とした表情で見る。火の鳥のモノに比べれば大したことないが、普通の男性と遜色ないモノである。

「言ったでしょう？『母となり、父となるのです』と」

そんなカコに火の鳥はそう語りかけ、肉棒の下にできた玉をさする。

「んひいっ♡」

「立派なモノができましたね。それでは最後の仕上げと行きましょう」

火の鳥はそう言ってカコの男性器から手を離すと服を脱いだ。

「さあ！私にその種をまきなさい！そしてあなたはけものたちの父となるのです！」

火の鳥はカコに尻を向けて割れ目を開き、そう言って誘う。

(誘いに乗ってはいけない気がするけど♡  
抑えられない♡)

カコは荒く息をついて火の鳥の腰を掴み、  
収まる場所を探して脈動する肉棒を火の鳥  
の割れ目に突き刺した。

「んああああ♡何これ♡熱い♡気  
持ちいい♡」

立木を包み込む溶岩のように熱く、締め付  
けてくる割れ目にカコは堪らずに叫んでし  
まい、盛りのついた犬のように腰を振り続け  
る。

「ん♡いいですよ♡そのまま私の中に  
出さない♡」

火の鳥がそう言ったのも束の間、カコは既  
に果てそうになっていた。

「何かきちゃう♡きちゃっ♡あ♡あ  
あ♡」

カコが叫ぶと先ほどまでクリトリスとし  
て存在していたはずの肉棒から白い精液が  
解き放たれる。

「はあ♡はあ♡」

「どうですか？オスの快樂は？」

火の鳥は息を荒げるカコに問う。

「もっ♡もっ♡お願いします♡」

しかし、カコはその問いに答えず再び腰を  
振り始めながら懇願した。もはやカコの目に  
は普段の理知的な博士の光はなく、快樂をむ

さぼるメスの目が宿っていた。

「いいですよ♡気のすむまで私に種をまき  
なさい♡」

火の鳥はもはや交尾で夢中になっている  
カコにそう言って、その肉棒を受け続けた。

しばらく火の鳥と交尾をしていたカコは  
体力がなくなつたのか崩れるようにその場  
にへたり込んだ。

「体力としても時間としても限界ですかね」  
倒れこんだカコと明るくなり始めた窓の  
外を見た火の鳥はそう言う、その体が眩く  
輝き、元の鳥の姿に戻った。

《これであなたは『フレンズ』とその間にで  
きる子を利用してあらゆる動物を短期間で  
孕むことができるようになりました。これで  
あなたの望む方舟が創れるようになるでし  
よう》

元の姿に戻った火の鳥はそう言うと、未だ  
に割れ目と肉棒から精液を垂れ流し、荒く息  
をつくカコを置いて窓から飛び去った。

それから十日後、二カ月にわたる休暇を取  
得したカコはある洞窟の中に居た。パーク職  
員は誰も知らず、フレンズでも知る者が少な  
いその洞窟に複数の絶滅種のフレンズ達と

共に居た。

「はっ♡はっ♡はっ♡はっ♡」

「ハッ♡ハッ♡ハッ♡ハッ♡」

カコは火の鳥によって生やされた肉棒を  
ニホンオオカミの割れ目に入れていた。ニホ  
ンオオカミに腰を振る度、カコのその豊満な  
胸と大きくなったお腹が大きく揺れ動き、胸  
から噴き出す母乳がニホンオオカミと地面  
を濡らしていく。

その顔には冷静沈着で誰からも尊敬され  
る天才博士の面影はなく、もはやただ快樂を  
貪る一匹の牡であった。

「アオツ♡アオンツ♡」

獣のような姿勢で犯されるニホンオオカ  
ミも鳴き声のような喘ぎ声を上げ、彼女に本  
来無いはずである男根を大きく揺らしなが  
ら精液を地面にまき散らしていく。

「はあ♡もお待てないわあ♡」

そんな様子を見ていたジャイアントモア  
はその大きな胸や尻に負けないほどのポリ  
ユームを持った男根を、ニホンオオカミを犯  
すカコの割れ目に擦り付け、愛液で先を濡ら  
し始めた。

「はっ♡そんな♡大きいもの♡今入れ  
たら♡♡トンじゃう♡」

カコはモアにそう言うが、モアは耳を傾け  
ずに一気に突き入れ犯し始めた。あまりの激

しさにモアとカコの下がる玉同士が前後に動く度にぶつかっていた。

「さすがにそれ以上孕ませるのは無理じゃないか？」

そんなモアを見ていたダイアウルフは苦笑しながらそう言うが、そんなダイアウルフも巨根を滾らせている。

そう、火の鳥はカコだけでなく絶滅種のフレンズ全員にも男性器を生やし、カコを孕ませられるようにしたのである。しかもカコの腹に居るのは一人の子供ではなく複数匹分の仔と卵であった。

「孕まなくてもおっ♡孕むまで犯すわぁ♡」  
ダイアウルフの問いにモアはそう言いながらカコを犯し続ける。

「あっ♡あっ♡激しっ♡もっ♡と優しくっ♡」  
カコはモアの激しすぎるストロークにそんな声を上げて懇願する。

「そんなこと言ってえ♡こっちは『もっ♡と激しくしてほしい』ってキュウキュウ締め付けてくるわよお♡」

そんなカコの懇願に対してモアはそう言うてさらに激しく腰を打ち付け、カコの中を深く抉った。

「あぁーっ♡」

「あぁん♡」

「アオォーン♡」

三人の玉が激しくぶつかり合い、その衝撃でモアはカコの中に、カコはニホンオオカミの中に、そしてニホンオオカミは地面にそれぞれ精液を吐き出した。

「はーっ♡はーっ♡んっ!!♡」

そのままの姿勢でニホンオオカミに乗っかっていたカコは急に後ろに引っ張られ、優しくではあるが地面に倒された。

「なーにばてているのよお♡まだ私を孕ませてないじゃないのよお♡」

カコを押し倒した張本人であるモアはカコを跨いでそう言うのと未だ硬いまま天井を向いている肉棒に自らの割れ目を合わせ、いわゆる騎乗位でカコを蹂躪し始めた。

その後カコは三人に犯し犯され続けているが、遂に体力がなくなってしまったのかそのまま気絶してしまった。

「あらあ、大丈夫かしらあ」

そんな様子を見たモアは顎に手を当ててそう言う。

「ホウ様はいくら無茶しても死ぬことはないから安心してって言ってたよ？」

モアの心配にニホンオオカミはそう答える。

「そう、なら安心ねえ……それにしてもいつ産まれるのかしらあ？」

モアはまた新たな疑問を口にする。

「うーむ、分からないがこれだけ腹が膨らんでいるんだ！もうすぐだろう！」

ダイアウルフはモアの問いに威勢よく答える。

「じゃあ産まれたらまたみんなで孕ませよう！楽しみにしてね♡カコ博士♡」

ニホンオオカミは目を覚まさず、息も絶え絶えなカコにそう言い、他の二人もそれにニヤリと笑った。

その後、ジャパリパークで絶滅したはずの動物が多数発見されたと報道されることとなったが、それについてのインタビュに答えるカコは平静を装いつつもカメラに見えないようにその腹をさすっていた。

終



## 人造フレンズは生殖の夢を見るか？

がま口

ジャパリパーク動物研究所では様々な

試験や検査を行うが、その内容によっては

パークのフレンズを実験台に使うと倫理

上よろしくないので、作れる試験体は研究

所内で作っている。

例えば、単純な生体反応を見るだけの用

途なら、細胞単体や皮膚片だけを培養する。

唾液、血液、脳しようなどの体液類は、タ

ンクに貯蔵するほどストックがある。用途

に応じて腕、足、血管、内臓、眼球、耳な

どを作り出すことも可能だ。

そして、必要とあらば、フレンズを丸ご

と一体作ることだってできる。

可愛いフレンズの体力測定をした

り、天井から吊るしたバナナを棒で取れる

かカメラ撮影したりしている隣の部屋で、

ありとあらゆるフレンズのパーツが、培養

液で満たされた水槽に浮かぶ浮かんで

いる。それが、カコ博士が副所長を務める、

ジャパリパーク動物研究所生体研究科で

ある。

「――性別、男。フレンズベース、イエ

ヌ。身長体重は……」

カコ博士はストレッチャーの上に横た

わる、とあるフレンズの身体情報をタグに

書き記し、手首にゴムで巻きつけた。温度

湿度の管理されている研究室の電灯に照

らされた裸体はほの白く、ピクリとも動か

ない。タグに記された身長体重は、人間で

言う高校生の平均値とほぼ同じ。体つきは

中肉で肩幅もしっかりしており、病院のよ

うなストレッチャーに寝かせられていな

ければ健康そのものに見える。だが、彼の

短髪に整えられた黒髪の下の瞼は閉じら

れたまま。意識もなく、そして名前も無い。

強いて言えば、タグに書かれた数ケタの管

理番号が名前に当たるか。

「カコさん、この子が例の献体ですか？」

ふと、カコは背後から声をかけられた。

カコが振り向くと、この研究所の一員であ

る丸眼鏡の女性研究員が立っていた。いつ

も眠たげな垂れ目をしよぼしよぼとして

いるが、研究者としては有能で、カコの助

手を務めている。カコは、特に感情を入れ

ずにこう答える。

「ええ、そうよ」

「ふーん。しよゆ顔で、なかなかのイケ

メンですね」

これまた抑揚の薄い研究員の言葉は、イ

マイチ冗談か本気か分からない。でも確か

に、目鼻立ちはテレビなどで活躍する男性

アイドルのように端正で、頭上に生えた黒

色の三角耳も愛らしさを演出している。し

かし、カコはこう釘を刺す。

「試験体に、あんまり感情移入しない方が

いいわよ」

「分かっていますよ。この先この子がどう

なるか、想像したくないですしね」

そう研究員は眼鏡を指でくいと直し

ながら呟く。この子と呼ばれた試験体の行先は、パーク内にある巨大なフレンズ専門総合病院。目的は外科研修医の講義用教材、いわゆる献体だ。メスを振るう外科医の卵の練習台としてどう扱われるか考えることは、あまり気分のいいことではない。

「それにしても、男性ってだけでも珍しいのに、生かしたまま引き渡しとは注文が多いですよ」

そう独り言のようにつらつらと述べる研究員。フレンズは通常女性の形態を取る事が多く、男性のフレンズは稀。故に、男性を狙って生み出すのは至難の業だ。それに、この献体は先方からの要望で、引き渡し時には呼吸や循環器系の活動を維持したままではなければいけない。つまり、助手として色々手間がかかる作業をさせられて面倒だった、と遠まわしに愚痴った研究員に、カコはジトつとした視線を向ける。

「研究機関でこんなこと言うのもアレだけど、需要と供給、持ちつ持たれつよ。これだけ病院からも貴重な病理検査結果や、フ

レンズの治癒経過観察データを回してもらえるんだから。

それで、貴女私に何か用があるんじゃないの？」

生臭い話を切り上げたいカコの問いに、研究員は「おお」と手を打ちそうな勢いで本来の用向きを思い出すと、静かに伝える。

「その病院なんですけど、引き取りが三時間ばかり遅れますって先程連絡が」

「ええ……」

今まさに引き渡し準備が済んだばかりの試験体の横で、カコは先に言えと言わんばかりに顔をしかめる。

「まあ、今日一日この部屋の使用は申請していますから、気長に待ちましょうよ」

「もう……」

そう能天気告げる研究員にカコは呆れるが、そんなことお構いなしに、研究員はさっさと立ち去ってしまった。

カコはため息を吐くと、もう一度この子と呼ばれた彼を見やる。病院から前述の条

件以外は適当でいいとの依頼だったため、ありふれたイエイヌの再生細胞にサンドスターを接触させ、この世に生み出された人造フレンズ。体は大きい、脳は生まれたての真っ白なままで、自発呼吸や鼓動など最低限の生命維持機能しか持ち合わせていない。彼は確かに生きてはいるが、そのまま目を開ける事も無く、結局は散々体をいじくられて死んでしまっただろう。

今まで何度も行ってきた仕事ではあるが、心がチクリともしない訳ではない。カコは、せめて最後に体を綺麗にしてやろうと、そばにあった脱脂綿に薬用アルコールを含ませた。カコは病人の介護をするように顔、首筋、肩口、腕と丁寧に拭き清めていく。そして程よく筋肉の付いた胸を拭いている時、異変に気が付いた。

彼の股間には局所を隠すだけの布を被せていたが、その中心に棒状の物が反り立ち、布をテントのように押し上げていた。

カコは（まさか……）と思いつつ、被せた布を取り去る。

そこには、カコの予想通り、カチカチに怒張した彼のシンボルであるペニスこそり立っていた。

カコは乙女の恥じらいを感じるでもなく、まじまじとペニスを眺める。悲しいかな、カコは男性器の勃起なんぞ試験や資料論文で散々見てきているため、ただの生理現象にしか見えない。ただ、カコに別の動揺が走る。

「……どうしよう」

おそらく上半身を刺激したことにより、無意識とはいえ反射的に男性器が勃起してしまったのだろう。だが、このままにしておくと、病院関係者が引き取りに来たとき確実にバレる。恥ずかしくて気まずいのもそうだが、下肢にはかり極端に血液が溜まっているような不良品だと思われるのが問題だ。

仕方なく、カコはこの現象を『処理』することにした。

まずこの部屋の扉をしっかりと施錠し、手元の端末で監視カメラをオフラインにす

る。これで、防音対策もされている室内の状況が外に漏れ聞こえる事は無い。カコは薄いゴム製の手袋を両手に嵌めると、棚からワセリンを取り出した。

男性器の勃起を鎮めるためには、ペニスを刺激して射精を促してやるという事は、カコの知識にあった。彼には睾丸もキチンと付いているため、射精も可能であると思うが、カコは不安げだ。

(ちゃんとできるかしら……)

カコには知識は豊富にあるが、男性経験が無かった。男性とのキスだって思い出せない程遠い過去の出来事なのに、男性器を手で射精させる経験なんてある訳がない。自分の未熟なプライベートに若干の悲哀と反省を感じつつ、カコは実践あるのみと腹を括って、ワセリンを適当に取り、両手で伸ばす。そして一呼吸して、彼の男性器に両手で触れた。

カコはまず、その意外な熱さに驚いた。思わず手を離すが、血液が集中しているのだから局所的な体温が上昇して当たり前、

と理論的に納得し、再びネチネチとワセリンを勃起したままのペニスに塗りたくる。ある程度滑りが良くなったところで、カコはペニスを軽く握り込むと、ドレッシングを振るよう上下にしごき始めた。

静かな室内であるため、カコの耳にはにちゃにちゃと粘着質な音が聞こえてくる。変わらずペニスはビンビンに固く、ゾウの鼻のようにしなやかな筋肉質の感触だ。カコは一心不乱に上下運動を続けるが、射精は起こらない。そもそも彼は意識も無く、当然言葉も話せないため、アダルトビデオのように「気持ちいい」とも「イキそう」とも意思表示をしないため、カコには射精の前兆すら分からない。しかも引き取りの時間が迫ってくるため、カコに焦燥感が芽生える。ここでカコは、研究者らしく手の中で揺れるペニスを観察し、上下運動に合わせて亀頭を覆ったり露出させたりする包皮を見やった。そういえば、包皮を剥いて亀頭を直接刺激してやると快感を得る男性もいると聞いたことがある。それに単

調な動きよりは変化を付けた方が良かったらうと、カコは手探りで包皮をずり下げる。幸い彼は仮性包茎で、亀頭を露出させることができた。初めて外気に触れた亀頭は綺麗な濃い桃色で、ワセリンを塗ると室内の明りを反射しててらと輝いていた。

カコは左手でペニスを支え、右手で亀頭の頭を撫でるようにしゅっしゅと刺激する。何回かそれを繰り返すと、先端の尿道からワセリンではない透明な液体がジワリと溢れてきた。それはカウパー腺液であり、彼が性的興奮を示していることが分かったため、カコに対策が功を奏した安堵と高揚感が生まれる。それと同時に、カコのお腹の奥底にジワジワと温かい熱が帯び始めていた。

そのままペニスと亀頭を攻めていると、睪丸がぎゅつとせり上がり、ペニスの根元に睪丸程のコブがムクムクと膨らみ始めた。彼はイエイヌのフレンズであり、亀頭球がこのような形で発現したのだろう。つまり、彼は射精寸前の状態となった。カコ

はそれを確認すると、ラストスパートをかける。上下運動をもっと素早く行い、もう一方の手では睪丸をさわさわと撫でて優しく刺激する。彼は眉ひとつ動かさない状態ではあったが、ペニスはビクツ、ビクツと痙攣する。その様子に、カコの息もハッハッと若干上がった。

そして何の前触れもなく、彼はカコの手の中で絶頂に達した。ビクツと一際大きくペニスが痙攣した途端、尿道から濁った白い精液がびゅうっ！と放出された。カコはその唐突さと勢いに驚きつつ、上下運動をゆっくりと続ける。大きな射精の後、カコの手の動きに合わせてびゅっ、びゅっ何度かに分けて小さな射精が起こる。その様子は牛の乳搾りのようであり、カコは全て搾り尽くそうと根元から丁寧にしごき上げる。

やがてピクピクとペニスが小さく震え、射精が終わった。イエイヌの射精は三十分以上続くこともあるが、カコはその特性を彼が受け継いでいなかったことにホッと

する。同時にペニスの張りが急速に衰え、彼の性的興奮も治まったことを知った。時間を見ると、引き取り予定時刻まで充分余裕がある。

カコはふうつと一息ついて、後始末にかかる。まず彼の精液にまみれた手袋を裏返すように外し、ゴミ箱に捨てる。一応新しい手袋を着用してから、汚れを拭う厚手の紙で彼のペニスと下腹部の精液を拭い去る。この刺激でまた勃起したらどうしようかと緊張したが、そんなことはなかった。ろ紙と新しい手袋をゴミ箱に捨て去り、カコはストレッチャーのそばの丸椅子に腰掛けた。慣れない作業に疲れたのもそうだが、仮にも男性の性処理を行ったという興奮に体温が上がっており、カコは少し休みたかった。

丸椅子に腰掛けると、ちょうど彼のペニスが目線に入る。まだ目隠しの布を被せていない彼のペニスは、先ほどまでの怒張が嘘のようにふにやりと硬度を失い、包皮も亀頭に半分被さった状態で、だらりと彼の

下腹部に倒れていた。

そんな彼の萎えたペニスを眺めていると、ふとカコの呼吸が荒くなっていった。何かのスイッチが入ったように、カコの心臓は早鐘を打ち、きゅんきゅんと子宮が熱く疼いた。

もう我慢できない。カコは羽織っていた白衣を脱いで適当に引っ掛けると、スラックスも脱ぎ去った。この時、シンプルなデザインの白いパンティのクロッチが、かすかに湿っていた。カコはもう一度丸椅子に腰掛けると、パンティの上から彼女の細く白い指を、自分の秘所にあてがった。

「んっ……」

途端、カコの唇から切ない嬌声が漏れ聞こえる。一度擦っただけで、カコはピリピリと電気が走ったような快感を覚えた。カコはもう止められなかった。指をピースの形に開いて、パンティにこんもりと盛り上がった土手の外側を、カリカリと掻き上げる。

「んっ！ んうっ！ あっ……」

密やかな衣擦れの音と、カコの嬌声が二重奏となる。カコは、完全にオナニーを始めてしまった。男性器を見て不安がるようなカコとて、オナニーの経験はある。しかし、頻度は低いと自覚しているし、ましてやこんな職場である研究所の一室で盛り

つくなど、普段の感性では全くあり得ない事だった。

でも、今は自分の女性器を慰める指が止まらず、パンティの湿ったシミがどんどん大きくなっていく。とうとうカコは、汗ばんだお尻を少し上げて、理性の最後の砦であるパンティを脱いだ。この時、透明な粘液の糸がつうつとパンティから伸びてちぎれた。カコはハアハアと荒い息のまま、手入れされていない陰毛がもさもさと生い茂る女性器の入り口部分に指を差し入れた。

「ひうっ♥ あっあっ、あっ！」

今日一番の大きな声を上げて、カコはグンと顎をのけぞらす。女性器をいじっていない手で、服の上からでも分かるビンビン

に勃った豊満な乳房の乳首をクリクリと転がす。その痴態は、いつもの理知的な彼女からは想像もつかない艶めかしさだ。

「あっ！ ああっ♥！ んあっ♥！」

もうすでに軽い絶頂に達しているカコであったが、少しばかり残っていた理性で、チラリと視線を下に向ける。そこには、先ほど後始末で使用したゴミ箱があった。

カコは突然丸椅子から転げ落ちるようにゴミ箱に縋りつくくと、中から裏返しになった手袋をつまみ上げる。内側には、彼の精液がべっとり付着している。カコはその手袋を逆さに振り、何の躊躇もなく彼の精液を手にとった。

カコは、プルプルとゼリーのように濃く、ムツと独特なオスの臭いが漂うそれを陶然と眺める。そして、精液でべとべとに汚れたままの手で、自らの秘所を指で突き刺した。

「——ツツ！ ああああっ♥！！」

カコは絶叫した。それほどの強烈な快感だった。

彼は無菌室で生まれたため、病原菌などに侵されている危険はほとんどない。しかも、こんな方法で精液がカコの卵子と受精する可能性はゼロに等しい。だが、感染症にかかったり妊娠したりする可能性が無い訳ではない。そんな事は、生物学者でもあるカコは充分に理解している。

そう、この快楽は背徳感が主だった。さつきまで助手と話していた研究室で男のペニスをしごき、精液を発射させ、今度はそれを手に塗りたくってオナニーする。業務倫理も社会常識さえも吹き飛ばすほどの背徳感。品行方正なカコを乱れさせるには過分な刺激だった。

「おっ♥！ おっ♥！ おおっ♥！ ああああっ♥！」

カコはフレンズでも発しないような野太い声を上げ、床の上に仰向けになつてのたうつ。顔は完全に蕩け切り、口から涎を垂らしながらも、知り尽くした自らの性感帯を擦り上げる手を止めず、むしろ加速させる。その姿は、交尾をせがむメス犬以上

の発情ぶりであった。

とうとうカコは、さらなる高みを目指し、ゴミ箱から精液のタップリ染みたる紙も取り出す。そのろ紙を鼻先に近づけると、彼のオス臭がカコの脳みそをフェロモンで掻き回した。

「おっ♥！ ぶふう♥！ おおっ♥！」

フガフガと鼻を鳴らして精液の臭いを吸い込む姿は変態そのものであったが、そんなこと今のカコには関係ない。精を放ち終えたオスの横で、メスが遅れて発情しているだけだ。

そしてついに、カコは今まで到達したことの無い快楽の園に舞い上がった。

「おおっ♥！ あっはあああっ♥！」

ピーンと腰がのけぞり、体中の筋肉が硬直した。尿道からは潮がスプリングラーのように吹き出て、床をびしょびしょに濡らした。気絶寸前のカコの精神は遥かなる上空へ飛び出した後、穏やかな花畑にいるような心地良い浮遊感にたゆたう。だがそれも一瞬のことで、今度はまるでジェットコ

ースターのような墜落感を味わう。それと同時に、自らの潮でしとどに濡れたカコのお尻が、どちゅんと床に落下した。

ひゅー、ひゅーと絶え絶えの呼吸ではあったが、カコの顔はだらしなく弛緩し、全身の細胞でオーガズムを感じているような、多幸福感に満ち溢れた表情だった。

病院関係者は、きっちり宣言通り遅れた時刻にやって来た。

ぺこぺこと謝りながら受渡書にサインする病院職員に対して、カコは薄く微笑んで書類を受け取った。

カコは服を着替え、髪を整え、化粧を直して消臭剤を浴びていたため、先ほどまでの濃厚な情事は微塵も感じさせなかった。研究室も床を掃除し、強力な換気空調システムをフル稼働させたため、ストレッチャー上の彼の息と腕のタグを確かめてから袋を被せる作業をしている病院職員にも、何も気づかれなかった。

病院職員は足元から頭頂部まである黒

い袋の縦一文字に走るジツパーをきっちり締めると、もう一礼してストレッチャーを押して退室した。彼はそのまま外に停めである病院用のスタッフカーにストレッチャーごと載せられ、病院に収容されるのだらう。その先は、カコの与り知らぬ世界だ。

扉が閉まり、一人きりになった部屋で、カコはそっとお腹を撫でる。

先ほどの自慰の最中、カコが覚えているのは猛烈な背徳感と、少しの母性。

死にゆくためだけに生まれた彼が、無意識のうちに最後に見せた生殖本能というオスの意地と、懸命に残した命の輝き。産みの母ともいえるカコはそれを感じ取り、守り育まなければ、と本能的に行動していた。

試験体に感情を入れるな、と注意したのはどこの誰なんだとカコは自嘲気味に笑うが、それでもこの想いは忘れることができないだらう。

ジャパリパーク動物研究所。フレンズの

楽園のその裏側で、全ての人造フレンズ達の母親は、今はただ慈母のように微笑んでいるのだった。

【終】

# 夢の中のお母さん

森の白熊

一

「カコさん、頼まれていた遺伝子コードA  
X-2753番の解析データ、なんとかで  
きました」

「ご苦労様。もう午後七時を回るから、あ  
なたは今日はこれでおしまいにしちゃっ  
てね」

「えっ、そんな、カコさん一人きりにこん  
な膨大なデータ処理を任せるなんて恐れ  
多すぎますよ！」

「気にしないの。それよりも、家で奥さん  
ともうすぐ幼稚園に入園する息子さんが  
いるんでしょう？ 研究に没頭していな  
いで、そっちのほうを優先しなさい」

「で、では私はこれで失礼します……」

私、カコはこのジャパリパーク内の研究  
施設でもう五年以上サンドスターやフレ  
ンズさん達に関する研究を行っている。一、  
二年ほど前には妹のミライもこのジャパ  
リパークにガイドとして就職したので、本

当に誇らしい。

最近の私の研究は「けものプラズム」の  
多いフレンズさんに関する研究だ。数年程  
前より「アニマルガール」と呼ばれている  
子たちのケモミミやしっぽといった部分  
は「けものプラズム」というもので構成さ  
れているらしいということが知られてい  
る。もちろんこのような部分はくすぐた  
り、ぺちぺちつとやったりするとこの子た  
ちにはくすぐりたい、といった感触や痛い、  
といった感覚が伝わるが、「私は人間だ」  
と本気で強く意識することによって、私に  
とってはあまりあってほしくないことだ  
けど完全にその部分を消し去ることがで  
きる。つまりは元の動物の体の機能はすべ  
てフレンズさんたちの共通している人間  
の部分に集約されることによってプラズ  
ムが発生する余地を発生させている。その  
ため、遺伝子採取をすろとしっかりと元の  
動物となった遺伝子が検出されるように

なっている。

しかし、どういうわけかこのパークの中  
にはオイナリサマさんや四神の方々とい  
った空想上の概念のもの、リョコウバトさ  
んやサーベルタイガーさんなどの絶滅動  
物のフレンズさんも存在している。そうい  
った子たちは元となる体がない状態から  
フレンズ化しているということになる。こ  
の場合には体もすべてがプラズムによつて  
構成されているわけになるが、果たしてこ  
の状態がプラズム部分を消すように本人  
が思ったらどのような状態になるのだろ  
うか。そしてそうしたフレンズさんたちは  
いったいどこから遺伝子情報を得ている  
のだろうか。これを解き明かすために最近  
は研究所に夜遅くまで缶詰めになってい  
ることが多い。

しかし最近になってから困ったことが  
発生してきている。どうも遺伝子データに  
傷がついて読み取れなかったということ



が多い。たとえ絶滅種でも、空想上のフレ  
ンズさんであつても髪の毛や頬の内側の  
細胞を読み取れば遺伝子情報が出てくる  
ものの、ここ一週間はなぜか読み取れない、  
もしくは読み取れたとしても相当な部分  
が欠落して出てくるということが相次い  
でいる。それまでは何の問題もなかったの  
に、いったいなぜこのようなことが突然出  
てきてしまったのか頭を抱える日々が続  
いていた。

一つため息をついて、先ほど部下の研究  
員が持ってきてくれたニホンオオカミさ  
んの遺伝子解析ファイルを読んでみる。予  
想通り今回も原因不明な何かによって、六  
割から七割くらいが解析失敗というデー  
タになっていた。本当なら今取り組んでい  
る部分の研究は数日前にとっくに終わっ  
ていてもおかしくないはずなのに、こうも  
また失敗となるとさすがにやる気をなく  
してしまう。

今日のところはもうこれで切り上げて、  
また明日もう一回遺伝子情報解析を試そ

うかな……。家に帰ればミライもいること  
だし、私が研究している間にパークで元氣  
に遊びまわっているフレズさんのこと  
を聞けば自然に元氣が出てきそう。

いつものように使っているパソコンの  
電源を落として、室内の電気も消す。うっ  
かりして実験用の機器の電源を落として  
しまいそうになるのはいつもの癖だ。そし  
て私の個人ロッカーへとリュックサック  
を取りに行き、そのまま帰宅しようと思っ  
た。

しかしふと思った。いったい何がサンプ  
ルとなっているフレズさんの身に起こ  
っているのだろうか。研究所でサンプルの  
データを取らせてもらう子は、パークから  
一時的に離れてフレズさん専用の実験  
寮に入ってもらうことになっている。そこ  
で同じフレズさん同士で喧嘩でも起こ  
っていないのだろうか。そうでないのなら、  
いったい何がこの子たちを傷つけている  
のか、研究者として確かめないと道は  
なかった。

背負いかけていた大きなリュックサッ  
クを再びロッカーへと戻し、またいつもの  
白衣を羽織ると実験寮へと歩みを進める。  
しばらく廊下を歩くとフレズさんたち  
が立ち入っている区域を示すために床の  
色が変わっている。そこから先が実験に参  
加する子が寝泊まりしているエリアにな  
る。いったいどんな生活をフレズさんが  
しているのだろうか。少し息を整えて私は  
その区域へと足を踏み入れた。

## 二

立ち入ってみるとフレズさんにとっ  
てみればあまりにも無機質な風景が広が  
っていた。見た瞬間、言葉を失ってしまっ  
た。というのも、私みたいな研究者が検体  
をフレズさんからとるときは職員が研  
究施設のほうに連れてくる。そのため普段  
からフレズさんが生活する区域には専  
門の職員しか基本立ち入ることはないた  
めに研究者はこつちに行くことはない。し  
かしそれをもってしてもこのような環境

で研究を行う数週間の間、ずっと閉じこもって生活をするという聞きとすごく申し訳ない気分ではなかった。

クリーム色の床に、両側に続く真っ白な壁。向かい合わせの部屋のフレンズさんがうっかり目を合わせてしまうことがないように窓は実験に参加する子たちがのぞいても廊下越しの壁しか見えないような状態になっている。さすがに部屋の中はそれぞれのフレンズさんの特性に合わせるように草原や砂漠といった様々な気候が再現されたものとなっているが、こんなところですつと過ごせと言われたら気が狂ってもおかしくなさそう。

今はフレンズの検体が必要となる研究は私のやっている研究くらいしかないからか、ほとんどの部屋は空室状態だった。しかしその前はかなりのフレンズさんたちがここに寝泊まりしている状態だったことは私も知っている。

そう思いを寄せながらすたすたと歩いていくと、唯一ネームプレートが下げられ

ているドアが並ぶ区域に到達した。おそらく私がサンプルとして協力してもらっている子たちが生活している場所。ネームプレートを三・四枚見てみると、ニホンオオカミさんの部屋を見つけた。

本人には少しだけ申し訳ないと思いつつ窓をのぞかせてもらおう。元の生態のように、スキが多いところの岩穴の中ですやすやと眠っているのかなと私は思っていた。しかし、実際はすやすやなんて眠っていなかった。

岩穴の外で毛布をぎゅっと抱きしめながら泣いているようだった。表情も悲哀に満ちたものとなり、私がミライから聞かされてるあの元気で活発な姿とは程遠いものだった。

「おかあさん……、みんな……、どこお……、どこにいるのお……」

いつものニホンオオカミさんの元気いっぱいなあの性格とその姿に似合わないくらいか弱くて、小さく、そして寂しさに満ち溢れたその悲痛な声が時折壁越しに

聞こえてくる。今日部下に解析してもらったあのファイルももといえは今朝、この子から採取したものだ。あの時は「カコさんのためなら、私頑張るね」と笑顔で私に話しかけてくれたのに。こんなことになっているなんて……。

気が付いた時にはこの子の今いる部屋の入口の扉をノックしていた。この子の今までに見たことがないくらい悲しそうな顔を見ていたら、動かずにはいられなかった。「はい……」とさっきのような細かい声が出た。

「私よ、カコよ」  
「え、カコさん!？」

私だと気付いた瞬間にさっきのか細い声が嘘みたいに変わって素っ頓狂な声になった。

「入っても、いいかな」  
「う、うん、いいよ！」

私がこの子に話しかけたとたん、一気に部屋の電気がついた。開ける前からどたばたと音がしているのが聞こえてくる。

私が扉を開けると、さっきまで窓から見ていた様子とは打って変わって、いつもの笑顔になっているニホンオオカミさんのその姿がそこにあった。ちょこんと椅子に座って、私を待っている姿が本当にけなげでまたかわいらしく思える。しかし、それが私のために無理して作っていると思うと心が痛くなってくる。

「カコさん、こっちに來るなんて珍しいですね」

「ええ、たまにはこっちに行ってみたらどうかなと思っけてきてみちゃったの」

「私はいつもと変わりませんよー」

ああ、空元氣を私に健氣に振りまくその姿を見れば見るほど心の痛みがますますひどくなってくる。そんな作り物の笑顔でもてなさないでよ、お願い、その笑顔で自分自身を傷つけないで……。

「ニホンオオカミさん……、無理をしないでね」

「えっ？ そんな無理なんて、私……」

「私がこっちに來たのは本当にただの氣

まぐれだけど、さっきニホンオオカミさんのこの部屋の前を通りがかったのね。その時に何だか寂しそうな聲が聞こえて。本当に心が痛くなってしまったの」

「ええと、それはね、カコさん……」

「今まで私は研究に没頭してきたけど、それでも私が一番大事にしているのはあなたも含めたフレンズさんのことなの」

「……」

「だからお願い、苦しいことがあったら、何でも言っけて。全部私が解決するから……」

そう私が一生懸命にニホンオオカミさんに訴えると、ぎゅっと私に抱き着いてきた。

「カコさん……、カコさん!! うわあああああああああああ!!」

まるで目の奥にずっとずっとため込んできた涙が堰を切っけて流れ出したように、一時間の間、ずっと、ずっと私に抱き着いてニホンオオカミさんは泣いていた。

ニホンオオカミさん曰く、本当に寂しい生活をずっとずっと送っけてきたというこ

とだった。彼女は昔本当の動物だったころはお母さんや仲間の群れと一緒に暮らしをいたそう。狩りの仕方や暮らしの知恵などをみんなから教えてもらっけて、それはそれはとても楽しい日々を過ごしていたという。しかし、ある日ちょっとした不注意でがけから落ちてしまい、氣を失っけてしまったという。そして次に目が覺めた時にはもうジャパリパークのススキがいっぱい生い茂っけている場所に寝転がっている状態だったそう。

それからというものの、ジャパリパークの中でずっとお母さんや仲間の群れのみんなのことを探しているものの、一向に見つからず、友人となったサーバルさんやカラカルさんといった面々に聞いても全く見えないという。

いよいよもって心が折れかけていた時にこの実験が行われることになっけてこの寮に移り住んだことから、一人きりの状態がずっと長く続くことになっけて。そのため今まで我慢に我慢を續けてきたお母さ

んや仲間への懐古心がホームシックとな  
って出てきてしまったという。

「だからね、だからね、私、お母さんが欲  
しいの。群れの仲間が欲しいの……」

これは困ったことになってしまった。も  
う現代のこの世界ではニホンオオカミさ  
んの仲間は絶滅してしまっている。同じ動  
物の種類のフレンズさんが複数人発生す  
るということは聞いたことがあるため、こ  
の子の「群れの仲間が欲しい」という願い  
を聞き入れるには何匹もの仲間となる動  
物をこの島に連れてくるしかないのだけ  
れど、それは到底かないそうにない。お母  
さんが欲しいという願いも、果たしてこ  
子のお母さんとなった個体がどこで生ま  
れたのかということもわからない……。

それを考えると、完全にこの願いをかな  
えるのは不可能だった。でも不可能と言っ  
てしまったら、今度こそニホンオオカミさ  
んの心は破綻してしまう……。そうすると、  
私にできることはこれしかなかった。

「……すぐには群れのみんなや、お母さん

を見つめることはできないかもしれない  
けど、それまでの間私がお母さんになって  
あげることはできるよ」

「えっ？」

三

私のことながら本当に珍妙な案だと思  
う。どんなに頑張っても、私はこの子のお  
母さんになんかなれっこない。でも見つけ  
ることができない以上、こうしてせめても  
の安らぎをこの子に与えたいというその  
気持ちだけは本当だった。

「目を閉じて、お母さんのことを思い出し  
て」

「……うん」

そう目を閉じている間に白衣とTシャ  
ツ、そしてブラジャーを外してなるべく素  
肌に触れ合えるようにする。

「さあ、目を閉じたまま、おいで」

そういうと、ニホンオオカミさんはぎゅ  
っと上半身裸の私を抱きしめた。

「この温かみ……、お母さんだ！ お母さ

ん！」

「今まで寂しかったね。ごめんね」

「……うん、お母さんと一緒に今いるだ  
けでそんなこと気にならなくなったよ！」

ずっとお母さん、お母さんと言いながら  
私の胸にこの子は顔をうずめてくる。そし  
て乳首を見つけると、すぐに口に含んで少  
しずつではあるが、母乳をせがむようにち  
ゅうちゅうと吸い始めた。

「大好きだよ」

「うん！ 私も本当に大好きだよ！ お  
母さん！」

本当は母乳が出るような体だったらよ  
かったが、どんなに強く吸っても出ないの  
がもどかしく感じてしまう。でも、出ない  
とわかっていてもずっと吸い続けるこの  
子の表情は、本当に探し求めていたものを  
やっと見つけたように、晴れやかで今まで  
に見たことのない笑みで満ち溢れていた。

ああ、この子を全身で感じる事ができ  
たらどんなにいいことなのだろうか。私の  
大好きなフレンズさんが今まで生きてき

た中で最高に私を求めている状態。それを  
全身で感じる事ができたら、たぶん一生  
忘れられない経験になると思う……。

「ちよつと待っててね」

「えっ、お母さん、私もつと一緒にいたい  
よ！ 離れちゃ、やだよお……」

さつきまでのうれしそうな声とは打つ  
て変わって本当に寂しそうな声がした。見  
ると、目をつぶっていなながらも本当に今に  
も心が折れそうな表情をしている。

「ほんの少しだけ、ね」

そうニホンオオカミさんに言うと、私は  
ズボンと下着も全部脱いで全裸になる。そ  
うしてまたあの子を抱きしめる。

「ほら、またお母さんだよ」

「わあっ、お母さん！ 少しびっくりしち  
やっただけど、またお母さんだよ！」

そうあの子は叫ぶと今度はさつき以上  
に強く、きつく私を抱きしめる。そうして  
全身を使って私の体にすりすりとして体をこ  
すりつける。もう絶対、二度と離れ離れに  
なりたくないというそういう意志を感じ

るかのように私のいろんなところにキス  
をまくる。口にも。頤にも、頬にも、胸  
にも、お尻にも、太ももにも、そして私の  
大事なところにも。

ずっとずっとニホンオオカミさんの激  
しいハグを受けている私はいつしかニホ  
ンオオカミさんとずっと一緒に暮らすこ  
とができないだろうかとも考えてしまう。  
でもそれは許されないことで。人間が絶滅  
させた動物だから、せめて私ができるのは  
「お母さん」の代わりになるという役目だ  
け。本当に一緒に暮らすなんてこと、絶滅  
させた生物として許されないことだと私  
自身をいさめた。

何時間も、何度でもニホンオオカミさん  
は私にキスをしたり、母乳が出ないとわか  
っている乳首をずっと吸い続けたりした。  
そしてだいたい過ぎてから、こと切れたかの  
ようにニホンオオカミさんは眠りについ  
た。その顔には、さつきまでのような悲哀  
に満ちた表情はどこにもなく、本当に安ら  
かで、天使のような表情がそこにあった。

#### 四

次の日になって実験を再開すると、今ま  
での遺伝子データ解析の不調が嘘のよう  
になおり、ニホンオオカミさんの検体採取  
はその日のうちに終了した。実験の終了を  
知らせた時のニホンオオカミさんの表情  
は本当に晴れ晴れとしたもので、久しぶり  
にサーバルさんやカラカルさんと会うこ  
とを楽しみにしているようだった。

「じゃあカコさん、私はパークに戻るけど  
研究頑張っつてね！」

「本当にこっちこそ、長い間の実験ありが  
とう」

そう私はニホンオオカミさんをぎゅつ  
と抱きしめた。その時だ。ぼそっと私の耳  
にささやき声がした。

「昨日、夢の中だけとお母さんに会えたよ。  
また……、たまに、いいかな？」

私はこくんとうなずいた。私はニホンオ  
オカミさんの願いを完全になんてあげ  
ることは一生できない。群れみんなを連

れてくることも、本物のお母さんを探し出すことも。でもそれは絶滅させた人間の負うべき責任であるということも承知しているつもりだ。だからこそ、私はニホンオオカミさんのその願いに「代わりのお母さん」という形で応えることがせめても

クの中でフレンズさんがどうしても必要となる場合の検体採取は行うようにし、研究所にて行わなければならない場合も原則としてその日の実験終了後はパーク内に速やかに帰ることができるようにした。

たちと何かお話ししたり、触れ合ったりするということがなくなってしまったことは本当に残念なことだけど、その分フレンズさんたちが研究によって感じるストレスや苦しきといったものから解放されたと思うとそっちのほう嬉しい。それにフレンズさんのことはいつもミライのほうから聞いているし、私にはもう一つほかの研究者には秘密のあれがある。

あれ以来いつも夕方になって研究所からいったん外に出ると、あの子が待っている。

その後、私は仮説に基づいて残っているフレンズさんをいったん寮からもといたジャパリパークへと戻ってもらい、しばらくたってから改めてパーク内で同じように遺伝子採取を行ってみた結果、遺伝子解析は見事に進んだ。おそらく寮にいるという状態こそがフレンズさんたちにとって苦痛になってしまっていたからそれが遺

寮は改装され、新しくパークの中にある様々な気候を再現し、実際にパークに建設する前に使い心地やフレンズさんの生態にあった機能を研究するための施設になった。しかし、私は今後ごく限定された環境の実験に必要なかもしれないというもってもらいたい理由をつけて一部の寮の設備を残してもらった。そしてその残してもらった設備の中にはあの部屋も含まれている。

「カコさん、こんばんは」  
「ニホンオオカミさん……」  
「また、あれ、いいかな……？」  
私はニホンオオカミさんにうなずくと、一緒に手を取って研究所の敷地内を進む。進んだ先にあるのは例の取り壊されなくて済んだあの部屋だ。

伝子解析の部分へ影響していたのだと思う。特に空想上のフレンズさんや絶滅種のフレンズさんはその影響が特に出てきてしまったと思う。

その後も何度もフレンズさんたちにサンプルをとったりすることはあるものの、すべてパーク内で行われていることなので、その専門のスタッフがすべてやってくれる。そのために直接私がフレンズさんたちに会って何かをするということがめっきりと減ってしまった。フレンズさん

部屋にたどり着くと、ニホンオオカミさんはわかってるかのよう目隠しのため鉢巻をして、私は白衣もTシャツも下

このことを発表したところ、しばらくしてからフレンズさんたちの実験寮は閉鎖されることになった。今後はなるべくパー

めつきりと減ってしまった。フレンズさん

部屋にたどり着くと、ニホンオオカミさんはわかってるかのよう目隠しのため鉢巻をして、私は白衣もTシャツも下

着もすべて脱いで全裸になる。

「さあ、おいで」

「お母さん！ 今日も会えたね！」

そうしてまたこの子と一緒に眠るまでずっと親子ごっこを楽しむことになる。今日も私の乳首やいろんなところにニホンオオカミさんはキスをして、そして体をこすりつける。

おそろくなにも事情を知らない人から見たら、変なプレイだと思うかもしれない。あるいはフレンズさんを使った遊びだと言われてしまうかもしれない。でも、それがこの子の心をいやすことにつながるのなら、この子の日々の支えになるのなら、私はそんな恥ずかしいことでも迷うことなくしたいと思っている。

「えへへ……、お母さん……、大好き……。ずっと、ずっと一緒……」

今日もそうしてニホンオオカミさんは私の腕の中で深い眠りへとついた。おそろく、この営みは私がこの研究室で何かしらのことがあっていられなくなるその日まで

で続くことになると思う。果てしなく、長く続くであろうこの長い長い営み。でも、彼女の願いが叶うまで私はそれを続けると思う。

「おやすみ、ニホンオオカミさん。そしてごめんね」

そう、この営みこそが絶滅してしまったニホンオオカミさんに対して人間の私ができるせめてもの償いであり、それが私の幸せなのだから。

終

これもまた、輝き？

WAROSU

「ああ！ カコ博士！ 流石に夜這いは  
まずいですって！」

「ユリ、君は何を言っている？ こういう  
のが君の望みなのだろうか？」

ここはジャパリパークにある研究施設  
の近くにある女性寮の寝室。そこで私こと  
ユリは、なんとあの憧れのカコ博士に夜這  
いされたのだ！

ベッドで寝ている時、腹部にズシつとし  
た重い何かのしかかるのを感じ目が覚  
めると、そこには全裸のカコ博士の姿が！  
体中が赤く火照り、発情期の獣の如く  
荒々しい呼気、蕩けた双眸は獲物である私  
を巨大な双丘越しにしっかりと捉え、下の口  
からは大量の涎が垂れ流し状態になっ  
ている。微睡みの中私が博士を認識するより  
も先に、博士は私の寝間着をはぎ取り、上  
半身をむき出しにして私の胸を揉み出し、  
意識が明確になってきたところで今に至  
る。

はつきり言ってこの博士の行動は傍か  
ら見ても、私から見てもまさしく「異常」  
と呼べる光景だろう。だが先程博士が言う  
通り、これは私の「望み」でもあった。

何故なら私は博士の事を好いていたか  
ら。  
クールビューティを体現するかのよう  
な凛々しき整った顔！

思わず見惚れてしまう美しきボディラ  
インにプロポーション！  
そして一見クールに見えてかなりの動  
物好き（これはあくまで職員達による噂だ  
が、あのレンズ等動物絡みになると話し  
や垂涎が止まらなくなるらしいパークガ  
イド兼調査隊長のミライさんが無類の  
動物好きなのは、カコ博士による影響が大  
きいらしい）というギャップ萌え！  
そんな憧れの人物と「ひとつになりたい」  
という願望に、私も思わず下の口から涎が  
溢れ始める。

身体も風呂に入った時以上に火照って  
いくのが分かった。  
そんな正に夢のような体験に、異物が一  
つ。

「：リ」  
声だろうか？ 何やらノイズのような物  
が聞こえ始めたのだ。  
最初は小さかったのだが、一度耳に着く  
と離れない上に徐々に大きくなっていく。  
大きくなっていくにつれて目の前にいる  
博士の姿がぼやけ始めた。

「：リ」「：ユリ」  
声は私の名前を呼んでいるらしい。  
妙に聞き覚えのある声の主の正体が分  
かった瞬間、薄暗かった寝室がまるで閃光  
弾がはじけたかの如く眩い光で真っ白に  
なり、背中に大きい何かがあぶつかる衝撃を  
受けた。  
残念な事に「カコ博士の夜這い」は文字  
通り夢物語。今私がいるのは寝室ではなく、



研究棟にある食堂で、私は仰向けに倒れていた。目の前にいるのは裸姿の博士ではない、声の主こと同僚のムツキだった。

同僚と言っても同時期に採用されただけで研究部署は違い、ムツキはフレンズの、私はセルリアンの研究をしている。

「まーたトリップしてたわねマユリ」  
ムツキの呆れ果てた顔を覗かせながら私に腕を伸ばした。

「マユリ」と言うのはムツキが勝手に名付けたニックネーム、「マーゲイのフレンズ」並に妄想を爆発させたユリ」から来た名前だ。(ついでに見た目も似ているからというのも理由の一つ)

事情を知らない他人から本名と間違われかねない為再三その名で呼ぶのは止めるように言っているのだが、ムツキに改める気は無いらしい。

彼女にとって聞き慣れたであろう文句を言いながら私は腕を伸ばして起こしてもらった。

「自室ならともかくこんな公共のところ

でトリップするなんて、あなたちゃんと休んでる？ もう昼休み終わるけど」

ムツキは腕時計を確認しながら言った。残りは大体15分といったところだ。

「ご心配どうも。確かにセルリアンの研究は難航気味でしたが、今日は運良くサンプルが手に入ったので、上機嫌だっただけです」

私は白衣のポケットからシャーレを取り出した。中には極小サイズのセルリアンが入っており、抜け出さないようしっかりとセロテープで封をしてある。

「うわちっちゃ！ よくこんなの見つけられたわね！」

「朝の散歩してたら偶然……。今後はこの子スキャン等をして徹底的に調べ上げる予定ですが、ムツキさんはフレンズの研究進んでいます？」

私の質問にムツキはばつが悪そうに答えた。

「最初こそは順調だったんだけどね……。サバル等の現存種、マンモス等の絶滅種、

そしてセイリユウ等のUMA種の力を借りて、彼女らの服を含めた体の構成の秘密とかは大分解ってはきたからそれをレポートに纏めるつもり。後は例の子達を捕まえる事が出来れば文句ないんだけど」

どうやらその「例の子達」がムツキの悩みの種らしい。サンドスターが動物もしくは動物だったものに触れるとフレンズになるのはもはや研究員のみならずパーク職員全員が基礎知識レベルで周知されている現象だが、稀に見た目はフレンズなのに中身は動物のままなイレギュラーが生ずるらしい。(フレンズの存在そのものが十分イレギュラーではあるが)

それが「例の子達」、コードネームはビースト。

フレンズとの見分け方は、体内から禍々しいオーラのような物を噴出していることや、暗闇だと身体全体がぼんやり光って見える事。

ムツキ曰く、どうやらこの発光現象はフレンズの獣部分を構成する通称けものプ

ラズムの崩壊が関係しているらしいが、実際に捕まえないことには何も言えず、いざ捕まえようにも攻撃性も警戒心も高く捕まえるのも一苦労、運良く捕まえたとしてもそのビーストは手遅れで、程無くして動物に戻ってしまうのだからか。

とどのつまり向こうも四苦八苦しているという事だ。

そうこう話しているうちに休憩時間は終わり、私もムツキもそれぞれの持ち場へと戻っていった。

「えーっと『スキャン結果によると、セルリアンの体構成はサンドスターと同質。サンドスターは生き物等に生命力の向上を促すのに対してセルリアンは全くの逆で、生命力の減退を促すと思われるが、実際セルリアンは生き物等から生命力といった輝きを吸い取り自身の体内に保存していることが判明。体色が黒色に近い程吸い取る力が強いが、徐々に色づくとその力は劣化する。セルリアンが乾いたスポンジ

だとするならば輝きは水のような物で、サンドスターは大量に水を含んだスポンジに例えられるだろう』つと」

私は研究室のデスクで今回のレポートを書き上げていた。やはりサンプルがいてくれると研究が捗る。

そのせいかすっかり外は夜に。

今日はこのぐらいにして明日また続きをしようと思えば、お風呂に浸かり、寝間着に着替え、ベッドの上で気分転換に軽く携帯ゲーム機を起動した。

今考えれば、私はこの時相当浮かれていたと思う。シャーレの封は大丈夫だったが、シャーレそのものの管理が杜撰だったが為に捕らえていたセルリアンに逃げ出すスキを与えてしまったのだから。

私とその事態に気付いたのはゲームのクエストを終えた直後、ここに来るまでにスポイトをコピーしたであろうセルリアンに体を刺された。

血ではない何かを吸い上げられ、セルリアンはそれを糧に急速に大きくなってい

く。

私は慌てて払いのけたが、セルリアンはグニャグニャ変貌しながら寝室から出ていった。

このまま逃がすのはまずいと思い寝間着姿のまま逃げたセルリアンを追いかける。

遠目にだがセルリアンを発見。廊下でスポイトの姿から段々上半身だけの妖怪にかけてけに近い姿に変化しながらカコ博士の部屋へと逃げていくのが確認できた。

博士の悲鳴が聞こえたのはその直後、私は慌てて部屋へと突入する。案の定博士が襲われていたが、その光景には既視感があった。

博士が襲われているのはベッドの上、セルリアンは私の姿を型取り、馬乗り状態で博士の寝間着をはぎ取り露わに合った豊かな胸を揉んでいた。私の存在に気付いてないのか一心不乱だ。

立場が逆転していたが、私が昼に見た妄想内容が大体再現されていたのだ。

一気に恥ずかしさや博士への罪悪感が大きくなり、部屋にあったモップでガツンと一発決める。

ビシ！ とひび割れた音がしたがまだ致命傷には至らず、こっちに気付いたセルリアンは「邪魔者は消す」とでも言わんばかりに私に襲いかかってきた。

真正面から見ると私に似ていて気味が悪い。なんとか払いのけ、床に倒れたところをすかさずモップで突いた。

今度は上手く行ったようで、セルリアンはサンドスターとなり四散、何とか危機は脱した。

「博士！ 大丈夫ですか!？」

博士は放心状態で、胸をさらけ出したまま虚空を見つめていた。「何があったのか理解不能」とでも言いたげだが、寝込みを襲われたのだから無理もない。あられもない姿になった博士を見て「こんな事になってしまったのは私の責任だ」という気持ちでいっぱいになり私は涙が溢れ、思わず博士に抱き付いた。

騒ぎを駆けつけた他の女性研究員たちにもその姿を目撃され、博士が恥ずかしさで「頼むから離れてくれ!」と懇願しても私は泣き疲れ眠るまでお構いなしだった。

次の日の病室。

「あの時は「とうとう妄想だけ留まらず実行に移したか」と思ったわ」

ムツキが机に頬杖を突きながらため息まじりに話す。

「本当面目ないです……博士にも何て詫げればいいのか……」

「まあ二人とも無事だったんだし、終わり良ければ総て良しでしょ」

実際は違うのだがムツキは私の事をフオーロしてくれているようだった。

そんなとき不意に病室の入り口から「それはどうだろうか」と誰かが私達に声をかけた。カコ博士だ。

「ユリ、あの夜君の話が確かなら、あなたはセルリアンに「妄想力」を奪われたのでは?」

博士は見抜いていた。あの夜の一件から博士関係なしに妄想が出来なくなっていたのだ。指摘に思わずコクリとうなずく。気分を紛らわせようと奮闘しようにも、頭には浮かばない。無事とは言いにくい。

セルリアンに奪われた輝きは、そのセルリアンを倒したところで戻ってくるとは限らないことは知っていたが、ここまで辛いものだとは思わなかった。

博士は私を優しく抱きしめた。

「無茶させてごめん」と誤った。

普段の私なら興奮していただろうに、今は博士のありがたさは感じつつもそれ以上の感情が湧かない。

そこにムツキが茶化すように「胸揉ませたら元気になりますよ」といらぬアドバイス。

博士は赤面し「何馬鹿な事を言っている!？」と即座に否定したが、どうもその一言は私に効いたらしく、気づいたら一筋の鼻血が垂れていた。

血の付いた胸元を見た博士は呆れつつ

も安堵の表情を浮かべ、ムツキは「やっぱりあなたはマユリだわ」と控えめに笑った。私の輝きは、ほんの少しだけ戻ったようだ。

終わり

## スリーピング・ステインキイ

たなか

カコ博士は今日も研究室とパークを行ったり来たりしている。あの人はとんだ働き者だ。絶滅種の復元に命を燃やしていて、現に数種類の絶滅種がアニマルガールとして蘇った。カコ博士のおかげだ。小さい頃の悲しい出来事が動力源になっていると言っていた。それでも凄い。基本的に怠け者の僕とはえらい違いだ。

あの人を見ていると羨ましくなる。パークのアニマルガール達はみんなカコ博士に懐いている。特に絶滅種なんか、生みの親みたいなものだから懐き方も段違いだ。あの人の母性にも似た優しさのおかげだろう。彼女達と戯れているカコ博士を見ると、本当に羨ましい。僕なんか、顔を見ただけで追い回されるし……ドロップキックとか横十字とか、誰が教えたのか分からない高度な技を毎日かけられるものだから研究室に籠るようになった。その点、カコ博士は……研究にも没頭し

てパークにも顔を出して、いつ休んでいるんだろうっていう位動き回っている。服だって何日も休まず動き回っていたら替える暇無いだろうし。ていうかファッションという概念が無さそう。いつもの白衣に、薄紫のタンクトップと黒の七分丈ピチピチパンツ、そしてそこからすらっと伸びた足には白のスリッポン……多分これが一番動きやすいんだろうな。カコ博士の貴重なオフ日プライベートシーンを偶々お目に掛かれた時もこの恰好だった。それでも超絶な美貌に救われてちっともダサくない仕上がり。過去がもうちょっと違っていたら絶対モデルになっていただろう。

とにかく、カコ博士の体調が最近心配になる。ここ一週間は本当に寝ていないんだ。パークでフレンズ達と触れ合ったり一緒に遊んでみたり、研究室にくるなりいきなりその日のパークでの出来事をもとに実験やら何やらやりまくっている。こんな蒸

し暑い日が続く中、このままだと倒れてしまうんじゃないかとひやひやする……そうこうしていると、カコ博士が来た。

やっぱり疲れているみたいだ。笑顔は眩しいし明るい様相だけど目の下の隈はどうやっても隠せない。外がよっぽど暑かったのか、全身汗だくにもなっている。

「お疲れ様です、博士」

僕がさりげない挨拶を投げ掛けると、カコ博士はいつもと変わらない様子で返す。「お疲れ、田中君。今日もみんな元気で何よりよ」

そしていつもと変わらない口調。明るい笑顔を振り撒きながら机に向かい、椅子に腰掛ける。ただ、やっぱり疲れを隠せていない。右腕をぐるぐる回して肩の凝りを少しでも癒そうとしている。無意識なのかどうなのか、気丈に振舞おうとしているけど疲れている様を見せつける動作が大きい。

すると博士がバッグから何百枚ものA4用紙を取り出し、そのまま机の上に大きな音を立てて置いた。

「わっ！ 凄い書類の数……」

「この一枚一枚に今日のフレンズ達一人ひとりの大切な情報が詰まってるのよ。その日の個々の体調とか動向、気持ちの動き等々、いくつもの視点から分析してフレンズにとって最高の環境を常に維持し続けるの。何か異変があつたらすぐに気付けるし、それによつて今まで絶滅してたとされる種の復元の手掛かりにもなるからね」

「それ全部、今日一日でとつたんですか？」

「当り前よ、これでも相当簡潔に纏めた方よ。これも全部パークやフレンズの為、そう思えば全然苦じゃないわ」

と、書類のデータをコンピュータに移して何やらいっぱい入力する博士。この人のやっている事は僕じゃ結構付いていけない。僕だって相当勉強した筈なんだけど、カコ博士の頭は遥かに追い越していく。「そうねえ、ギンギツネちゃんとフェネツ

クちゃんに発情期の兆しが出てたわねえ……暫くアライグマちゃんを隔離した方が良さそうねえ」

カコ博士がぶつぶつ言いながら作業している。そう言えば食事を摂っていないんじゃないか。小休止すら満足にとっていないカコ博士、このままだと本当に倒れちゃうんじゃないか。さりげなくパンを置いてみる。するとすかさず手に取って一気に丸呑みした。蛇かよ。そして博士の作業はまた続く。

「B地点にセルリアンの兆候……まだ脅威という程では無いけど……」

セルリアン！ そう、渋谷にあるビルの名前……じゃなくて、かつてパークを絶望のどん底に陥れたとされるあの怪物！あれがまたパークに……でも、博士は冷静に作業を進める。

「今のうちに手を打たないと。あそこは絶滅種のフレンズがいる所だし、これ以上成長されたらひとたまりも無いわね。そうね、まずは地区の警備班に厳戒令、そしてフレ

ズ達に纏<sub>レ</sub>綱<sub>レ</sub>綱<sub>レ</sub>雑<sub>レ</sub>販<sub>レ</sub>剩<sub>レ</sub>憶<sub>レ</sub>纏<sub>レ</sub>撃<sub>レ</sub>纏、それからセルリアンの鬨<sub>レ</sub>纏<sub>レ</sub>糊<sub>レ</sub>纏<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>S<sub>レ</sub>纏上<sub>レ</sub>S<sub>レ</sub>を採取して邏<sub>レ</sub>雑<sub>レ</sub>蠖<sub>レ</sub>纏<sub>レ</sub>紳<sub>レ</sub>螂<sub>レ</sub>纏の最適化……」

よく分からない事を呟きながら超スピードでコンピュータに打ち込んでいく。ていうか、目が据わっている。恐い。僕より年下の筈なのに。

「これで一旦脅威は免れる……あとはパーク全体に被害が拡大しないように、フレンズ達に纏<sub>レ</sub>綱<sub>レ</sub>綱<sub>レ</sub>綱<sub>レ</sub>蛹<sub>レ</sub>蝸<sub>レ</sub>纏<sub>レ</sub>溢<sub>レ</sub>の投与、鬨<sub>レ</sub>纏<sub>レ</sub>纏<sub>レ</sub>纏<sub>レ</sub>纏<sub>レ</sub>纏<sub>レ</sub>纏<sub>レ</sub>した後に菴<sub>レ</sub>輔<sub>レ</sub>隠<sub>レ</sub>纏<sub>レ</sub>纏<sub>レ</sub>纏<sub>レ</sub>纏<sub>レ</sub>纏<sub>レ</sub>纏<sub>レ</sub>した上  
S◆<sub>レ</sub>纏<sub>レ</sub>後<sub>レ</sub>i<sub>レ</sub>纏<sub>レ</sub>纏<sub>レ</sub>S<sub>レ</sub>纏<sub>レ</sub>逡<sub>レ</sub>勳<sub>レ</sub>函<sub>レ</sub>纏<sub>レ</sub>をした上で蜒<sub>レ</sub>輔<sub>レ</sub>蜈<sub>レ</sub>画<sub>レ</sub>雑<sub>レ</sub>綱<sub>レ</sub>輔<sub>レ</sub>お<sub>レ</sub>綱<sub>レ</sub>纏<sub>レ</sub>すれば大丈夫……」

凄い、後半が全然分からない。多分頭の悪い事を言っているんだと思う。最早こっちの事は気にしていない。そのまま待つ事五時間……

「あー、終わったあ」

カコ博士が大きな伸びをしながら椅子の背もたれを深く押す。そのまま背中を押し付けぎしぎしと椅子を揺らす。間髪入れずに大きな欠伸。やっぱり疲れたんだ。ここ一週間そうだ。流石に眠気が来ていてもおかしくない。気付いたらもう深夜になろうとしている。すると暫くして

「じゃあ、夜の見回りをやらなきゃ」

新喜劇並みにずっとつけてしまった。まだ働くか。流石に止める。

「はは博士、流石にもう休んだ方がよろしいのでは」

「何を言ってるの、夜行性のフレンズもいるんだから、その子達のデータもとらなきゃしょうがないでしょ？ まだ休んでる暇なんか無いわ」

と、そのまま行ってしまった。こっちの気も知らずに……本当に過労死してしまっただろ。ついでこの間もどっかの企業が若い女性を過労死させて倒産に追い込まれたっていうのに。結局出て行ってしまった。

僕も気晴らしに外へ出てみる。何てこっ

た、夜中なのにこんなに暑いなんて。一瞬で汗が噴き出てバテてしまう。こんな中一週間もぶっ通しで……カコ博士の鋼の心身を思い知らされた僕は早々に研究室へと戻る。するとそこに籠っていた……何だかつんとくる汗の匂い。カコ博士……当然風呂どころかシャワーも浴びれていないだろうから……仕事に熱中するあまり自分の体臭にも無頓着になってしまっただけ。とりあえず消臭スプレーを部屋中に吹き掛ける。

そして重い耽る。ここまで博士がパークに心血を注ぐ理由……僕はカコ博士の過去をちよつとしか知らない。多分あの若い体をあそこまでさせる何かがあった筈だ。でも考えていたってサボリ性の僕には分からない。ぐるぐる考えていてもしようがないから、僕の仕事を片付ける。そして二時半。これで良いべ、うん。片付いた仕事を見やり、すかさず寝る。

起きたら八時半。随分長い事寝たなあ。

欠伸をして寝惚けを直し辺りを見渡すと、研究室には僕一人だけ。まだ帰って来ていないとは、随分研究熱心な人だ。ここまでくると最早皮肉を言いたくなってしまうけど、大人しく帰りを待つ。僕の仕事は一応終わったし、帰って来たら僕も今日非番だしどっかへ行こう。と思っていたら、研究室のドアが開いた。

「あー、ただいまあ」

その声に振り返ると、カコ博士がいた。また汗だくで、全身にまた芳醇な香りを漂わせて。でも何かが違う。いつも以上に眠気を押し出した様な表情。元気だった博士がいきなりこんな疲れた感じを出して来るなんて……とうとう限界か？

「は、博士……随分眠たそうですね」

「まあねえ……もう一週間寝てないから流石にねえ……見回り中もうつらうつらだったから……」

と、どこかから取り出した大きな段ボールを取り出してごそごそやり出す博士。

「さっきなんか睡魔に負けそうになって、

いい加減休めってライオンちゃんにぶたれちゃってねえ、もーまいっちゃやうよねえー」

心なしかカコ博士の語彙力も下がっている気がする。そして段ボールから取り出したのは……蛇のぬいぐるみ？

「じゃーん。へびさん寝袋おー」

カコ博士が満面の笑みで僕に見せた、アミメニシキヘビ風のぬいぐるみ。なんと、これで寝袋だという。何と悪趣味な……はらりと落ちた説明書を見てみると、蛇の口に身体を入れて頭だけ出した状態で寝らしい。何と悪趣味な……

「通販で見つけちゃってねえー、かわいいからかったのお」

「そ、そおでつか……」

「じゃあちよつと仮眠とるねえ」

「は、博士、本当にそれで寝る気ですか」

「あとのおしごとよろしくねえ」

「ちよ、ちよつと？」

僕の戸惑いを無視して、カコ博士がベッドに乗り込む……博士、土足！ ベッドの

上！ 何てこった、睡魔にやられてまとも

な思考が出来なくなっている。そして蛇の寝袋の中へ……頭からいってる！ 博士、

それ窒息しちゃう！ ああ僕の心配空しくカコ博士が蛇の寝袋に頭から呑み込まれていく。しかもサイズがかなりきついらしく、身を振らせながら入って行って寝袋をばんぱんに膨らませている。そして胸、腹、太腿と入って行き、遂には足首から下を除いた全身が寝袋の中へと入って行った。

今、僕の目の前には蛇の寝袋に頭からずっぽり入ってスリッポンを履いた両足だけをはみ出したカコ博士が映っている。寝袋の布に阻まれて寝息は殆ど全く聞こえないけど、ベッドの上で微動だにしないのを見るとかなり熟睡しているようだ。流石、一週間分の疲れを癒す勢い。寝返りとかも全然しない。

「カコ博士……」  
思わず呟いてしまう。その時、僕の脳に

得体の知れないものを覚える。何だと思ってみると、これまた得体の知れない興奮に包まれているのだ。

そう、何たって、蛇形の寝袋に全身を突っ込んだカコ博士は今、その口から両足首から下を出している。まるでカコ博士が蛇に食べられてしまった様な……頭から食べられてしまったというグロテスクさと、その綺麗な両足だけはまだ外界に留まっているというのとがアンバランスに組み合わさった妙なエロス……子供の頃、蛇に頭から食べられた獲物の後ろ脚が口からはみ出ている画像を見て、物凄く興奮した事がある。あれを初めに見た時は何日も頭から離れず、他の事がまるで手に付かない位の胸の高鳴りだった。

今のカコ博士も、それと全く同じものを僕に見せている。ああ、寝袋だと思っていたらそういうタイプの本物の蛇だった、それに気付かなかったカコ博士は頭から食べられて足だけを口からはみ出して……って、そんな訳無い。これはただの寝袋だ



ぞ、こんな所で愚息をおっ勃てる訳には……でも、見れば見る程、足しか見えないというのが何ともそそってしまふ。たまらず近付いてみる。

あつ！ 今、カコ博士の両足がぴくんと動いた。寝袋に吞まれたカコ博士がほんの僅かに両足を動かした。それからゆっくりと両足を揺らし始める。蛇の寝袋の体内で微動だにしない身体とは対照的に、蛇の口から唯一はみ出した両足は何とも甘美な動きをしている。

しばし見惚れている僕の前でちよいちよいと揺れるカコ博士の足。白のスリッポンを履いたままで少し寝相悪くうだつているのを見やる……そうだ、スリッポンを履いているんだ。カコ博士は今、ベッドの上で土足で居るんだ。いくら何でもこれを許す訳にはいかない。女性の履物をこの手で脱がすのは抵抗感がある、でも今は爆睡中だしカコ博士の目は今寝袋の中。そつとやれば何も言われない筈……心を若干鬼にして、両足から靴を脱がす。

途端、全身の力が抜けて倒れ込んだ。何だ今のは……？ 僕は一体何をされたのか。打撃を受けた訳では無い。その証拠に、倒れた拍子に軽く打った頭以外はどこも痛くない。でも凄い衝撃だった。一旦頭を落ち着かせてみる。深呼吸をすると、真相が明らかになる。そして身体を起こし、この嗅覚に訴える強烈なものを確認しながらベッドの上を見やる。

すると、そこには靴から解放されたカコ博士の足裏があった。やっぱり……一週間休みなく動き回っていた博士のことだ、靴もその期間履きつ放しだっただろう事は簡単に分かる。一週間も靴を脱がずにいたカコ博士の足は超絶に蒸れて、僕を一瞬でこんなに弱らせる程の威力をもってしまったようだ。これがカコ博士の常識外れの足の匂いと分かってても、僕には戸惑いしか無かった。

「く……臭い……」

僕にはこの言葉が限界だった。そう、臭

いのだ。カコ博士の足裏から納豆の何万倍もの悪臭……最早セルリアンだ。パークを絶望に追いやったあの怪物の名に例えても罰が当たらない程の激臭だ。カコ博士の足裏は一週間も靴に入れられた結果、セルリアン並みに凶暴な悪臭を精製してしまったのだ。しかも何だ、カコ博士の足裏を見て更にびっくりした。靴下を履いていないではないか。驚く事に、カコ博士はこの暑い中素足で靴を一週間もの間履きつ放しにしていたというのだ！ あんなに動き回っているのに信じられない……そりゃここまで臭くもなるよ。

でも足裏そのものは可愛いんだ。五本指は綺麗な形だし、蒸れて赤味がかっているのも良いし、何より傷やくすみが全く無い。でも、そこからこんな悪臭なんだもんなあ。世の中っていうのは分からない。でも間近で見続けていたら、僕の股間に膨らみを感じた。

あろう事か、カコ博士の足の匂いで愚息が勃っている。これはどうした事か、僕に

も分からない。こんな匂いを否応なしに嗅がされ続けて脳が麻痺したみたいだ。駄目だぞ、流石にそれは……そんな僕の悩みも知らず、カコ博士の足裏は一週間ぶりに素足履きから解放されたのを喜ぶかの様にくねっている。足裏だけで踊りながら匂いを飛ばすその様に、すかさず引き寄せられてしまう。気付けば僕は、この激臭を好きになってしまったようだ。

「ああ……ああ……」

だらしない声を漏らしながら、僕の顔が徐々にカコ博士の足裏に近付いて行く。蛇の口から突き出た足裏の妖艶なダンスとそこから放たれる激臭にがっしり掴まれ、引きずり込まれる。近付くにつれ、匂いも強まる。更に足裏の踊りも段々僕を誘う様に淫靡になっていく。本体は夢の中にいるのに足だけ起きてこんなエロい事をするんだから侮れない。足裏が、おいでおいでと甘美な声で僕に呼び掛ける。そして遂に、僕の鼻がカコ博士の足裏にくっ付いた。蒸れた汗の湿り気を感じ、高い体温にほださ

れ、息を一旦全て吐く。そして足指が鼻を捉えたと同時に、思い切り匂いを吸い込む。

途端、強烈な激臭が僕の鼻腔を襲い、目の前が真っ白になった。何という事だ、足裏からゼロ距離で直接取り入れたカコ博士の足の匂いは、最早「臭い」の一言では説明しきれない程になっていた。やはり一週間もの間素足履きされていた匂いというのは強烈すぎた。さっきは距離があったから間接的に匂いの輪郭を感じ取るに留まっていたが、直接鼻を付けて嗅ぐ匂いはまた別格。本丸はまるで違った。一週間という期間、その日々事にかいた熟成度の違う足汗の匂いが同時に僕を襲っている。初日にかいた、熟成されて芳醇に仕上がった汗の匂いも、さっきかいた新鮮でガツンと来る汗の匂いも、互いが互いの良さを引き立て合って、女の子とは思えない程の激臭を醸し出している。

元々働き詰めで休みもとらないカコ博士、しかも業務上汗をかきやすい環境に居

た中で、靴下も履かずに靴を一週間も履き続けていたんだ、ここまで蒸れてしまうのも不思議ではない。靴を履くと足は当然汗をかく。しかし素足の状態で履いたらその汗を吸収するものが無いから蒸れが加速してしまう。結果的に足汗が靴の中で熟成されきって足裏に貼り付いて激臭を生み出してしまふんだ。

そして博士の履いていたスリッポン……その名の通り脱ぎ履きがしやすい靴だ。でもカコ博士は机の下で半分脱いでとりあえず蒸れを乾かそうなんて事すらせず、常に履き続けていた。そうでなくても、去年僕がここに来た時から博士は既にあの靴を履いていた。その分の汗も堆積しているに違いない。博士の足は臭くなる他なかったんだ。

カコ博士の一週間ものの足の匂いが僕を絶え間なく襲っている。足裏から放たれた激臭は僕の鼻腔を通ってすぐさま脳に行き着き、脳を全て喰らい尽くしてしまっ

た。跡にはそのままカコ博士の足の匂いが居座り、僕の脳の代役を買って出た。その最初の命令は当然、この匂いを犬の様に嗅ぎまくる事。脳が下した指令とあってはかなる事情があっても逆らえない。そのまま僕の鼻はカコ博士の足の匂いを嗅ぎまくる。蒸れきった激臭が容赦なく鼻腔を駆け抜ける。新たにやってきた匂いも続々脳に辿り着き、居座る。そして僕から言語を奪う。カコ博士の足の匂いが僕から、喋るという行為を封じてしまう。

僕にはもう、カコ博士の足の匂いを一心不乱に嗅ぐ事しか出来なくなった。僕の鼻を感じた足裏は、指をくにくにと躍らせて鼻を撫でている。それがこの激臭を更に濃厚にしている。僕は為す術無く嗅いでいる。すると足指の動きが更に淫靡になってくる。ああ何というエロさだ、カコ博士の足裏……こんなに臭いのに淫乱だなんて、どう考えても反則じゃないか。おかげで僕はもう、カコ博士の足の匂いしか考えられなくなった。最早どんな事を考えるにしても

全てカコ博士の足の匂いに変換されてしまふんだ。それもその筈、今はカコ博士の足の匂いが僕の脳味噌なんだから！

そして僅かにぼやけた視界から見える、蛇の寝袋。その口からはみ出た足裏の匂いを僕はずっと嗅いでいる……そうそう！カコ博士は蛇の寝袋に頭から食べられちゃったんだよ！ こんな凶暴な奴に手も足も出ず貪り食われて、唯一足だけがまだ食べられずに生き永らえてくねくね動いている、しかもその足が超絶臭すぎて僕を狂わせているとききた！ 完璧じゃないか！ 子供の頃に見たあの画像以上のときめきに出会った僕は、嗅ぐ勢いを更に増した。寝袋に喰われて微動だにしなくなった全身を見やりながら、唯一見える足裏にもみくちゃにされている。もつとだ、もつと僕の目の前で踊ってくれ、足裏よ。そしてそこから放たれる激臭で僕を更に狂わせてくれ。そう願ってた。すると、その願いが通じた。僕の鼻息を感じた足裏が、くすぐったさに負けてびく

んと小さく痙攣しだした。いきなりの新たなエロスに打たれ、愚息がちよつと膨らんだ。その後も足裏はびくびくと痙攣を激しくし、僕好みのダンスを間近で見せてくれている。一週間分の熟成された汗を全体に塗布した足裏のエロさ全開の痙攣は僕の全身を沸き立たせた。そしてもつとびくびく踊って欲しくなつて、嗅ぎまくる。足指もびくびくと僕の鼻を撫で繰り回して、更に濃厚になった激臭を振じ込む。まるで樂園だ。

そのまま嗅ぎ続ける。するとカコ博士の足の匂いがとうとう僕の体内に侵入して来た。そこからはもう早い。カコ博士の足の匂いはいきなり台風の如く暴れて僕の臓器を一瞬で蹴散らしてしまう。そして命からがらな臓器に激しいディープキスをして、全てカコ博士の足の匂いの奴隷にしてしまった。こうなつてしまったらもう逃げられない。僕の体内までカコ博士の足の匂いに侵されてしまったら、僕はもうこの素晴らしい激臭に溶け込むしかなくなる。

びくびくと淫靡に踊る足裏から放たれる

持ち良くなる。その時、

最高の激臭に身を委ね、楽園の扉をこじ開

(カコのアシ、くしゃいでしょおー？ ち  
っちゃいころからくしゃいんだよおー)

ける。するとどうだ、臓器はカコ博士の足

(ねーねー！)  
どこからともなく響く……これは声な  
のか、僕の心に直に響いて来た。この部屋

の匂いと結ばれようと、一様に求愛行動を

には僕と寝袋に喰われたカコ博士の足裏  
しかない筈……するとカコ博士の足指

受け入れ、結ばれる。僕の体内はカコ博士

が僕の鼻をぎゅっと掴んだ。その時、今ま  
での何百倍もの激臭が鼻腔に舞い込んだ。

普通の無味無臭な空気を寧ろ毒と認識し

あまりの事に一瞬喘ぐと、足裏が眼前でび  
くびく踊る。

てしまう程になった。血液だってそう、赤

(こっちこっち！ カコのアシだよおー)

血球はヘモグロビンに別れを告げ、カコ博

……何という事だ。カコ博士の足裏が僕  
の心に直接語り掛けているというのか。一

士の足の匂いと結び付く。こうやって僕の

体どういう……寝袋の中のカコ博士は爆  
睡中。それなのに、この超絶臭い足裏だけ

全身がカコ博士の足の匂いに上書きされ

が起きて僕の心に語り掛けているなんて。  
でも、眼前でびくびくとアピールする足裏

る。今まで僕を構成していたもの全てがカ

を見てみると、どうでも良くなる。すかさ  
ず、また鼻を足裏に付けて嗅ぎ、会話を試

コ博士の足の匂いに置き換わる。何と素晴

みる。すると、激臭に乗せて足裏がまた語  
り掛ける。

らしい現象だ。これに名前を付けるなら……

……なんて考えるまでもないか。当然の事す  
ぎて名付けるのもおこがましい。

……

ああ、カコ博士の足の匂いが僕の体内で  
臓器達と熱い夜伽をしている。超絶テクニ  
ックで臓器達全てをイカせまくっている。  
すると体内に快楽が出来上がり、徐々に気

後、  
（おにーちゃん、くんくんしゅごいからね  
えー、もつとくしゃいのががせちやうよお  
ー）

と、足指が僕の鼻をすっぽりと覆った。  
すると、これまでもとは比べ物にならない激

臭が僕の全身を蝕む。カコ博士の足の匂い、  
まだこんな力を残していたとは。足指で鼻

を覆われた事で、余計な空気が入り込む事  
無く、カコ博士の足の匂い百パーセントを

堪能出来る。素晴らしい。もう僕の思考は  
まともじゃいられない。僕はカコ博士の足

の匂いに全てを握られている。  
（おにーちゃんのおはな、おつきいー♪  
もつとくんくんしてえー）

と、足指がくにくにと愛撫して激臭をポ  
ンプの様に押し込む。臭いと自分で分かっ

……

……

ていてこんなに無邪気に嗅がせて来る足裏なんて、僕の鼻息が治まる訳が無い。もう全ての思考をかなぐり捨てて、ただ嗅ぐ。

カコ博士の足の匂いがどんどんと僕の中へ入って行く。そのまま体内に入り、快楽へと変貌を遂げる。気持ち良くなって、愚息もどんどん大きくなっていく。臭い。最高だ。

(ああー、はないきがきもちいいー♪ もつともつとぉー♪)

カコ博士の足指が更にのってくる。くにくいと踊って激臭を上乘せして、僕の体内に快楽を絶え間なく生成し続ける。ああ、もう最高。こんなに最高の足の匂いの前で、語彙なんて意味を持つものか。カコ博士の足の匂いを褒める時は「臭い」だけで充分だ。でも困った事に、カコ博士の足の匂いは早々に僕から喋る能力を奪ってしまつたから、くんくんと嗅いで褒めるしかない。でも、今のカコ博士は足裏だけの存在。こうして嗅ぐだけで、カコ博士の足裏は充分分かってくれる。

(わあ、カコのあし、とってもくしゃいんだあー！ うれしいうれしいなあー♪)

ほらね。嗅ぐだけで通じる。足裏が喜んでもっと臭いのをくれる。それに応えてくんくん嗅ぐと、更に濃厚な匂いを僕の鼻腔に届けてくれる。天国だ。カコ博士の足裏は僕に天国を見せてくれている。一週間素足履きでいてくれたおかげで、よっぽど臭い足でないと辿り着けない天国にいつも容易く到達出来た。もう、ぶっちゃけてしまおう。僕はカコ博士の足裏と結婚したい。世界で一番臭くて、たっぷりの媚薬で僕をメロメロにした足裏とどうしても結婚したい。

僕はカコ博士の足裏にプロポーズした。最初はとぼけていたけど、諦めずにくんくんと嗅いだら、カコ博士の足裏はうっすらと紅潮して、

(か、カコのあしとけっこん……わーい！よろこんでえー♪)

カコ博士の足裏がオーケーしてくれた。僕は喜びのあまり嗅ぎまくる。カコ博士の

足裏も嬉しさのあまりぴくぴくと可愛くて淫靡なダンスを披露してくれている。何と愛らしい……僕の妻にぴったりな匂いと踊り。舞い上がっちゃって鼻息を増す。すると更に濃厚になる匂い。

(ふーふだ、ふーふ♪ カコのあしとおにーちゃんがふーふうー♪)

カコ博士の足裏も舞い上がって僕の顔の上で楽しそうに踊り、激臭を振じ込む。ハネムーンはあの天国にしよう。カコ博士の足裏と僕は早速濃厚な夜伽を繰り広げる。足裏が激臭を僕に届けてくれるのを、僕は残らず喰らい尽くす。真ん中のオアシスはカコ博士の足の匂いで埋め尽くされている。そこに迷わず飛び込むと、全身がカコ博士の足の匂いに包まれる。その快楽に身を任せて底深くまで潜ろう。やがて底に着くと、それじゃ飽き足らず地中深く潜り込んで更なる激臭を追い求める。

(えへへー、じゃあおにーちゃん、もういっっちゃおーね！)

と、カコ博士の足裏がまた、僕の鼻を

覆い尽くした。

嗅げば嗅ぐ程臭くなるカコ博士の足、ここで最高頂の激臭を届けてくれた。今までの合計が一だとすれば、今のは一億だ。素足履きの本気がここで来た。この一瞬で僕の全てが破壊され、目の前が真っ白になってカコ博士の足裏以外何も見えなくなつた。それでも構わず激臭を送り届けるカコ博士の足裏。鼻をすっぽり覆った足指はくにくいと愛撫して最高の激臭を振じ込む。鼻腔を駆け抜けたカコ博士の足の匂いは体内へと突進して行き、臓器に突き刺さる。それが絶え間なく続くんだから、ひとまわりも無い。

カコ博士の足の匂いに刺された臓器はもの一瞬でカコ博士の足の匂いに転生した。その直後、体内の隅々まで暴れ回ると快楽に生まれ変わる。あまりの威力に僕の身体は痙攣する。

(くしゃいのくしゃいのとんでけえー♪  
おにーちゃんのおはなにとんでけえー♪)

カコ博士の足裏が無邪気なS心でくにくいと蠢く。その度に僕の鼻腔を攻撃するカコ博士の足の匂い。僕の鼻腔にオービスがあつたら全員速度違反だ、でもカコ博士の足の匂いだから無罪放免だ。そのまま行って良い、そして僕の体内にどんどん招く。足指は僕の鼻を撫てるのをやめず、激臭を送り込む。

(カコのあしくんくん♪ おにーちゃんのおはながくんくん♪)

カコ博士の足裏が楽しそう。絶え間なく激臭を振じ込む。ここまでくるともう、カコ博士の足の匂いは体内に入つてすぐ快楽へと変身する。すると僕の愚息が快楽にあてられて、最大サイズまで勃起しだした。もう気持ち良さに耐えられなくなる。

(くんくん♪ くんくん♪ もっとくんくん♪)

カコ博士の足裏はまだ無邪気に匂いを送り込む。僕の体内に快楽が溜まって、抑えきれなくなる。ああ、快楽が体内で暴れ回っている。でもカコ博士の足裏は知らん

ぷりして激臭を振じ込む。我慢出来ず、扱く。すると快楽が弾け飛んで、思わず喘いでしまう。全身気持ち良すぎて痙攣する。それでも扱く。その間もカコ博士の足の匂いが際限なく入つて来て僕の体内をぐちゃぐちゃに掻き乱す。

(いっっちゃえいっっちゃえ♪ カコのあしくしゃくしゃこーげきでいっっちゃえー♪)

もうカコ博士の足裏もその気だ。僕の愚息を扱く手もスピードを増す。カコ博士の足指愛撫も激しさを増す。そして、遂にその時が来た。快楽のダムが決壊して、愚息から――

激しい射精。快楽の証が白濁液となって愚息から吐き出される。それは物凄い勢いで床に叩き付けられ、少しの窪みを作った。恐るべき噴射圧で吐き出される精液は際限無く床に散らばる。

そしてその間、僕の鼻がカコ博士の足裏から離れる事は無かった。寧ろ足裏が離してくれなかった。射精の間、足指が鼻をぎ

ゆつと掴んで離れられないようにしたの

だ。そして射精の間もカコ博士の足の匂いは鼻腔に入って来る。射精によって鋭敏になった僕の鼻にカコ博士の足の匂いは強烈すぎて、猛烈な快楽が次々に生成される。嗅ぎ続けていたら射精なんか止まらないのに、嗅ぐのを止めるとカコ博士の足裏が怒るんだ。試しに息を止めてみる。すると、足指が鼻をぎゅつと掴んで激臭を振じ込む。嗅がざるを得なくなる。ずっと嗅いでいなきや駄目なんだそうだ。そんなこんなで、射精は何時間も続いた。

その後。射精がようやく止まった頃には、夕刻のチャイムが研究室に流れた。もうそんなに……そしてこの時間になっても未だに微動だにせず爆睡を続ける寝袋の中のカコ博士本体。そして、この世のものは思えない程強烈にして甘美な激臭で僕を狂わせたカコ博士の足裏……息を切らす僕の眼前で無邪気に指をくにくに踊らせて楽しそう。すると、カコ博士の足裏が

僕に聞く。

(いった？ いっちゃった？)

この問いに対する答えは一つ。でも僕の脳は今だ言葉を忘れたまま。すかさず足裏に鼻を付け、くんくんと嗅いで答える。ああ、良い匂い。すると足裏が、

(わあー、やったー！ カコのあしがおにーちゃんをいかせたあー！)

カコ博士の足裏が喜ぶ。すると

(カコのあし、くしゃかったもんねー！)

もう、聞くまでもない事を……これも、

やはり嗅いで答える。カコ博士の足の匂い

はここでも成長を遂げていて、敏感になっ

た愚息にはこの軽い一嗅ぎでも耐えられ

ず射精してしまう。すると

(えへへー！ いーこいーこ！)

カコ博士の足裏が僕の顔を撫で回す。耳

や髪までわしゃわしゃとやられる。ああ、

僕の頭部全体にカコ博士の足の匂いが……

すると、カコ博士の足裏が突如改まって

直った。いきなりどうしたんだろう。する

と、

(おにーちゃん、カコのあしにちゅーして！)

……と、足指をちゅつと折り曲げて照れ臭そうにしだした。何だ、そういう事か……ちよつと恥ずかしいのか、足指が少しうねっている。これはもうやるしかない。だって夫婦なんだし、キスなんて普通の事だ。すかさず足裏に唇を付けて接吻。すると、

自分から求めておいて足裏は大層恥ずかしそうにびくびくと揺れていた。可愛いなあ、流石僕の妻。

(……えへへー！)

足裏がはにかむ。可愛い。そして臭い。

最高の妻。そして、お互い我慢出来ずに二

回戦へもつれ込んだ。そしてそのまま三回

戦、四回戦……と続いた。

二日後。カコ博士本体がようやく起きた。蛇形寝袋から全身を出した博士は、研究室を埋め尽くす強烈な激臭にすぐさま気が付

き、えづいた。射精の色々は証拠隠滅しま

くったけど、部屋中に漂うカコ博士の足の

匂いだけは勿体無くてもそのままにしておいた。すると不愉快そうな顔で鼻を鳴らしまくり、匂いの元を辿ろうと頑張っていた。そしてふと自分の足裏に目を向け、恐る恐る顔を付けて一嗅ぎし、そのまま固まって青ざめるカコ博士。数十秒後、号泣しながらシャワー室に走って行った。

やっぱり、自分の足が臭いという事実は女の子には重すぎたようだ。足裏は滅茶苦茶臭がせにきたのに、やっぱり本体はこの匂い駄目だったか。そしてそのまま、三時間経っても戻って来なかった。

その際に、僕はあの時脱ぎ捨てられたままのスリッポンを手を取った。僕が来る前から履いていたスリッポン。確かな年季でカコ博士の足を臭くしてくれた靴。その中に鼻を突っ込んで匂いを嗅いでみる。すると僅か一嗅ぎで思い切り射精してしまっただ。何だこの激臭は。今までの何年分物芳醇過ぎる足汗の匂いが鼻腔に猛スピードで押し寄せて来た。カコ博士の靴の匂いは最早生物兵器ではないか。これならセルリ

アンを一瞬で退治出来るのでは……ああ靴から鼻を離す事が出来ない。カコ博士の足を臭くした靴の匂いが僕をおかしくする。ああふわふわしている。この感覚に溺りたい。

すると、ようやくシャワー室から戻って来た博士がドアを勢い良く開けて出て来た。手には空のボディースーツ二本。それだけ使って足を洗っていたというのか。慌てて証拠隠滅を図りスリッポンを置く。すると、その靴の方へ一直線に歩いて行き、手に取り、匂いを嗅いだ。再び青ざめると、その靴を勢い良くゴミ箱にぶち込んだ。何て勿体無い事を。捨てるなら僕にくれ！

そして数秒後、カコ博士は僕の方を向いた。涙目だ。そして……

「ねえ、田中君」

と。いきなり何だと思ったら、突然足をあげ、そのまま足裏を僕の顔にくっ付けたではないか！そして言うには……

「ごめんね田中君、あんなに臭かったのに

気付かなくて……もう大丈夫だから……」

大丈夫って、何が？ もしかして、嗅いで確かめろって事？ そんな、無臭になった足裏だなんて。何の意味があるんだ、足は臭いからこそ良いって教えてくれたのは博士じゃないか。こんなの寧ろ大丈夫じゃないよ。まして僕はカコ博士の足裏と結婚していたんだぞ。あの激臭の足裏と。それを自ら殺してしまうなんて……

（おにーちゃん！ カコのあし、あらわれちゃったよおー！ においきえちやうとこだったよおー！ こわかったよおー！）

あ、まだ意外と臭い。良かった、匂いが完全に消えていなくて良かった。そりやうだ、あんなに臭い足、洗った所で落ちないよなあ。流石僕の妻。でもカコ博士本体は、

「ね、ねえ、どうかな……もう臭くないよね？ あれだけ洗ったんだし、流石にもう臭くないよね？」

僕に匂いを嗅がせて無臭を証明しろと



いうカコ博士の恐ろしく必死な表情。臭くないと言え、という無言の圧力を感じる。答えによっては最悪の事態もありうるかも。

「ど、どう、かしら……?」

あ、涙目。カコ博士ったら……取り敢えず、無言で親指を立てたら、カコ博士の表情は晴れた。そしてどこかから取り出した新品のスリッポンを履いてまたパークへ出た。

……って、案の定靴下を履かなかったな、カコ博士。素足で履いたらまた臭くなるんだけどなあ……博士がそれに気付くのはいつになるか。まあ気付かない方が僕と妻にとっては万々歳なんだけどね。

終

カコ博士合同誌 あとがきコーナー



ポムギ

Twitter:@pomgi

特濃4.4牛乳を飲みながら  
搾乳スケベイラストを見ると  
ちんこがめっちゃバッキバキに  
なると知った瞬間、  
僕の人生が色彩を帯びた



にのじ

Twitter:@ninojisan  
pixivID:4452293

今日の隊長さんの  
ラッキーアイテムはあ〜…  
うカコ博士合同ですっ!  
どおうっぞ♪



ひたち

立派



森林浴場

Twitter:@sinrinyokujo

大好きなカコ博士の合同に  
参加できて楽しかったです!  
少しでも彼女の魅力を  
表現できていたら  
良いのですが…



がんもどき

Twitter:@Ganmodoki\_semi

カコ博士は  
しょっちゅうセルリアンに  
襲われてそうですよね



ミヨ

Twitter:@osasimilli

かこはかせすき…  
……………  
……………  
……………



ヨカ茶

Twitter:@Japari\_Cocatea

あえてライトな内容で  
いって見た。  
本当は母乳ぶちまけて  
書類や資料をダメにしたり  
掃除しても匂いがとれずに  
怪しまれたりとか  
考えたけど制作時間ががが



闇おきやお

Twitter:@yami\_okyaostini  
pixivID:3994511

カコ博士は境遇と胸部が  
とてもスケベ向きですね  
どんな性格  
してるんでしょうね



ほづきガレット

Twitter:@hazkigaleet  
pixivID:21988885

カコ博士の作った  
卵かけご飯が、たべたいな



のろり

Twitter:@nyororiso

けもフレ界の  
被虐体質女王カコ博士を  
みんなで愛でよう♡



ピタみんみー

Twitter:@vita\_minmi

この合同誌が  
発行される頃には  
3にカコ博士が  
登場してるというですね。



八九寺けぬた

Twitter:@kenu\_hachi

表情硬そうなキャラの  
にへら顔たまんねえなあ



絶対絶命

Twitter:@zettaizetumei  
pixivID:26260235

人間関係苦手な人でも  
フレンズとだったら  
エッチできるよね♡



奴佐辺栄一

Twitter:@AI Yasabe  
pixivID:3053251

カコ博士は  
絶滅フレンズの母。  
よって絶滅勢は  
カコさんの膈内に  
侵入経験あり。  
…また、けもフレ世界の  
真実を解き明かして  
しまったぞ♡

#けもフレ交接班



エクイテス

Twitter:@No101\_RR

アニマルガールは  
ミライさんになされるがまま、  
カコ博士は  
アニマルガールになされるがまま、  
ミライさんは  
カコ博士になされるがまま。



マメゾウ

Twitter:@edamamezou

カコ博士合同ご発行  
おめでとうございます！  
束の間だけでも幸せな時を  
過ごせていたらいいな…  
と思いドードーちゃんと  
イチャラブえっちを  
描かさせて頂きました！  
ありがとうございました！！



間間山

Twitter:@QUATRE\_AAAA

カコ博士はどギツイ性癖を  
ぶつけられている  
イメージが強かったので  
逆に平和な話ならば  
緩和剤になるかなと  
思って描きました。  
ただ描き終わってから  
本合同の趣旨に  
反しているような  
気もしましたが、  
カコ博士がエッチだ  
という事は不変なので  
後悔はしていません。



ジュームス山

Twitter:@jmsyml  
pixivID:406526

おっばいをおっばいかけて  
おなかおっばいですおっばい



イナシクル

Twitter:@inan\_kur

本当はもう少し下着を  
描き込みたかったですが  
画力が及ばず…(汗)  
拙い漫画ですが、  
楽しんでいただけたら  
幸いです。



ワロワキ

Twitter:@hurohuki007  
pixivID:221376

男性苦手で行き遅れそうな  
カコ博士が好きです。

根元まで入り込  
まだだれも踏み入れて  
膣内からは処女膜を破つ  
少しだけ壁のようなもの  
ら数十秒後に赤い血が

**スカーレットG**

Twitter:@kemono\_fm192hz

伝説は蘇る…。



**小怪**

Twitter:@qq625626407  
pixivID:6739433

カコ博士とオオカミが  
みんな好きになって  
ほしいです

「放たれる。  
はあっ♡はあっ♡」  
「どうですか？オスの快楽は  
火の鳥は息を荒げるカコに  
もっ♡もっ♡とお願  
いし、カコはその間

**せがれきんぐ**

Twitter:@selegakingero

あなたはひたすらエロい目に  
遭う運命なのです♡  
諦めなさい♡♡♡  
by火の鳥



**(豆)**

Twitter:@kimuseyellow

カコ博士はあそび道具(断言)

「ああ♡♡！  
おっ♡！  
カコはフレンズでも発し  
い声を上げ、床の上に仰向  
つ。顔は完全に蕩け切  
がらも、知り

**がま回**

Twitter:@gamaguchi2014

誰か、私の生殖機能も  
調査してください。



**シローフ**

可哀想じゃないカコ博士を  
書いてみたかった

「またあの子を抱き  
はら、またお母さんだよ  
わあっ、お母さん！少し  
ったけど、またお母さん  
うあの子は叫ぶと今  
さつく私を

**森の白熊**

Twitter:@shirokuma\_mori  
pixivID:12780839

カコ博士は  
フレンズみんなのお母さん。



**エリンギ竜Ryu**

Twitter:@EringiRyuryu  
pixivID:276459

はい、おはようございます、  
こんにちは、  
こんばんわ初めまして、  
つけ麺の次に  
爆乳化・母乳ネタが大好きの  
エリンギ竜Ryu  
ですうらうら〜♡っはい、  
気になった方  
twitterにpixivのフォロー  
宜しく願いますうら〜  
終わりい〜♡

博士が襲われている  
ルリアンは私の姿を型取  
博士の寝間着をはぎ取り  
滴な胸を揉んでいた。私  
いのか一心不乱だ。

**WAROSU**

レズったっていいじゃない！

「種付けプレス  
博士のおマンコにベニ  
カコ博士から獣の様な唸  
そろそろ絶頂を迎えそう  
はっ♡…おらっ♡中に出す  
おんっ♡にやかはだめ  
っ♡」

**たると**

Twitter:@taruto\_pony

おっばいとけつが  
でかいと思う。  
君もそう思うだろ？



しこりば

Twitter:@shikoripa  
pixivID:30260996

主催のしこりばです。  
カコ博士の合同誌を  
出すのが夢でした♥  
けもフレ3でもカコ博士が  
登場してほしいですね。  
そしたらカレンダさんと  
乳首洗濯ばさみ相撲  
をとってほしい。  
はっけよ〜い、のこった！  
のこった！のこった！件ッ

参加者の皆様  
印刷所のスタッフさん  
この本を手にとってくれた方々  
本当にありがとうございました。



たなか

Twitter:@tanakanovelist  
pixivID:2095076

カコ博士が  
素足履きと知ったあの日、  
嗅ぎたすぎて金玉が  
からっぽになりました。  
足裏は宇宙(血眼)

## ◆奥付◆

「カコ博士合同誌」電子書籍版

サークル：けもシコ同好会

発行日：2019年12月28日 コミックマーケット97

主催：しこりば

連絡先：shikoripa@gmail.com  
pixivID=30260996  
Twitter:@shikoripa

※この作品は「けものフレンズプロジェクト」の二次創作物です。

「カコ博士合同誌」

# 執筆者

(順不同・敬称略)

(豆)

WAROSU

イナंकル

エクィテス

エリンギ竜Ryu

がま口

がんもどき

コカ茶

ジェームス山

しこりぱ

シローフ

スカーレッドG

せがれきんぐ

たなか

たると

にのじ

のろり

はづきガレット

ひたち

ビタミンミー

フロフキ

ポムギ

マメゾウ

ミリ

闇おきやお

間間山

小怪

森の白熊

森林浴場

絶対絶命

奴佐辺栄一

八九寺けぬた

